

明治十八年九月
內務省達甲第三十二號

府 縣

犯則ニ由リ官沒シタル物件ヲ裁判所ノ囑托ニ依リ戶長ニ於テ公賣取扱タル節右公賣ニ關スル費用(物件看守者ノ手當并藏ニ關スル費用(數料筆墨紙薪炭油雜費)ハ其裁判所ノ費用ニ相立ヘキモノニ付戶長役場費ヨリ支辨セサル儀ト心得ヘシ此旨相達候事)

●裁判言渡謄本拔書費用

明治十四年十二月
司法省達甲第七號

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト心得此旨相達候事

(參照) 明治十四年十二月司法省丁第三十一號達

本年本甲第七號布告裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサル者ニ限り無代價ニテ下渡スモ不苦儀ト心得此旨相達候事

●犯人證人等實印ナキトキハ拇印セシムルノ件

明治十四年十二月
司法省達丙第十六號

治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限り從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト

心得ヘシ此旨相達候事

●小笠原島裁判事務

明治十四年十月
布告第五拾六號

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所(即チ達警始審裁判所即チ輕罪ノ權限ヲ以テ裁判セシメ)民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定メ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事
但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

●伊豆七島裁判事務處分方

明治十四年十月
布告第五十七號

伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解並ニ刑事ハ達警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事
但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

●外國人ニ係ル刑事及民刑附帶訴訟手續

明治九年九月
司法省布達甲第十二號

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中

今般左ノ通相定候條此旨布達候事

第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事並ニ民刑附帶ノ訴訟ハ檢事其他ノ警察官
東京ニテハ警視廳其ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ヘ照會シ裁判ヲ求ムヘシ
他ノ府縣ハ地方官ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ヘ照會シ裁判ヲ求ムヘシ
第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ
本人ノ望ニ任スヘシ

●朝鮮國人ニ係ル控訴被告人召喚ノ件

明治十五年八月
司法省達甲第四十三號

御國人民ヨリ朝鮮國人ニ對スル控訴ノ儀ニ付大坂控訴裁判所ヨリ甲號ノ通伺出乙號
ノ通及指令候條爲心得此旨相違候事

(甲號) 我國ヨリ在朝鮮國人ニ係ル控訴被告人召喚ノ儀ニ付伺
大坂府下秋宗清兵衛ヨリ全府寄留朝鮮國人朴琪滄ヘ係リ大坂始審裁判所ヘ出訴ノ末
別紙控訴狀之略ニ掲載ノ如ク裁判ヲ受ケ之ニ服セス及控訴候然ルニ被告人ハ右裁判後
飯國致シ現今ハ釜山浦辨察衙門中ニ罷在候趣ニ付召喚ノ手續ハ當廳ヨリ直ニ彼港在
留我國領事ヘ照會シ領事ヨリ彼ノ官衙ヘ移シ候順序ニテ可然哉別紙照會案之略相添ヘ
併セテ伺候間至急御指令ヲ乞ヒ候也

明治十五年七月二十二日

大坂控訴裁判所長判事清岡公張

大木司法卿殿

(乙號) 伺ノ趣必スシモ被告人ノ出廷ヲ要セサル儀ニ付訴狀ヲ添ヘ領事廳ヘ移文
シテ被告人ノ答辯書ヲ差出サシムル様可取計事

●清國並朝鮮國駐在領事裁判規則

明治二十一年十一月
勅令第七十一號

朕清國並朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布センム

清國並朝鮮國駐在領事裁判規則

第一條 清國并朝鮮國駐在ノ日本帝國領事ハ其管轄内ニ在ル日本人民ニ對スル民事
訴訟及ヒ公訴私訴ニシテ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ニ
屬スルモノヲ審判スルノ權ヲ有ス但治安裁判所違警罪裁判所ノ權限ニ屬スル訴件
ニ付領事ノ爲シタル裁判ハ終審ノ裁判ナリトス
第二條 豫審判事ノ職務ハ領事之ヲ行ヒ檢察官ノ職務ハ副領事警察官若クハ領事館
書記生之ヲ行フ

第三條 裁判所書記ノ職務ハ領事館書記生若クハ其他ノ館員之ヲ行フ
第四條 輕罪ニ付テハ豫審ヲ爲サハルモノトス

第五條 重罪ニ關スル豫審ノ手續及ヒ豫審終結ノ言渡ニ付故障ヲ爲スコトヲ許サス但豫審終結ノ言渡ニ對シテハ直ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第六條 治罪法ニ定ムル忌避回避ノ規則ハ之ヲ適用セス

第七條 民事訴訟及ヒ公訴私訴ノ裁判ニ對スル控訴ハ長崎控訴院重罪ニ係ル公判ハ長崎重罪裁判所ノ管轄トス

第八條 民事訴訟及ヒ私訴ノ裁判ニ對スル控訴上告ハ本人若クハ代理人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得禁錮ノ言渡ヲ除クノ外公訴ノ裁判ニ對スル控訴モ亦同シ

第九條 此規則ニ於テ領事ト稱スルハ總領事領事又ハ其代理及ヒ委任狀ヲ有シタル副領事又ハ其代理ヲ云フ

○行政訴訟

● 訴願法

明治二十三年十月 法律第五號

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
訴願法

第一條 訴願法ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ

提起スルコトヲ得

一 租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件

二 租稅滯納處分ニ關スル事件

三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四 水利及土木ニ關スル事件

五 土地ノ官民有區分ニ關スル事件

六 地方警察ニ關スル事件

其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條 訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條 各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

- 第四條 裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス
- 第五條 訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ
訴願書ノ侮辱誹毀ニ涉ルモノハ之ヲ受理セス
- 第六條 訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ
訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ並下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ
- 第七條 多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ
法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得
- 第八條 行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス
行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

- 行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得
- 第九條 法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス
其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ
- 第十條 訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得
郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限内ニ之ヲ算入セス
- 第十一條 第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以内ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ
- 第十二條 第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ
- 第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ
- 第十二條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得
- 第十三條 訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナ

- 一 海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
- 二 租稅滯納處分ニ關スル事件
- 三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
- 四 水利及土木ニ關スル事件
- 五 土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

●行政訴訟豫納金手續

明治二十三年十一月
行政裁判所告示第二號

行政訴訟豫納金手續左ノ通相定ム

豫納金手續

- 第一條 行政訴訟ヲ爲ス者ハ臨時特別費ヲ除クノ外訴訟提出ノ際ニ於テ書類送達等ノ費用ニ充ツル爲メ金貳圓ヲ豫納スヘシ
- 第二條 豫納ヲ爲サントスル者ハ當廳ノ保管金送付書ヲ以テ之ニ金員ヲ添ヘ大藏省預金局ニ納付スヘシ
- 第三條 第一條ノ豫納金ニ於テ仍ホ不足ナルトキハ追納セシムルコトアルヘシ
- 第四條 追納手續モ亦前條ニ依ルヘシ
- 第五條 豫納金ノ殘額アルトキハ訴訟事件終局ノ後之ヲ還付ス

○代言人

●代言人規則

明治十三年五月
司法省布達甲第一號

明治九年當省甲第一號代言人規則左ノ通改正候條此旨布達候事
但該規則ニ牴觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タルヘシ

代言人規則

第一款 總則

- 第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス
- 第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ依リ定式ノ試驗ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受クヘシ
- 第三條 免許ヲ受ケン代言人ハ大審院及諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲テ得
- 第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ
 - 一 未丁年者
 - 二 身代限ノ處分ヲ受ケ未ダ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
 - 三 盜罪詐僞罪ニ付キ刑ヲ受ケタル者

●第四條 第四項
ハ明治十四年司法
省布達甲第二號ノ
改正ニ據ル

- 四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者
- 五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人
- 第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ入リテ其規則ヲ守ルヘシ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲ストキハ其地組合ノ規則ヲ遵守スヘシ
- 第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スルトキハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及檢事^{檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ}執行スル者以下之レニ依テ並ニ議會長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納スヘシ
- 第七條 代言免許ハ滿一年^{月ヲ以テ算フ}ヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セんと欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖トモ之ヲ還付セス
- 第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受クル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ムヘシ引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタルトキハ期限後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得ヘシ
- 第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスニテ免許ノ效ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フヘシ

- 第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出スヘシ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代言人タルノ證ト爲スヘシ
- 第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受クヘシ
- 第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分スヘシ
- 第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ
- 第二款 議會
- 第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クスヘシ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ因リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ
- 一 互ニ風議ヲ矯正スル事
- 二 名譽ヲ保存スル事
- 三 法律ヲ研窮スル事
- 四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事
- 五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

- 六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事
- 七 故ナク時日ヲ遷延セサル事
- 八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閱ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ムヘシ若シ投票ノ數相均シキトキハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキトキハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アルトキハ之カ代理ヲ爲スヘシ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ルモノト雖モ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アルトキハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發スヘシ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ルトキハ各代言人ヨリ直チニ檢事ニ告發スヘシ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル

トキハ必ス檢事ノ認可ヲ受クヘシ但其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スル者トス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齢及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツヘシ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯ストキハ輕重ヲ量リ第二十三條及第二十四條ニ依テ懲罰スヘシ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
- 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
- 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
- 四 詞訟ヲ教唆シタル者
- 五 證據ト爲ルヘキ者ヲ捏造シタル者
- 六 他人ノ詞訟ヲ買取り自己ノ利ヲ圖ル者

七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人並ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者

第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
 一 譴責
 二 停業
 三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアルヘシ

第二十五條 譴責ハ止ク呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非ラサレハ復タ代言人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之レヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルトキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ揭示スヘシ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り現住戸長（

又ハ區長）ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受クヘシ

第二十七條 出願定月

二月八月各上半箇月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律
- 三 訴訟ノ手續
- 四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及履歷書式（書式畧ス）

● 代言人取扱手續改正

明治十三年五月
 司法省達丙第八號

諸裁判所 檢事 府縣

司法省明治九年二月第二十五號達代言人取扱手續左ノ通改正候條此旨相達候事

代官人取扱手續

- 第一條 代官ノ免許ヲ願フ者アル時ハ、檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ攝行スル者其願書及ヒ履歷書ヲ査閲シ、若シ密留ニテ履歷ノ顛末分明ナラサル時ハ、本管ニ照會シテ取調ヘタル上之ヲ試験シ、一切ノ書類ヲ纏メ、司法卿ニ進達スヘシ。
- 第二條 試験問題ハ、出願定月前司法卿ヨリ各地方ノ檢事ニ送付ス。
- 第三條 檢事ハ司法卿ヨリ受クル所ノ問題ヲ以テ出願定月ノ下半箇月間ニ試験ヲ行フヘシ、但試験ニ法律書籍ヲ携帶スルモ妨ナシ、其問題ニ之ヲ誣サ、ル旨ヲ記セシ時ハ、携帶ヲ禁スヘシ。
- 第四條 免許狀ハ司法卿ヨリ檢事ニ送付シ、檢事之ヲ其本人ニ授與スヘシ。
- 第五條 大審院裁判所並檢事ニ於テハ、代官人名簿ヲ製シ、年月日ヲ詳ニシテ左ノ件々ヲ登錄スヘシ。
 - 一 氏名身分住所年齢
 - 二 新規及ヒ引續免許
 - 三 住所移轉姓名改換及ヒ廢業免許狀紛失等
 - 四 懲罰
- 第六條 代官人ハ總テ其地ノ檢事ニテ監視シ、代官人規則ニ照シテ之ヲ取扱フヘシ、若

●代官人取扱手續第七條中刪除

明治十九年六月
司法省令丙第七
號 裁判所
明治十三年(五月)
當省丙第八號達代
官人取扱手續第七
條中及ヒ以下ノ十
四字ヲ刪除ス

●明治二十三年三
月司法省訓令ニヨ
リ第十條第十一條
手續變更セララル
●全年丙第十四號
達ヲ以テ第十一條
改正セララル

- シ、犯則ノ者アル時ハ、其處分ヲ裁判官ニ求ムヘシ、認廷ニ於テノ犯則ハ、裁判官直チニ之ヲ處分シ、後ヲ檢事ニ通知スヘシ。
- 第七條 議會ノ規則ハ、檢事之ヲ認許シ、其副本及ヒ會長、副會長、組合人ノ氏名簿ヲ司法卿ニ進達スヘシ。
- 第八條 代官人他ノ裁判所管内ニ轉住シ、又ハ廢業スルトキハ、檢事ヨリ司法卿ヘ上申スヘシ、尤モ廢業ノトキハ、其免許狀ヲ返納スヘシ。
- 第九條 免許狀紛失或ハ改名ニ係リ、書換等ニテ更ニ下付ヲ願出ル者アル時ハ、檢事ヨリ司法卿ヘ上申シ、其免許狀下付ヲ得テ之ヲ本人ニ授與スヘシ、但右出願ノ時、其願書ノ寫ヘ、檢印ヲナシテ本人ニ與ヘ置クヘシ。
- 第十條 檢事ハ、免許料ヲ收領シタル上ニテ、免許狀ヲ本人ニ授與スヘシ。
- 第十一條 免許料ハ、檢事之ヲ取纏メ、毎年五月十一月兩度ニ司法省ヘ納ムヘシ。
- 第十二條 代官人ノ處刑懲罰ハ、其都度檢事ヨリ之ヲ司法卿ヘ上申スヘシ、除名ノ時ハ、其免許狀ヲ褫奪シテ返納スヘシ。
- 第十三條 檢事ハ、停業ノ罰ヲ受ケタル者ノ免許狀ニ、某年月日ヨリ、某年月日マテ停業シタル旨ヲ裏書シ、檢印ヲ爲シテ之レヲ本人ニ下付スヘシ。

(△印ハ朱書)

免許狀雛形

明 治 司 法 省 印 年 月 日	代 言 人 免 許 シ 此 證 ヲ 授 ク	△ 何 某
---	---	-------------

△ 免 許 期 限	△ 從 何 年 何 月	△ 至 何 年 何 月	△ 停 業 期 限	△ 從 何 年 何 月 何 日	△ 至 何 年 何 月 何 日	印
-----------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---

●所屬代言人規則

明治十四年十二月
司法省布達第八號

大審院諸裁判所々屬代言人規則別紙ノ通相定候條此旨布達候事

(別紙)

所屬代言人規則

第一條 治罪法中所屬代言人ト稱スルハ大審院及ヒ各裁判所々在ノ地ニ住居スル免許代言人ヲ云フ

第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ選任シタル代言人辯護人ハ正當ノ自由ヲ証明スルニアラサレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三條 代言又ハ辯護受任中代言免許滿期ニ至リ引續營業セス又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ル迄其代言辯護ヲ擔當スヘシ

第四條 代言又ハ辯護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以テ其任ヲ闕クコトヲ得ス

第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代言人辯護人ヲ選任シタル場合ニ於テモ其謝金ハ被告人之ヲ擔當スヘシ
總テ謝金ニ付テハ出訴スルコトヲ許サス

●法學卒業業者代言營業免許ノ件

明治十三年十一月
司法省達丙第十六號

地方裁判所 檢事
檢事アラサル各縣

明治十二年五月司法省丙第七號達左ノ通改正候條此旨可相心得事

免許狀形

明 治 司 法 省 印	年 月 日	此 證 ヲ 授 ク	△代 言 ヲ 免 許 シ	△何 某
----------------------------	-------------	-----------------------	-----------------------------	---------

△從 何 年 何 月 何 日	△至 何 年 何 月	△停 業 期 限	△免 許 期 限	△從 何 年 何 月	△何 某
至 何 年 何 月 何 日					
印					

●所屬代言人規則

明治十四年十二月
司法省布達第八號

大審院諸裁判所々屬代言人規則別紙ノ通相定候條此旨布達候事

(別紙)

所屬代言人規則

第一條 治罪法中所屬代言人ト稱スルハ大審院及ヒ各裁判所々在ノ地ニ住居スル免許代言人ヲ云フ

第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ選任シタル代言人辯護人ハ正當ノ自由ヲ証明スルニアラサレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三條 代言又ハ辯護受任中代言免許滿期ニ至リ引續營業セス又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ル迄其代言辯護ヲ擔當スヘシ

第四條 代言又ハ辯護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以テ其任ヲ闕クコトヲ得ス

第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代言人辯護人ヲ選任シタル場合ニ於テモ其謝金ハ被告人之ヲ擔當スヘシ
總テ謝金ニ付テハ出訴スルコトヲ許サス

●法學卒業業者代言營業免許ノ件

明治十三年十一月
司法省達丙第十六號

地方裁判所 檢事
檢事アラサル各縣

明治十二年五月司法省丙第七號達左ノ通改正候條此旨可相心得事

文部省所轄東京大學法學部ニ於テ法律學卒業ノ者代言營業出願セントキハ明治十三年五月司法省甲第一號布達改正代言人規則第二十七條出願月第二十八條試験ニ關セス免許狀授與候條右出願ノ節ハ卒業免狀ヲ檢査シ願書ニ其寫ヲ添ヘ進達可致此旨相違候事但本文試験ニ關スルモノ、外代言人規則ニ準據スルハ一般代言人ト異ナルコトナシ

●司法省變則法學生徒卒業者代言營業ヲ出願セントキ
ハ卒業證書ノ寫ヲ願書ニ添ヘテ進達セシム

明治二十年十二月
司法省訓令第二十六號

檢事

司法省變則法學生徒卒業者代言營業ヲ出願セントキハ代言人規則第二十七條第二十八條ニ關セス免許狀ヲ授與スヘキニ付出願ニ際シ卒業證書ヲ檢査シ其寫ヲ願書ニ添ヘテ進達スヘシ

●代言人試験ヲ毎年一回トシ兩次定月ノ出願書進達及

人員申報方

明治二十年一月
司法省訓令第三號

始審裁判所本支廳 上席檢事

代言人出願定月ハ代言人規則第二十七條ノ通二月八月ノ兩次クレトモ試験ハ自今一回ト定メ四月ヲ以テ之ヲ執行スルニ付兩次定月ノ出願書ハ檢事ニ於テ取纏メ置キ試験執行後答案ニ併セテ之ヲ進達スヘシ

但出願人員ハ試験ニ先キ二月ノ下半月中ニ於テ兩次ノ總員ヲ申報スヘシ

●法學博士代言營業願書進達方

明治二十二年三月
司法省訓令第五號

檢事

明治二十年勅令第十三號學位令ニ依リ法學博士ノ學位ヲ得タル者代言營業ヲ出願セントキハ代言人規則第二十七條第二十八條ニ關セス免許狀ヲ授與スヘキニ付出願ニ際シ學位記ヲ檢査シ其寫ヲ願書ニ添テ進達スヘシ

●代言試験出願人員申報及出願書類進達方

明治二十一年十二月
司法省訓令第十八號
始審裁判所本支廳

(第三十八類學事
中學位令參看)

上 席 檢 事

代 言 出 願 人 試 驗 自 今 每 年 九 月 ヲ 以 テ 執 行 ス ル ニ 付 代 言 人 規 則 第 二 十 七 條 兩 次 出 願 定 月 ノ 出 願 人 ハ 八 月 ノ 下 半 月 中 其 總 員 ヲ 申 報 シ 出 願 書 類 ハ 兩 次 ノ 分 ヲ 取 纏 置 キ 試 驗 執 行 後 答 案 ト 共 ニ 進 達 ス ヘ シ

但 來 二 十 二 年 ハ 八 員 申 報 書 類 進 達 共 二 十 一 年 八 月 期 ノ 分 ヲ 併 ス ル 儀 ト 心 得 ヘ シ

● 代 言 出 願 人 試 驗 每 年 九 月 執 行

明 治 二 十 一 年 十 二 月 司 法 省 告 示 第 二 十 五 號

代 言 人 出 願 試 驗 ノ 儀 自 今 每 年 九 月 ヲ 以 テ 執 行 ス

● 代 言 試 驗 志 願 者 ノ 差 出 セ シ 寫 真 ヲ 檢 事 手 元 ニ 置 キ 防

奸 用 ニ 供 セ シ ム

明 治 二 十 三 年 七 月 司 法 省 訓 令 第 一 號

始 審 裁 判 所 檢 事

試 驗 ノ 儀 ハ 受 驗 者 多 數 ニ 涉 ル 節 ハ 試 場 取 締 ノ 行 届 カ サ ル ヲ 僥 倖 ト シ 他 人 ヲ 出 シ 答 案 ヲ 代 作 セ シ ム ル 等 ノ 弊 有 之 趣 仍 テ 代 言 試 驗 志 願 者 ハ 自 筆 氏 名 記 入 ノ 寫 真 一 葉 ヲ 差 出 ス ヘ キ 旨 告 示 セ シ ニ 付 テ ハ 右 差 出 セ シ 寫 真 ノ 儀 ハ 各 檢 事 手 元 ニ 止 メ 置 キ 防 奸 ノ 用 ニ 供 ス ヘ シ

● 代 言 試 驗 志 願 者 寫 真 差 出 方

明 治 二 十 三 年 七 月 司 法 省 告 示 第 十 八 號

代 言 試 驗 志 願 者 ハ 自 己 ノ 寫 真 一 葉 裏 面 ニ 其 氏 名 ヲ 自 書 シ 出 願 ノ 際 之 ヲ 檢 事 ニ 差 出 ス

● 訴 訟 法 中 辯 護 士 ノ 執 行 事 務 ハ 姑 ク 代 言 人 取 扱 フ

明 治 二 十 三 年 十 月 司 法 省 訓 令 第 四 號

裁 判 所

訴 訟 法 中 辯 護 士 ノ 執 行 事 務 ハ 追 テ 辯 護 士 ヲ 置 カ ル へ キ ニ 付 當 分 ノ 內 代 言 人 之 ヲ 取 扱 フ 儀 ト 心 得 ヘ シ 但 上 席 檢 事 ハ 此 旨 管 內 代 言 人 へ 通 達 ス ヘ シ

○ 公 證 人

● 公 證 人 規 則

明 治 十 九 年 八 月 法 律 第 二 號

朕 公 證 人 規 則 ヲ 裁 可 シ 茲 ニ 之 ヲ 公 布 セ シ ム

公 證 人 規 則

第 一 章 總 則

第一條 公證人ハ人民ノ囑托ニ應ジ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効チ有セス

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スル力アルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

己ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限リ役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効チ有セス

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ

前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効チ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ其始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル郵紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ届出可

キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ

外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡スコカラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩スコカラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學

卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐僞罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クトモ二箇月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訟訴法、商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人ヲラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代言人ハ其免狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格セサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス而識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戶長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戶長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セズ又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス

接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ

數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸柒捌玖拾阡萬ノ字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量、名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ

第四十二類 公證人

既ニ廢シタル度量衡、貨幣、曆法又ハ外國ノ度量衡、貨幣、曆法ヲ記セサルヲ得サル
場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコ
トヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ス
トキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ
欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追
加、改正、消字ノ効チ有セズ

第三十四條 證書ヲ作リタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並
ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ其治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ

公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ
若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒ
タルトキハ其證書ハ其公正ノ効チ有セズ

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ズ其親屬他人ノ代理
人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若シハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコ

トアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ズ之ニ違ヒタルトキハ其證書
ハ公正ノ効チ有セズ

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記
ス可カラズ若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セズ又ハ亡失シタル場
合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫チ原
本ニ連綴ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名
捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連綴スルコトヲ得之ヲ連綴シタルトキ
ハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本
第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權
利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効チ有セズ
正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連綴ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經

之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラヌ又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラス之ヲ渡スト雖モ其効チ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効チ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可キコトヲ命スルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ
第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連綴シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印ヒシム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件件ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命ヒ

ラレサル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出スヘシ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ
兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ
受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ
第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ
本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ

草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滞留スルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得
第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ職務ヲ行フトキハ其手数料ハ總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ野紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受クルコトヲ得
第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ
第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス
第八條ニ違ヒタル時

- 第十一條ニ違ヒタル時
- 第十三條ニ違ヒタル時
- 第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時
- 第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書ヲ爲サ、リシ時
- 第三十五條ニ違ヒタル時
- 第四十條ニ違ヒタル時
- 第四十一條ニ違ヒタル時
- 第四十二條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十六條ニ違ヒタル時
- 第五十二條ニ違ヒタル時
- 第五十三條ニ違ヒタル時
- 第五十四條ニ違ヒタル時
- 第五十五條ニ違ヒタル時

- 第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時
- 第六十一條ニ違ヒタル時
- 第六十三條ニ違ヒタル時
- 第七十四條 左ノ違犯ハ貳圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス
- 第四十三條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上參拾圓以下ノ過料ニ處ス
- 第二條ニ違ヒタル時
- 第七條ニ違ヒタル時
- 第十條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第二十八條ニ違ヒタル時
- 第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
- 第三十三條ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十六條ニ違ヒタル時

第三十七條ニ違ヒタル時

第三十八條ニ違ヒタル時

第三十九條ニ違ヒタル時

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス

第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時

第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ亦前項ニ同シ

第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生ゼシメタルトキハ之ヲ

賠償ス可シ

●公證人規則施行條例

明治十九年八月 司法省令甲第二號

今般法律第二號ヲ以テ公證人規則制定相成候ニ付施行條例左ノ通之ヲ定ム

公證人規則施行條例

第一條 公證人ハ一受持區ニ五名以下ヲ置クモノトス

若シ公證人ノ員數不足スルトキハ受持區ニ依リテハ全ク之ヲ置カサルコトアル可シ

第二條 公證人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フ可シ

始審裁判所長及控訴院長ハ公證人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ送達ス可シ

司法大臣ニ於テ公證人ヨリ願出タル住居ヲ認可セサルトキハ直チニ其住居ス可キ町村ヲ指定ス

第三條 公證人既ニ住居ノ認可ヲ受タル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セントスルトキモ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

第四條 公證人ノ役場ニハ公證人某役場ト記セル表札ヲ掲ク可シ

役場ニハ成可ク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト爲スヲ要ス
書類ハ常ニ書箱ニ藏メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置ク可シ

第五條 公證人規則ニ從ヒ試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験願書ニ履歷書ヲ添ヘ試験
期日ノ告示アリタルヨリ試験期日一箇月前マテニ試験ヲ行フ控訴院若クハ始審裁
判所ニ差出ス可シ

試験願書及履歷書ニハ本籍區長若クハ戸長ノ與書ヲ受ク可シ

第六條 試験ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス

第七條 試験委員ハ筆記試験ノ答按ヲ調査シ其合格不合格ヲ決定シタル後口述試験
ヲ行フ可シ

筆記試験ニ合格セサル者ニ付テハ口述試験ヲ行ハス

第八條 試験問題答案ノ適否ハ試験委員ノ判斷ニ決スルモノトス

試験ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リ之ヲ定ム可シ

第九條 試験委員ハ口述試験ノ大略及試験全體ノ結果ヲ記録ニ記載ス可シ

第十條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス可シ

試験ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ハ試験及第人名簿ヲ製シ之ニ及第者ノ住

所族籍氏名年齢及ヒ及第ノ年月日ヲ登錄ス可シ

第十一條 試験委員ハ試験ニ關スル一切ノ書類ヲ其試験ヲ行フタル始審裁判所若ク
ハ控訴院ノ長ニ差出ス可シ

始審裁判所ニ於テ試験ヲ行フタルトキハ其裁判所長ハ及第者ニ關スル一切ノ書類
ニ意見ヲ附シテ控訴院ニ送致シ控訴院長モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可
シ

控訴院ニ於テ試験ヲ行フタルトキハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ意見ヲ附シテ司法大
臣ニ差出ス可シ

第十二條 公證人ヲラント欲スル者ノ其願書ニ試験及第證書官記學位記卒業證書又
ハ免許狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行ヲ保證スル證書ヲ添ヘ之ヲ差出ス可シ

第十三條 公證人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判所長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付
品行ノ正否理財ノ整否等詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦
意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十四條 公證人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルトキハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ
取調ヲ爲シ且ツ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十五條 公證人願書ニハ其職務ヲ行ハント欲スル地ヲ明記ス可シ

第十六條 司法大臣公證人ヲ任スルトキハ辭令書ヲ其公證人ノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス

控訴院及始審裁判所ニ於テハ公證人名簿ヲ備置キ公證人ニ任セラレタル者ノ住所族籍氏名年齢及任地ヲ記録ス可シ

第十七條 公證人ニ任セラレタル者ハ身元保證金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債證書若シハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ム可シ

第十八條 公證人ノ納ム可キ身元保證金ノ額ハ左ノ如シ
東京及大阪 金五百圓

他ノ地方ニ於テハ

人口貳拾萬以上アル受持區 金四百圓

人口貳拾萬未滿拾萬以上アル受持區 金叁百圓

人口拾萬未滿アル受持區 金貳百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アルト雖トモ既ニ完納シタルモノハ之ヲ増減セズ

第十九條 公證人ハ身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フコトヲ得ス

公證人任命ノ辭令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保證金ヲ完納セサルトキハ公證人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公證人ノ身元保證金ハ公證人規則第五章ニ定メアル過料其他賠償ノ抵保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保證金ノ全部又ハ一部ヲ減消シタルトキハ管轄始審裁判所長ハ速ニ保證金ヲ補充ス可キ旨ヲ公證人ニ命ス可シ

公證人保證金ヲ補充スルマテ始審裁判所長ハ假ニ職務執行ノ停止ヲ命スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

公證人保證金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルトキハ始審裁判所長ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フ可シ

第二十二條 公證人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保證金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ補充セシメ若シ餘分アレハ之ヲ還付ス可シ

第二十三條 公證人其職務ヲ罷タルトキハ身元保證金ヲ還付ス可シ

第二十四條 公證人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルトキハ管轄始審裁判所ハ控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

停職者復任シタルトキモ亦前項ノ手續ニ從フ可シ

第二十五條 公證人死去失踪停職復任辭職免職又ハ轉職シタル時ハ始審裁判所及控訴院ハ其旨ヲ公證人名簿ニ記入ス可シ

第二十六條 公證人規則ニ定メアル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公證人試驗願書式履歷書式及公證人願書式ハ左ノ如シ

第一 公證人試驗願書式

公證人試驗願書式 料紙美濃紙

族籍 戶主嗣子又ハ二
三男兄弟ノ別
氏 名
年 齡

現住所 氏 名 印

年月日

某控訴院長誰殿又ハ某始審裁判所長誰殿

前書ノ通族籍年齡等相違無之候也

年月日

本籍

區長又ハ戶長印

第二 履歷書式

履歷書式 料紙美濃紙

族籍

氏 名 印

年 齡

一 何年何月ヨリ何年何月迄府縣何某ニ就キ又ハ公私何學校何塾ニ於テ何學修業

一 何年何月何々職業仕官進退賞罰等ニ關スル一切ノ件

一 公證人規則第二十條ノ各項ニ相觸候儀一切無之候

年月日

氏 名 印

前書ノ通相違無之候也

本籍

區長又ハ戶長印

年月日

第三 公證人願書式

公證人願書式 料紙美濃紙

族籍 戶主嗣子又ハ二
三男兄弟ノ別

氏 名

年 齡

私儀何^府何國某治安裁判所管下公證人受持區ニ於テ公證人ノ職務ヲ行ヒ度志願
ニ有之候ニ付御登用被下度試験及第證書〔官記學位記卒業證書免許狀〕ノ寫及ヒ
品行保證書相添此段奉願候也

現住所

年月日

氏名印

司法大臣謹殿

又

私儀何^府何國某治安裁判所管下及何^縣何國某治安裁判所管下〔某始審裁判所管下
又ハ某控訴院管下〕ノ内何レノ公證人受持區ニ於テナリトモ御命令ニ從ヒ公證
人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試験及第證書〔官記學位記卒
業證書免許狀〕ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

前後ノ式ハ
前式ニ同シ

○執達吏

●執達吏規則

明治二十三年七月
法律第五十一號

朕執達吏規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス
ヘキコトヲ命ス

執達吏規則

- 第一條 執達吏ハ區裁判所ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ及裁判ヲ執
行スルモノトス
- 第二條 執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得
 - 第一 告知及催告ヲ爲スコト
 - 第二 動産不動産ノ任意競賣ヲ爲スコト
 - 第三 拒證書ヲ作ルコト
- 第三條 執達吏ハ法律規則ニ定メタル職務ノ外裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務
ニ應スル事務殊ニ左ノ事務ヲ取扱フノ義務アリ
 - 第一 書類物品ノ送付ヲ爲スコト
 - 第二 罰金料料過料ヲ徵收シ及沒收物品ヲ取上ケ若シハ賣却スルコト
 - 第三 令狀ノ執行ヲ爲スコト
- 第四條 執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ノ監督ヲ受ク
他ノ判事又ハ檢事ニシテ職務上事務ヲ命シタルトキハ其事務ニ限リ執達吏ニ對シ

監督權ヲ有ス

第五條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ住居ヲ定ムヘシ但地方裁判所長ノ許可ヲ得タルトキハ其區裁判所管轄内ニ限リ他ノ地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ役場ヲ設クヘシ

第七條 一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判所書記ヲ經テ委任スヘキ事務トヲ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘシ土地ノ區域ニ從フヘシ

事務分配ハ毎司法年度ノ終ニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事前以テ之ヲ定ム

執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配上其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

第八條 執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ施行ヨリ除斥セラレヘシ

第一 自己又ハ其婦カ當事者若クハ被害者タルトキ又ハ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ

第二 自己又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者又ハ其配偶者ト親族ト

第三 自己カ同一ノ事件ニ付證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第九條 執達吏ハ民事訴訟ニ付テ其婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ノ爲ニノミ訴訟代理人及輔佐人トシテ法廷ニ出ルコトヲ得但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第十條 執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受クルトキハ正立ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條 執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲クル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

第一 執達吏ノ登用試験ニ及第シタル者

第二 執達吏ノ職務修習者ニシテ三箇月以上其職務ヲ修習シタル者

第三 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第四 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

第十二條 執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サルトキ又ハ之ヲ委任ス

ルコトヲ得サルトキハ命令ヲ爲シタル裁判所及検事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ速ニ其旨ヲ通知スヘシ

委任ヲ爲シタル本人ニ通知スルコト能ハサルトキ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ申立ツヘシ

第十三條 前條ノ場合其他執達吏差支アルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ掲クル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十四條 執達吏ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ

臨時職務執行ノ委任ヲ受ケタル者ハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帯スヘシ

第十五條 執達吏ハ裁判所書記ヲ經タルト否トテ問ハス委任ヲ受ケ職務ヲ行フニ付テハ定規ノ手数料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク

執達吏ハ定規ノ手数料ヲ増減シ又ハ手数料及立替金ノ外報酬ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 執達吏第三條ニ掲クル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手数料ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條 執達吏第十一條ノ場合ニ於テ臨時職務執行ノ委任ヲ爲シタルトキハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬トシテ手数料十分ノ三以上ヲ支給スヘシ

第十八條 第十三條ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタル者ハ其職務ニ付定メタル手数料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク

第十九條 執達吏一年間ニ收入セシ手数料百八拾圓ニ充タサルトキハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

第二十條 執達吏死亡シタルトキ又ハ停職免職若クハ勾留セラレタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ左ノ處分ヲ爲スヘシ

第一 官印帳簿其他職務ニ關スル書類ヲ區裁判所ニ差出サシムルコト

第二 執達吏職務上保管シタル物品及書類ノ保全ニ必要ノ手續ヲ爲スコト

第二十一條 執達吏ハ官吏恩給法ニ照シ恩給ヲ受ク其恩給年額ハ第十九條ニ定メタル金額ヲ俸給額ト看做シテ算定ス

第二十二條 執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ル

附 則

第二十三條 執達吏ヲ置カサル間ハ區裁判所書記執達吏ノ職務ヲ行フ此場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ第十一條ニ掲クル者又ハ自己ノ適當ト思量スル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

裁判所書記前項ノ委任ヲ爲シタルトキハ委任ヲ受ケタル者ニ執達吏ノ職務ニ付定

メタル手数料十分ノ七以上ヲ支給スヘシ

●執達吏手数料規則

明治二十三年七月
法律第五十二號

朕執達吏手数料規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏手数料規則

- 第一條 執達吏ハ此規則ニ從ヒ手数料ヲ受ク
- 第二條 書類送達ノ手数料ハ一通ニ付五錢トス
- 第三條 有體動産及未タ土地ヨリ離レサル果實並爲替證券其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ノ差押、假差押ニ付テノ手数料ハ左ノ區別ニ從フ

- 執行スヘキ債權額 手数料
- 三拾錢
- 貳拾圓マテ 五拾錢
- 百圓マテ 七拾五錢
- 貳百五拾圓マテ 壹圓
- 五百圓マテ 壹圓貳拾五錢

千圓マテ

壹圓五拾錢

千圓ヲ超ユルトキハ貳圓トス

若シ執務三時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第四條 執達吏差押、假差押ヲ爲ズヘキ場所ニ臨ムト雖差押フヘキ物ナキトキ又ハ差押フヘキ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第五條 民事訴訟法第五百五十六條第二項、第五百八十六條第二項、第六百十五條ノ場合及既ニ差押、假差押ニ著手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタルトキ物ヲ換價スル爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第六條 特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債務者ヨリ取上ケ之ヲ債權者ニ引渡ス場合ニ於テハ其手数料ヲ五拾錢トス若シ執務二時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス
前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖引渡スヘキ物ナキトキハ前項ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第七條 民事訴訟法第七百三十一條第一項ノ場合ニ於テハ執務三時間以内ハ手数料ヲ五拾錢トス若シ其執務三時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス
前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖船舶アラサルトキハ前項ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第八條 民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ不動産ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テハ第三條ニ定メタル區別ニ從ヒ其手数料ヲ受ク

第九條 動産、不動産及船舶ノ競賣ニ付テノ手数料ハ左ノ區別ニ從フ但競賣ニ依リ得タル金額執行スヘキ債權額ニ超過スルトキハ其債權額ヲ以テ競賣金額ト看做ス

競賣金額	手数料
貳拾圓マテ	六拾錢
五十圓マテ	壹圓
百圓マテ	壹圓五拾錢
貳百五十圓マテ	貳圓
五百圓マテ	貳圓五拾錢
千圓マテ	四圓

以上千圓毎ニ壹圓ヲ加フ

任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同シ

第十條 執達吏執行行為ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ三拾錢トス

第十一條 執達吏執行行為ヲ爲スヘキ場所ニ臨ミタル後民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ五拾錢トス

第十二條 第三條乃至第十一條ノ手数料ヲ受クヘキ行為ニハ強制執行ノ場合ニ於ケル左ノ行為ヲ包含ス

- 第一 警察上ノ援助ヲ求メ又ハ證人鑑定人ノ立會ヲ爲サシムルコト
- 第二 執行行為ニ屬スル催告其他ノ通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト
- 第三 記名證券ヲ買主ノ氏名ニ書換ヘ及必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スコト
- 第四 支拂其他ノ給付、差押金錢及賣却金ヲ受取り、交付シ若クハ供託シ又ハ受取

證書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト

第五 競賣ノ公告ヲ爲スコト

第十三條 執達吏ハ立替金トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

第一 書記料

第二 郵便料、電信料

第三 公告料

第四 證人、鑑定人ノ手當

第五 職工、役夫ノ手當

第六 有價證券ノ記名書換及流通ヲ止メタル證券ノ流通ヲ回復スル爲ノ費用

第七 人及物ノ送致費用

第八 物ノ保存並監視ノ費用

第九 果實收穫ノ費用

第十 旅費

第十四條 前條ノ書記料ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ受ク

第一 法律ニ依リ又ハ利害關係人ノ求ニ依リ證書及記録中ニ存スル書類ノ謄本ヲ作リタルトキ但法律ニ依リ交付スヘキ送達證書ノ謄本ハ此限ニ在ラス

第二 供託ヲ爲スニ際シ執行裁判所ニ差出スヘキ届書ヲ作りタルトキ

第三 差押命令ノ送達後第三債務者ノ爲メ陳述ヲ筆記シタルトキ

書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付貳錢五厘トス但十二行ニ滿タサルモ半枚ト看做シテ算定ス

第十五條 強制執行ニ關セサル告知及催告ヲ爲ストキハ其手數料拾錢ヲ受ク

第十六條 執達吏拒證書ヲ作りタルトキハ手數料拾錢ヲ受ク

拒者ノ營業場又ハ住居ノ問合ヲ爲シ拒證書ヲ作りタルトキハ手數料貳拾錢ヲ受ク

第十七條 證人ニ支給スヘキ日當ハ貳拾錢以下鑑定人ニ支給スヘキ日當ハ五拾錢以下トシ執達吏土地ノ情況ニ從ヒ之ヲ支給ス若シ一里以上ノ地ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第十八條 執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ拾錢以下ノ旅費ヲ受ク但一里ニ滿タサルモ一里ト看做シテ算定ス

右旅費ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長之ヲ定ム

第十九條 執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手數料及立替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納セシム若シ豫納セサルトキハ委任ニ應セサルコトヲ得但裁判所及檢事局ノ命令ニ依ルトキ又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ爲メ事務ヲ擔任スルトキハ此

限ニ在ラス

第二十條 執達吏ハ委任ノ終了シタル後手数料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二十一條 執達吏裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲ニ要シタル立替金ハ三箇月毎ニ確定シテ之ヲ支給ス

右立替金ハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨濟シ能ハサル場合ニ限ル

第二十三條 執達吏ハ其職務執行ニ付作リタル書類ノ正本又ハ謄本ニ手数料及立替金ノ額ヲ附記スヘシ又執務時間ニ應シ其辨濟ヲ受クヘキトキハ調書ニ其執務時間ヲ附記スヘシ若シ之ヲ附記セサルトキハ最短ノ時間ニ付テ定メタル金額ヲ以テ算定ス

● 執達吏登用規則

明治二十三年八月 司法省令第二號

明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ依リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則

第一條 執達吏ニ任セラル、ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 年齢滿二十五歳以上ナルコト

第二 陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

第三 身體健全ナルコト

第四 家計ノ整理シタルコト

第五 品行方正ナルコト

第六 試験ニ及第シタルコト

第二條 左ニ掲クル者ハ執達吏ニ任セラル、コトヲ得ス

第一 重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ非ス

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者

第四 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者

第三條 執達吏ノ試験ヲ受ケントスル者ハ少シトモ六箇月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルコトヲ要ス
職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ祕密ヲ漏洩スヘカラス

- 第四條 職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及履歷書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ
- 第五條 職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ
- 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ
- 第六條 控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得
- 第七條 職務修習者試験ヲ受ケントスルニハ第一條第一乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出ヘシ
- 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ
- 控訴院長ハ書類ヲ調査シ試験ノ許否ヲ定ムヘシ
- 第八條 試験ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ
- 第九條 試験委員長及試験委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

- 第十條 控訴院長ハ試験ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試験委員長ニ送付スヘシ
- 前項ノ送付アリタルトキハ試験委員長ハ試験期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ
- 第十一條 試験ハ筆記口述ノ二様トス
- 口述試験ハ筆記試験ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ
- 第十二條 試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ
 - 第一 民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程
 - 第二 執達吏ニ關ル諸規則
 - 第三 算術(加減乗除分數比例)
 - 第四 讀書筆寫
- 第十三條 筆記試験問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム
- 試験委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試験問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得
- 第十四條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス
- 及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ
- 第十五條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員長及試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ

授與ス

第十六條 試験ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非サレハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條 不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス

第十八條 試験委員ハ試験ノ問題及成績ヲ記録ニ記載スヘシ

第十九條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験成績ヲ控訴院長ニ報告スヘシ

第二十條 左ニ掲クル者ハ試験ヲ要セス執達吏ニ任セラル、コトヲ得

第一 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校、司法省舊法學校又ハ帝國大學校ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則

ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第三 判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者

第四 陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條 第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍

大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

第二十二條 試験及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リタル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス

第二十三條 執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間內ニ保證金ヲ差出サ、ルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

第二十四條 執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ交付ス

執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

附 則

第二十五條 本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試験及任補ヲ行フコトヲ得

●執達吏代理鑑札調製方

明治二十三年九月
司法省訓令第三號

裁判所

執達吏規則第十四條ニ依リ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ハ左ノ通り調製スヘシ

●明治十三年布告第三十六號(刑法)第三條、依り第二章第七條、同年布告第三十七號(治罪法)第十七條、依り第一章第四條、同十五年(太政官)達第四十四號(行政官吏服務紀律)第十七條、同十九年(勅令)第五十四號(地方官官制)ニ依り第一章第二條第三條、第三章第五條、第二章第五條ハ各消滅セリ

- 第三條 其職務ヲ大別シテ四件トス
- 第一 人民ノ妨害ヲ防護スル事
- 第二 健康ヲ看護スル事
- 第三 放蕩淫逸ヲ制止スル事
- 第四 國法ヲ犯サントスル者ヲ隱密中ニ探索、警防スル事
- 第四條 行政警察豫防ノ力及ハスシテ法律ニ背ク者アルトキ其犯人ヲ探索、逮捕スルハ司法警察ノ職務トス之ヲ行政警察ノ官ニ於テ行フトキハ檢事章程並司法警察規則ニ照スヘシ
- 第五條 警察官吏ハ公同一般ノ裨益ヲ計リ一家隱微ノ小惡ヲ發ク可ラス且一己ノ功ヲ貪リ警察一般ノ目的ヲ愆ル可ラス
- 第二章 警部勤務ノ事
- 第一條 各出張所ニ派出セル警部ハ時々本廳ニ參會シ事務ヲ商議シ處分異同ナキヲ要スヘシ
- 第二條 凡ソ布告布達ハ其旨趣ヲ巡查ニ教示シ誤解スルモノナキヲ要ス可シ
- 第三條 時々區内ヲ巡視シ其景況並ニ巡查ノ勤怠正否ヲ察スヘシ區内ノ人員戸數職業等ハ成丈ケ詳知スルヲ要スヘシ

- 第四條 區内ノ事故ハ月報ヲ以テ長官ニ報告スヘシ若シ非常急緊ノ事件アレハ速ニ報知スヘシ時機ニ因リ直ニ警保頭ニ報告スルヲ得ヘシ
- 第五條 凡ソ警察ノ事ニ付テハ直ニ他府縣ノ警察官ニ報知若シハ照會スルコトヲ得ヘシ
- 第六條 達又ハ訊問等ノコトアルニ付テハ勅奏官及華族并ニ有位ノ者ハ家令家扶執事ヲ呼出スヘシ判任官以下士族平民ハ直ニ本人ヲ呼出スコトヲ得ヘシ
- 第七條 違警犯人ハ其犯狀ヲ按シ違警條目ニヨリ處斷シテ後長官ニ具申シ其疑按アルモノハ長官ノ指揮ヲ受ケテ處分ス可シ
- 第三章 巡查勤方ノ事
- 第一條 第一章第三條ヲ以テ職務ノ大目的トナスヘキ事
- 第二條 持區内ノ居民並ニ道路行人ヨリ困難出來シテ救護ヲ乞フトキハ何時ニテモ乞ニ應シ或ハ救護ヲ乞ハサルモ見聞次第力ヲ盡シテ防護スヘシ
- 但街路其外ニテ人命ニ係ル危難有之節ハ瞬速救護シ最寄ノ醫ヲ頼ミ治療ノ手續懇切ニ取計フヘシ
- 第三條 老幼廢疾婦人等ハ就中注意シテ保護スヘシ
- 第四條 持區内ノ大小往來筋及市街村落ノ位置區長戸長ノ宅等盡ク詳知スヘシ

- 第五條 持區内ノ戸口男女老幼及ヒ其職業平生ノ人トナリニ至迄ヲ注意シ若シ無産体ノ者集合スルカ又ハ怪シキ者ト認ルトキハ常ニ注目シテ其舉動ヲ察ス可シ
- 第六條 持區内ヘ他ヨリ移リ來ル者アラハ前條ニ隨テ速ニ之ヲ探知スヘシ
但右等ノ事ニ付權威ヲ以テ其人ヲ呼出ス等ノ儀ハ決シテ有之間敷勉メテ當人ノ覺知セサル様隱密ニ探偵スルヲ以テ警察ノ本意トス若シ已ムヲ得サルコトアルトキハ自ラ行テ尋問スヘシ
- 第七條 布告布達等總テ新令ノ出ルニ付人心ノ信否ヲ考察シテ警部ニ報知スヘシ
- 第八條 巡邏中職務ニ關スル大小ノ事故ハ逐一手帖ニ記シ警部ニ報告スヘシ
- 第九條 非番タリトモ合圖アルカ又ハ臨時呼出ヲ受レハ早速其場ニ駆付ヘク平常其心掛アルヲ要ス
- 第十條 往來筋ノ妨害トナルヘキ物ヲ見ルトキハ速ニ之ヲ取除カシムヘシ
- 第十一條 道路ノ荒蕪溝渠ノ淤塞及不潔物アレハ之ヲ戸長ニ告ケ掃除ノ手續ヲナスヘシ
- 第十二條 官舎橋梁道路其他公有之建造物破損スルトキハ警部ニ報告スヘシ
- 第十三條 行人ニ道路或ハ其他ノ事ヲ尋問セラレトキハ丁寧ニ教示スヘシ
- 第十四條 稚兒道ニ迷フアラハ之ヲ保護シ其居所不分明ナルモノハ之ヲ其地ノ戸長

- ニ預ケ之ヲ警部ヘ報告スヘシ若シ其居所不分明ニシテ其持區内ナラハ直ニ之ヲ送致シ他ノ區ナラハ其地ノ區戸長ニ掛合送致ノ手續ヲナスヘシ
- 第十五條 芝居其他群集ノ所ニハ出張シテ亂雜ヲ防制スヘシ
- 第十六條 放レ牛馬アレハ之ヲ便宜ノ所ニ留メ置キ其主分明ナル者ハ之ヲ附與シ然ラサレハ警部ノ指圖ヲ受クヘシ
- 第十七條 路上酒ニ酔ヒ失心スル者ハ之ヲ注意シ又ハ最寄人民ニ介抱セシメ其暴動スル者ハ取押ヘ其地ノ戸長ニ引渡スヘシ
- 第十八條 路上狂癡人アレハ穩ニ之ヲ介抱シ其暴動スル者ハ取押ヘ其地ノ戸長ニ引渡スヘシ
- 第十九條 路上ニ狂犬アレハ之ヲ打殺シ戸長ニ告ケ之ヲ取棄ル手續ヲナスヘシ
- 第二十條 道路河渠ニ死屍アルトキハ其模様ヲ檢シ警部ニ報知シ指揮ヲ受クヘシ
- 第二十一條 獸畜ノ死骸アルトキハ速ニ戸長ニ告ケ之ヲ取除ク手續ヲナスヘシ
- 第二十二條 鳥獸魚類其他飲食物ヲ販賣スル店ニ贗造腐敗ノ品之アルヤヲ常ニ検査スヘシ
- 第二十三條 人家夜間戸締油斷ノ者アレハ速ニ之ヲ其主ニ知ラスヘシ
- 第二十四條 怪キ者ヲ見認ルトキハ取糺シテ様子ニ依リ持區内出張所ニ連行或ハ警

- 部ニ密報シ差圖ヲ受クヘシ倉卒ノ取計アル可ラス
- 第二十五條 失火ノ節ハ、巡卒失火ノ合圖ヲナシ一般ニ知ラシム且燒失ニ罹ル家ハ其家人ヲ助ケ消防ノ事モ勤ム可シ消防人己ニ集ルニ至レハ勉メテ亂雜及ヒ竊盜ヲ防ク事ニ注意スヘシ
- 第二十六條 同斷ノ節第一ニ其人ヲ救ヒ出シ次ニ書類金貨等ヲ出スヘシ又管應其他區戶長等ノ宅ハ文書ヲ第一ニ取出ス可シ
- 第四章 巡查心得ノ事
- 第一條 專ラ行儀作法ヲ正シシ威權ケ間敷儀之ナクシテ區民ノ侮慢ヲ受ケサル様可心掛事
- 第二條 法度規則ヲ確守シ上官ノ命令ヲ遵奉スヘシ決シテ職外ノ事ヲ議ス可ラサル事
- 第三條 同勤中ハ一心全體ト心得常ニ謙和温順ヲ旨トシ忠實ヲ以テ交誼ヲ盡シ職務ニ怠ラサル様互ニ獎勵スヘキ事
- 第四條 節儉ヲ守リ分限不相應ノ儀致間敷事
- 第五條 職務上ニ付上官ニ申立ノ事ハ總テ實直ヲ旨トシ愛憎偏倚ノ儀決シテ有之間敷尤後日ニ至リ前言ヲ翻改スル儀無之様可心掛事

- 第六條 巡邏中道路行人並ニ營業ノ者ノ妨ニ不相成様可心掛事
- 第七條 往來ノ者ヲ取扱ニハ柔和ヲ旨トシ辨ヘナキ者ハ殊更穩ニ取扱ヒ決シテ凌辱ヲ加ヘ手荒キ處置致間敷事
- 第八條 取調ノ爲メ人家ニ至ル節ハ接對筋總テ懇篤ニ可致但シ公私ノ分ヲ守リ狎々敷儀決テ有之間敷事
- 第九條 巡邏中私ニ人家ニ立寄候儀ハ勿論徒ラニ市店ヲ詠メ職務ヲ怠ル間敷事
- 第十條 持區内ニテ金譚等頼入レ或ハ物ヲ買ヒ其價ヲ借ル等ノ儀決シテ有之間敷事
- 第十一條 出勤中醉態ヲ露ハシ又ハ婦女ヘ對シ戲ケ間敷儀等決シテ有之間敷事
- 第十二條 機密ノ筋ハ勿論職務ニ係リタル事ハ總テ他言致間敷事
- 第十三條 公事出入等ニハ一切關係致間敷若シ強テ相頼候者アラハ警部ヘ具申スヘキ事
- 第十四條 官ヨリ相渡サレタル得物ノ外兵器ヲ携ル儀ハ不相成且相渡シタル品ハ大切ニ取扱フヘキ事
- 第十五條 得物ハ自身ヲ擁護スル具ト心得猥ニ人ヲ打擲致間敷候勿論兇暴人アリテ手ニ餘リ不得止節ハ格別ノ事
- 第十六條 巡邏中傍人ノ嘲哂スルコトアリト雖トモ必ス耻辱ト思フヘカラス能ク忍

耐シテ相當ノ處置ヲナシ決シテ憤怒ノ色ヲ顯ハシ爭鬪ケ間敷儀致間敷事
第十七條 何様ノ事アリトモ職務上ニ付人民ヨリ謝物トシテ金銀物品ヲ受ル事有可
ラサル事

第十八條 巡邏中ハ必ス役服ヲ着用シ能ク容姿ヲ正フシ他人ト同行シテ雜譚スヘカ
ラサル事

第十九條 每朝衣服冠物其他器械ヲ検査シ常ニ見苦シカラサル様注意スヘキ事

第二十條 屯所ハ每朝清潔ニ掃除スヘキ事

●憲兵行政警察事務規程

明治十四年十月
內務省達乙第五十二號

警視廳 府縣 東京府
ヲ除ク

憲兵職掌中行政警察事務ノ儀別紙ノ通及達示候條爲心得此旨相達候事
(別紙)

憲兵本部

行政警察ニ關スル事務別紙規程ノ通相心得執行可致此旨相達事

行政警察事務規程

第一條 行政警察ハ人民ノ凶害ヲ豫防シ安寧ヲ保全スルコアリ其事務ヲ大別シテ左

ノ四項トス

一 人民ノ防害ヲ防護スルコト

二 法章ノ遵奉ヲ視察スルコト

三 健康ヲ看護スルコト

四 國事ニ關スル犯罪ヲ未萌ニ搜索警防スルコト

第二條 行政警察事務執行ノ際司法警察事務ニ牽連スル事アリト雖モ其事務ヲ混同
ス可ラス

第三條 行政警察ノ事務ヲ執行スルニ當リ他ノ警察專務官吏其場ニ臨ミタルトキハ
其處分ヲ專務官吏ニ讓ルヘシ

●警察官吏禮式

明治十九年九月
內務省令第十八號

廳府縣 東京府
ヲ除ク

警察官吏禮式左ノ通り之ヲ定ム

警察官吏禮式

第一條 警察官吏制裝ヲ爲シタルトキハ以下各條ニ從ヒ禮式ヲ行フヘシ
第二條 凡ソ禮式ヲ行フニハ姿勢ヲ正シ禮式ヲ受クヘキ人ニ注目スヘシ

第三條 禮式ヲ別ツコト左ノ如シ

一 最敬禮

二 敬禮

第四條 最敬禮ハ五步前ニ於テ正面ノ方向ヲ取リテ直立シ兩足ヲ整ヘ兩手ヲ垂下シ首ヲ禮式ヲ受クヘキ人ニ對向シ其人ノ通過シ了ルノ間之ニ注目スヘシ

警部補以上ニ在テハ前項ノ外仍ホ禮式ヲ受クヘキ人ノ正面ニ來リタルトキ右手ヲ舉テ帽ニ當ツヘシ

第五條 敬禮ハ禮式ヲ受クヘキ人ニ對シ五步前ニ於テ左手ヲ垂下シ右手ヲ舉ケ五指ヲ整閉シ其第一關節ヲ帽ノ下端ニ當テ之ニ注目スヘシ

第六條 警部補以上ハ 天皇三后皇太子及皇族ニ對シテ最敬禮ヲ行フヘシ馬上ニ在ルモノハ正面ノ方向ヲ取リ馬ヲ駐メ禮式ヲ行フヘシ道路狹隘ニシテ之ヲ爲シ得ヘカラサルトキハ韁ヲ縮メテ馬首ヲ舉ケ通過ノ際右手ヲ舉ケ帽ニ當ツヘシ

内閣總理大臣各省大臣正式勅使及東京ニ在テハ警視總監東京府知事其他ノ府縣ニテハ所屬ノ知事並ニ上班ノ警察官ニ對シテ敬禮ヲ行フヘシ

第七條 巡查ハ 天皇三后皇太子皇族内閣總理大臣各省大臣正式勅使及東京ニ在テハ警視總監東京府知事其他ノ府縣ニ在テハ所屬ノ知事ニ對シ最敬禮ヲ行ヒ其他上

班ノ警察官ニハ敬禮ヲ行フヘシ

第八條 本邦駐在ノ各國公使タルコトヲ認知シタルトキハ警部補以上ニ在テハ敬禮ヲ行ヒ巡查ハ最敬禮ヲ行フヘシ

第九條 物品ヲ携帶シ相當ノ禮ヲ行フ能ハサルトキハ禮式ヲ受クヘキ人ニ行逢フタル際之ニ注目シ若シ一手ニ携帶スルトキハ他ノ一手ハ之ヲ垂下スヘシ帽ヲ冠セサルトキ又之ニ注目シ兩手ヲ垂下スヘシ

第十條 駐立スル際禮式ヲ受クヘキ人ノ通過スルトキハ正面ノ方向ヲ取リ其儘兩手ヲ垂下シ直立スヘシ若シ椅子ニ倚リタルトキハ起立シテ本文ノ禮式ヲ行フヘシ

第十一條 整列シタルトキ又ハ隊伍ヲ爲シテ行進スルトキハ其指揮ヲ掌ル者ノミ相當ノ禮式ヲ行ヒ其他ノ者ハ禮式ヲ受クヘキ人ニ注目スヘシ

第十二條 同班警察官吏ハ互ニ敬禮ヲ行フヘシ

第十三條 警衛消防囚徒護送其他特別ノ注意ヲ要スヘキ職務ニ従事スルトキハ禮式ヲ行フノ限ニアラス

●警察官吏禮式心得

明治十九年九月 內務省訓令第十九號

應府縣東京府ヲ除ク

警察官吏禮式心得左ノ通之ヲ定ム

警察官吏禮式心得

- 第一 警察官吏タル者ハ其上官ニ對シ從順ナルヘキハ勿論之ニ對シ禮讓ヲ盡サ、ル可カラス上官タル者亦言語ハ勿論舉動ニ於テモ決シテ下班ノ者ヲ凌侮シ又ハ之ト狎暱スヘカラス
- 第二 一般ノ官吏ニシテ公務ヲ帶ヒ其管内ヲ巡廻スル等ノコトアルトキハ場合ニヨリ適宜之ニ對シ禮式ヲ行フコトアルヘシ
- 第三 禮式ヲ行フニハ如何ナル場合ト雖モ其禮式ヲ受クヘキ人ヲシテ其禮ヲ轉回スル等ノ勞ナカラシメ之ニ對シ常ニ便利ノ道ヲ讓ルハ下班ノ者ノ上官ニ對シ從順ナル義務ナルヲ以テ途上上官ニ出會シタルトキハ其宜シキニ應シ右又ハ左ニ避クヘシ殊ニ狹隘ノ道路及橋梁廊下階子段等ニ於テハ立止マリ上官ノ通行ヲ待ツヘシ若シ如此キ場所ニ於テ下班ノ者既ニ進行中ナルトキハ立戻リ上官ヲシテ己レノ通過ヲ待クシメサル様注意スヘシ
- 第四 禮式ヲ行フ際ハ決シテ喫煙又ハ談笑等ヲ爲ス可ラス
- 第五 城門橋梁及ヒ狹隘ノ道路ニ於テ最敬禮ヲ行ハントスルニ方リ通行人ノ妨トナルノ恐アルトキハ敬禮ヲ行ヒ最敬禮ヲ行フニ及ハス其他禮式ヲ受クヘキ人合圖ヲ

爲シ又ハ其他ノ舉作ニ由リ最敬禮ヲ停メタルトキ亦同様タルヘシ

- 第六 下班ノ者上官ト同行スルトキハ常ニ二三歩ノ後ニ從フヘシ上官若シ己レニ對シ談話セルトキハ其左側ニ副ヒ上官ト足並ノ違ハサル様注意スヘシ但左側ニ副フトキハ上官ヲシテ不便利ナラシメ又ハ危險ナラシムルノ恐レアルトキハ其宜キニ應シ右側ニ副フヘキモノトス
- 第七 下班ノ者途上ニ於テ上官ニ出會シ申告ヲ爲ソントスルトキハ凡ソ其三歩前ニ進ミ直立シテ申告スヘシ上官若シ歩ヲ止メスシテ進行スルトコトヲ示シタルトキハ下班ノ者ハ上官ノ左側ニ副ヒ同歩シテ其申告ヲ爲スヘシ但左側ニ副ヒ上官ヲシテ不便利又ハ危險ナラシムルノ恐レアルトキハ前項但書ノ例ニ同シ
- 第八 上官他人ト談話スルトキハ成ルヘク之ヲ妨ケサル様注意シ此際自ラ申告セソト欲スルコトアルモ先ツ暫ク差扣ヘ談話ノ終ルヲ待テ申告スヘシ
- 第九 上官ト同歩スル際家屋若クハ室内ニ入ラントスルトキハ下班ノ者其戸ヲ開キ先ツ上官ヲシテ之レニ入ラシムルハ勿論ナリトス
- 第十 警部補以上ニ在テ官署室内ニ入ルトキハ帽ヲ脱スヘシ但下班ノ者ノ室内ニ入ルトキハ脱帽セサルモ妨ナシ
- 第十一 巡查帶劔シテ官署室内ニ入ルトキハ帽ヲ脱スヘカラス其劔ヲ帶セサルトキ

ハ脱帽スヘシ

第十二 下班ノ者上官ノ室内ニ入ルトキハ其入口ニ直立シ來意ヲ告ケ指揮ヲ待ツヘシ

第十三 室内ニ於テ上官ニ申告ヲ爲ストキハ其三步前ニ進ミ警部補以上ニ在テハ劔ヲ左手ニ握シ帽ヲ右手ニ持テ帽ノ裏面ヲ體ニ著ケ徽章ヲ前面ニ向テ直立スヘシ
巡査ニ在テハ劔ヲ左手ニ握シ右手ハ垂下スヘシ其劔ヲ帶セサルトキハ帽ヲ左手ニ持テ右手ハ垂下スヘシ申告ヲ終リタルトキハ徐ニ左回シテ舊席ニ復スヘシ上官ノ召呼ニ應シタルトキ亦同シ

第十四 室内ニ於テ公務ヲ談スルトキ下班ノ者上官ノ許可ヲ得ルトキハ著席スヘシ
第十五 上官物品ヲ下班ノ者ニ交付スルニ際シテハ其三步前ニ進ミ右手ヲ以テ之ヲ受クヘシ下班ノ者上官ニ物品ヲ呈スルトキ亦同シ

第十六 途上ニ於テ上官ノ答禮ハ舉手スヘキモノトス下班ノ者ハ假令上官ノ答禮ナシト雖モ決シテ已レテ輕侮シタリトノ念ヲ懷クヘカラス

第十七 凡ソ禮式ニ上班ト稱スルハ巡查ノ警部警部補以上ニ於ケル警部警部補ノ警視以上若クハ警部長ニ於ケルカ如シ但署員ノ其署長ニ於ケル亦同シ

第十八 職務上人民ヨリ正當ニ禮ヲ受ケタルトキ之ニ答禮スルハ勿論ナリトス

●警察巡閱規則

明治二十年六月 内務省訓令第三十六號

警視廳 府縣東京府ヲ除ク

警察巡閱規則左ノ通之ヲ定ム

警察巡閱規則

第一條 本則ハ警察各部ニ於ケル紀律ノ張弛、服務ノ勤惰、處務ノ整否、其他法律命令實施ノ狀況ヲ視察シ警察ノ實效ヲ収メシムルカ爲メニ設クルモノトス

第二條 巡閱ハ毎年四月五月ノ間ニ於テ東京ニ在テハ警察本署長其他ノ府縣ニ在テハ警部長ヲ以テ之ヲ施行セシムヘシ

第三條 巡閱官ハ左ノ項目ニ就キ其方法ノ如何ヲ査閱スヘキモノトス

- 一 執行事務及其報告ノ方法
- 二 執行官吏ノ配置及警邏
- 三 執行事務ノ監督及警邏ノ監督
- 四 非常召集ノ方法
- 五 司法警察即チ被告人ノ搜查、逮捕、訊問及檢察官ヘ送付ノ手續等
- 六 留置人取扱及遞傳護送

- 七 諸願伺書等ニ關スル諸文書ノ取扱
 - 八 違警罪及諸規則違犯者處分
 - 九 戸口調査及監視人ノ取扱
 - 十 文書統計記録ノ整理
 - 十一 服裝姿勢及禮式
 - 十二 教習及訓授
 - 十三 會計經理及被服給與
 - 十四 警察署分署派出所及留置場ノ構造裝置
 - 十五 火災消防及器具ノ使用
 - 十六 警察上緊要ノ器具
 - 十七 集會ニ關スル取締
 - 十八 衛生警察殊ニ傳染病撲滅ノ方法及衛生ニ關スル諸般ノ取締
 - 十九 交通取締即チ道路及舟車ノ狀況等
 - 二十 衛生風俗及公安ニ關スル營業取締殊ニ料理店貸座敷宿屋古物商質商及危險物賣買商等
- 第四條 巡閱官ハ警察官吏ノ風儀動作其他人民ニ對スル關係若クハ過度ナル浪費ヲ

ナスヤチ視察スルモノトス

第五條 警察處務ニ關スル便否及ヒ警察官ノ處分ニ關スル意見ヲ巡閱官ニ申告スルモノアルトキハ之ヲ受理査閱スヘシ

第六條 巡閱官巡閱ヲ終レハ其狀況ヲ盡シ意見ヲ付シ巡閱中ニ係ル日誌ヲ添ヘ警視總監又ハ知事ニ復命シ警視總監又ハ知事ハ其概況ヲ內務大臣ニ報告スヘシ

● 巡查召募取計ヒ方

明治十六年三月
內務省達乙第十一號

警視廳 府縣東京府ヲ除ク

明治八年^{十二}當省乙第百六十八號達中巡查召募規則並ニ檢査表名簿式相廢候條巡查召募方ハ各廳ニ於テ適宜ノ方法ヲ設ケ將來警察上ニ障害ヲ生セサル様注意取計ヘシ此旨相達候事

但本文適宜ノ方法ヲ取設ケタル節ハ當省ヘ届出ヘシ

● 懲罰及懲戒令ニ依リ免職ノ者巡查採用方

明治十五年四月
內務省達番外

巡查召募ノ際規則ニ合格ナリト雖モ巡查懲罰例及官吏懲戒例ニ依リ免職ノ後二年ヲ經サル者ハ採用セサル義ト心得ヘシ此旨相達候事

●不開港場規則難船救助心得方

明治三年二月 布告第四百十八號

不開港場規則難船救助心得方等之條目別紙雕刻ノ通被仰出候間此旨相達候事

(別紙)

不開港場規則 難船救助心得方條目

外國貿易ノ儀ハ神奈川港ヲ始メ大阪兵庫長崎新潟箱館六箇所御取開相成候上ハ諸商賣トモ右場所於テ取引可致處不開港場於テ密商イタシ候哉ノ趣相聞ヘ以之外ノ事ニ候右ニ付テハ先達テ御布令之趣モ有之御條約面ニモ明細ニ掲載致シ有之儀ニ付キ向々於テ厚ク可相心得筋ニハ候得共津々浦々邊鄙ノ場所ニ至候テハ取計方不相辨モノモ可有之或ハ難船救助ノ筋ト入混シ難船人ヘ對シ不親切ノ取扱イタシ候テハ御交際上ニ差響キ候儀ニ付夫是以今般猶又廉々別紙ノ通心得方被仰出候依テハ府藩縣ニ於テ取締不行屆其土民共外國人ヲ引入レ内密ニ賣買致シ候節ハ假令其事不仕遂候共當人並ニ其支配タル者マテ急度御答可被仰出候尤モ吟味ノ上其土地管領ノモノ同意致シ居候歟又ハ心得ナカラ見遁シ候儀相知レ候節ハ猶更嚴重御處分可有之候ニ付向々

(明治四年布告第九十七號參看スヘシ)

(明治十年布告第二十七號參看スヘシ)

ニ於テ取締ノ儀猶一層行届候様可致候事

一外國人之儀ハ自己相對ヲ以テ雇入候儀不相成趣ハ兼テ御布令ノ通ニ候得共諸學科又ハ國地開發或ハ西洋形ノ船々運用筋ニ付相雇度モノハ其次第ニ依リ御問届可相成候間給料年限等取極其筋々ヨリ書面ヲ以テ東京外務省ヘ可願出其上御印章御渡可相成候尤モ御印章所持ノ外國人ハ何レノ向ニテモ御國人同様相心得無隔意接待致シ無差支通行セシムヘシ候尤モ諸場所ニテ右御印章相改メ可申萬一右御印章所持不致外國人有之節ハ御許容不相願私ニ雇入候筋ニ付内地通行不相成儀ハ勿論竊ニ隱シ置キ相願ルニ於テハ急度御沙汰ノ品モ可有之候間心得違無之様可致事
追テ別紙條目ノ儀ハ外務省ニ摺モノ有之候間不足ノ向ハ何部ニ而モ同省ヘ申立可受取候事

(別紙)

條目

不開港場取締心得方規則

一何レノ濱邊又者港浦オイト西洋形之船入津候ハ、時刻ヲ移サス直様湊役人役人居村長ノ内ヨリ可罷出事其船へ乗組入津之趣意可相尋事
但言語不通ニ而十分難相分儀モ可有之候得共初テ來ル外國船ハ故ナク入津イタ

(明治九年(太政官)達第百十七號參看スヘシ)

シ候儀甚少ノ候間其大意丈ケ和語手眞似ニテ相分可申候事

一尋問ノ上薪水食料ニ盡キ其品々ヲ求メ候タメ入津之儀ニ候ハ、其土地ヨリ横濱兵庫長崎新瀉函館迄之里數ヲ勘辨イタシ格別遠路ニモ無之候ハ、右品々ヲリトモ前文開港場之内へ參リ可受取旨申サトシ渡方ヲ斷リ可申或ハ右開港場へ七八十里又ハ百里モ遠キ場所ニ候ハ、無餘儀事ニ付其土地支配ニテ承届候上右里數ヲ計リ船中人數相當之分丈渡遣シ代金可受取事

但シ金高品數ハ勿論船之碇泊日數刻限等委細相認メ届出可申事

一其船之國名船名船主ノ名書付ニテ承リ糺スヘキ事

但船名ハ多ク船之艦ニ横文字ノ楷書ニテ認メ有之モノニ付右字樣寫取置ヘキ事

一船ニ引上ケ有之國旗並ニ船主之旗等總テ目印ニ可相成モノハ其雛形寫取可差出事

一闕乏之品相渡候上出帆遅々致候様子ニ候ハ、早々出帆候様催促可致事

一御免許之上海岸測量ノ爲メ船ヲヨセ候節ハ相當ニ世話イタシ岩石隠レ洲有之場所

等差示可遣尤モ御免許之船ハ其印狀必ス所持イタシ居候事

一軍艦ニ候ヤ商船ニ候ヤ蒸氣船風帆船共總而船形大小トモ取糺相届可申事

一軍艦ニ候ハ、大砲之備有之商船トハ船形相違ニ付假令見ナレサルモノニ而モ相知レ可申軍艦ハ別而何事モ禮儀ヲ正シ不敬之取扱イタサ、ル様可心掛候事

一薪水食料等船中必用之品之外餘分ハ勿論其外土地產物類相求度旨申立候トモ一切賣渡候事不相成萬一利慾ニ迷ヒ賣渡候者有之後日相顯ハル、ニ於テハ吟味之上屹度御答可有之事

一船中ニ積載有之品々彼方ヨリ賣渡段申立候トモ買求候儀一切不相成萬一竊ニ取引イタシ候節ハ前同様御答有之事

一濱邊ニ近キ村里之モノ共其濱邊之モノ共内々外國人ト荷物ノ取引致シ候様子ニ候ハ、其支配カ又者開港場へ可申立時宜ニヨリ御賞可有之事

一難船ニ無之食料闕乏等ニ托シ密商仕向候節ハ定而其土地ニモ右ヲ呼迎候者可有之速ニ探索之上彌密商イタシ候ニ相違無之候ハ、双方トモ差押へ外國人者引留置御國人ハ入牢手鎖等其土地相當之仕置ニイタシ早々申立差圖可受尤モ横文字之書付類後日之證據ニ可相成品ハ始末イタシ可置事

但シ各國御條約書ニ何レモ外國人共日本不開港場等へ參リ密商シ或ハ密商ヲ企

ントイタシ候者ハ其犯セル度毎ニ其品取上ケ爲過料メキシコドルヲルニテ千枚

ニ當候程御取立相成候間御國人ニ於テモ右同様之企致シ候モノ於有之ハ兼而御

布告之通其品取上過料トシテ金千兩御取上之事

一御國人買求候西洋形商船ニ外國人乘組居萬一商買取引等致シ度段申立候歟或ハ其

乘組御國人手引ニテ商買致シ候様ニ相見候ハ、篤ト様子ヲ探索致シ嚴敷拒絶可致
 万一仕逐候跡ニ候ハ、其事實穿鑿之上早々其筋ヘ可申立事
 但シ本文西洋形商船ニ不限御國通例之地乘船ニ而西洋人乘組居節モ同様之事
 一外國船ヲ御國人トモ借り受開港場ヨリ開港場ヘ荷物運輸之儀ハ願之上御開届可相
 成筋ニ候得共不開港場ヘハ決而御開届無之儀ニ付萬一不良ノ徒村民ヲ欺キ御免許
 受候ニ付賣買致シ度杯ト申唱ヘ候トモ一切差許申問敷事
 但シ地方饑饉等ニテ不得止事外國船相雇不開港場ヘ相廻リ候事御免許無之筋ニ
 モ無之其節ハ府藩縣之知事ヨリ其沙汰可有之且乘組人之内開港場之役人爲取締
 立會居候等ニ付事實突留候上其取扱ニ可及事
 一湊ヘ碇泊イタサス沖繫リ又ハ其近海ニ於テ双方ノ船出會致密商候様子ニ候ハ、是
 又早々穿鑿可致事
 一不開港場ヘ外國船碇泊イタン薪水食料而已賣渡候儀ニテ聊カ心障リノ事無之トモ
 其都度相届可申事
 難船救助ノ事
 一難船ニテ困苦ノ体ニ相違無之節ハ其困苦ノ輕重ニ從ヒ相當ニ扶助イタン可遣事
 但シ船ニ乘組居リカタキ程ニ候ハ、其海岸最寄寺院也民家也可然場所ヘ止宿爲

致食料衣服等迄任賄可遣事
 一船ノ修覆ニ取掛リ候ハ、鍛冶大工職其他人夫ハ勿論器材迄用意致シ可遣事
 一乘組人ノ内溺死ノ尸有之歟或者滯留中病死之者埋葬之儀申立候ハ、墓所之内都合
 好キ場所ヘ埋葬可爲致事
 一洋中オイテ大船破摧シ乘組外國人之内猶船具等ニ取付生残り居候体見常候ハ、早
 ヲ我船ヘ助ケ載開港場ヘ送届候歟又者其土地支配之者ヘ引渡其支配之者受取海陸
 便宜ヲ見計開港場ヘ可差送事
 一難船漂着候ハ、早々外務省歟又者開港場之内可成里敷近キ所ヘ晝夜ニ不限注進ニ
 及其掛リ官員ノ出張ヲ申立差圖可受事
 一難破イタシ船難川立陸路ヨリ開港場ヘ罷越度段外國人ヨリ願出候ハ、承届附添之
 者可成餘計ニ差出シ最寄ノ開港場ヘ可送届事
 一困難ノ船隠レ洲等ニ乘懸ケ難引出其儘船主引拂候節ハ右船津又ハ鐵具碇鎖等迄沈
 没之マ、追々流失候トモ又ハ村方ニ而取捨候トモ向後異存ナキ旨外國人ヨリ横文
 ノ書面取置クヘキ事
 一難破之船津其マ、差置キ外國人ハ一旦引拂追々右船引出シ方トシテ再可差越候ニ
 付其間船其外之モノトモ預リ置キレ候様外國人ヨリ相頼候トモ容易ニ引受中間

●明治八年布告第七十號ヲ以テ本項ハ改正セララル

敷彼方ヨリ遮而申立候ハ、其筋へ伺之上可引受勿論入費可相掛儀ニ付右賃銀受取候儀ハ不及申跡々ニテ異論不差起様何事ニモ書而可取置事

一沿海地方ニ於テ外國船困難之節救助方ニ付出發ノ儀ハ總テ其船主ニ屬シ相當ニ候得共船主ニ屬スヘカラサル部分於有之ハ内譯精細區分致シ其他管轄ノ府縣廳ヨリ官費ヲ以テ仕拂候事ト相心得船主へ談判致シ船主ヨリ相當償却高ノ外猶不足之殘額ハ内譯精細書相添へ管轄府縣ヨリ大藏省へ申出處分ヲ可受候或ハ船主ノ自費ト地方廳ノ官費ト區別判然致サ、ル部分ハ暫ク官費ヲ以テ探替置キ船主滯留中ナラハ其趣船主へ心得置セ若シ船主其他乗組ノ者既ニ困難場引拂後ナルトキハ先以テ最寄開港場ノ府縣長官へ照會シ同所長官ヨリ其旨船主又ハ船主管轄ノ領事へ申入置セ而後右區分ノ見込外務省へ申出何分ノ指揮ヲ可受若シ船主ヨリ受取ルヘキ分本人持合セ無之候ハ、證書取置是又前文同様開港場ノ府縣長官へ可相廻事

一難破之船具又ハ沙滯之荷物或ハ船滓等賣拂度旨外國人ヨリ申立候ハ、右ハ相當ノ價ヲ以テ買求メ候儀不苦尤モ其段可相屆事

一難船ニテ永々滯留可相成様子ニ候ハ、府縣トモ其筋ヨリ警衛之モノ可差出事

一乗組人無之西洋之難破船海岸ニ漂著候ハ、其様子委細ニ可相屆事

一總而外國人ニ取引イタシ候勘定書或ハ證書之類ニ至ル迄和文ニ而者難用立候ニ付

(明治九年(太政官)第百十七號參看)

彼國之文字ニ而爲相認置キ判又ハ調印爲致置クヘシ和文ニ而者後日之證ト難相成候此方ヨリ可差出證文等有之候ハ、和文ニ相認メ右へ調印イタシ可差出彼方ヨリ望候トモ意味不相知西洋文へ調印ハ勿論名面認載候儀不相成被欺候儀有之候トモ後ニ其詮無之事ト可相心得事

一右條目ニ有之伺出候儀又ハ届書トモ其場所ヨリ最近キ開港場歟又ハ東京外務省へ差出候事ト可相心得勿論事柄永引キ手輕ニ不相濟儀ハ開港場へ相屆候上猶又外務省へ可申立事

右之通

●内國船難破及漂流物取扱規則

明治八年四月 布告第六十六號

内國船難破及漂流物取扱規則別冊ノ通相定候條本年六月一日ヨリ施行可致此旨布告候事

但本年同日ヨリ浦高札ハ廢シ候事 (別冊)

内國船難破及漂流物取扱規則

第一條 諸通船海上又ハ川筋ニ於テ難破沈没其他ノ災厄ニ逢ヒ候節救助心得方及ヒ

●明治九年(太政官)達第百十七號
官(達)第百十七號
十七字削除セラレ

之ニ屬スル諸費用ノ立方ハ總テ左ノ箇條ニ從テ取扱フヘシ
第二條 各地浦方ニ於テ難破救助ノ爲メ其管應ヨリ區戶長其他用掛リ等ノ内ヲ以テ適宜ニ浦役人ヲ申付置クヘシ
第三條 諸通船難風ノ爲ニ困難ニ又ハ其他災厄ニ罹リ候節ハ最寄ノ者見附次第直チニ浦役人ニ報知シ且浦役人ヨリ指圖無之トモ速カニ助船ヲ出シ救助方精々盡力致スヘシ

但救助ノ者困難船ニ漕寄セ候節船長其他重立タル者ヨリ頼談無之内ハ猥リニ船中ノ物品ヲ積ミ移ス可カラズ

第四條 浦役人ハ難船ヲ見附或ハ其報知ヲ得ルトキハ速ニ其乗組人及ヒ船體積荷ヲ救助保安スルノ手立ヲ盡ス可シ若シ多人數ヲ要スル程ノ大難船ト見受候節ハ板木半鐘等打鳴ラシ人數ヲ呼聚メ且近隣ノ船持ニ申付助船ヲ出サシム可シ

第五條 少人數ニテ救助シ得ヘキ時ハ勿論前條ノ如ク多人數ヲ要スル程ノ大難船ノ節モ浦役人ニ於テ諸事取締ヲ付ケ成丈失費掛ラサル様篤ク注意致シ救助方行届候ハ、早速人數ヲ退散セシム可シ

第六條 保安シタル船具積荷其他ノ物品ハ最安全ニシテ且便利ノ場所ニ之ヲ置クヘシ尤小屋掛ケヲ要シ番人ヲ差置クヘキ程ノ場合ニ於テハ夫々其手數ヲナシ諸事懇

切ノ取扱ヲ致スヘシ

第七條 難破ニ逢ヒタル船長又ハ乗組ノ者ハ上陸次第直チニ電信郵便其他ノ急報ヲ以テ之ヲ船主又ハ荷主ニ報知スヘシ

第八條 難船物ヲ保安スル者ハ左ノ割合ヲ以テ保安料ヲ遣ス可シ

第一 海面ニ漂流スル物品ハ其廿分一

第二 海中ニ沈没スル物品ハ其十分一

第三 川面ニ漂流スル物品ハ其卅分一

第四 川底ニ沈没スル物品ハ其十五分一

但其所持主ノ都合ニ因リ代價又ハ現物ニテモ妨ケナシ

第九條 浦役人ハ救助ノ爲メ集マリタル人數及ヒ救助ノ爲ニ出シタル小舟現ニ難船品ヲ保安シ及ヒ是ニ就テ盡力シタル證據顯然タラサルニ於テハ保安料及ヒ其他ノ賃錢等ヲ割渡ス可カラズ

第十條 保安シタル物品又ハ船滓等ノ餘殘物又ハ沙入水濡レ等ノ爲メニ腐敗スヘキ恐レアルモノハ二名以上ノ浦役人及ヒ船長其他重立乗組ノ者二名以上合議ノ上其所ニ於テ之ヲ入札拂ヒニ爲スヲ得ヘシ

但本條ノ場合ニ於テハ浦役人ニテ成ルヘク丈ケ最寄ヘ廣告シ公ケノ場所ニ於テ

入札人其他衆人ノ眼前ニテ之ヲ爲シ且其物品ノ目錄及買入ノ證書並ニ其附直段ノ第三番迄ヲ取置クヘシ

第十一條 保安物ヲ賣拂ヒタルトキハ其代價金高ノ内ヲ以テ左ニ掲載シタル諸費用ヲ其船主荷主ヨリ出サシムヘシ

第一 保安料

第二 救助ノ節働人足賃及ヒ小舟賃

第三 保安物ノ爲メニ取設タル小屋掛ケ入費及番人ノ賃錢

第四 乗組ノ者怪我人有之節其療養入費

第五 同前ノ者溺死スルトキハ其搜索入費

第六 同前ノ者溺死ノ節埋葬入費

若シ物品賣拂金高諸費ノ高ヨリ少ナキトキハ其金高限リ出サシメ不足ノ分及ヒ賣拂フヘキモノモ之レナキトキハ第十五條ニ照準シテ處置スヘシ

第十二條 左ニ掲載シタル諸入費ハ之ヲ三分ニ其二分ハ船主荷主ヨリ出サシメ其一ノ分ハ之ヲ其管内民費トナス可シ

第一 難船取扱中浦役人ノ日給

第二 浦方ニ於テ難破ノ爲メニ費シタル薪炭燭燭及ヒ筆紙墨代

●明治十一年布告第十九號ニ依リ民費及官費ノ廉減セリ以下同シ

第三 浦方ヨリ管廳其外等へ發シタル電信郵便及ヒ飛脚賃

第四 救助人溺死シタル時其搜索入費

第五 同前ノ者死傷スルトキ治療埋葬入費

第十三條 難破ノ節浦方ヨリ乗組人ニ給セシ衣服食物其他ノ必要品代料又ハ歸郷旅費等ヲ貸遣シタル時ハ證書取置キ第十九條ノ通り精算書中ニ記載シ追テ本人ヨリ償却セシムヘシ

第十四條 大難船ノ節諸費用割賦ノ儀ハ船体管破沈没乗組人ノ死去及ヒ積荷ノ大損害ヲ生シ荷主船主立會決算ヲ要スル等ノモノ現場ノ救助方ヲ除クノ外各般ノ處置ハ其管廳ニ申立テ其筋出張官員ノ差圖ヲ受クヘシ尤モ

小難船ノ處置ハ二名以上ノ浦役人及船長其他重立乗組ノ者二名以上合議ノ上之ヲ決スルコトヲ得ヘシ

第十五條 船體積荷ヲ併セテ悉皆沈没ニ至ルノ大難船ハ浦方ニ於テ其救助ノ爲メニ許多ノ雜費相掛リ候トモ船主荷主ヨリ之ヲ取立ルヲ得ス故ニ其差出スヘキ費用ノ分ハ官費ヲ以テ支給スヘキニ付費用明細帳ヲ作り浦役人船長連署押印シ管廳へ差出スヘシ

第十六條 危難ヲ冒シテ乗組人ノ必死ヲ救フ者又ハ救助ノタメニ盡力シテ死傷ニ至ル者アルトキハ必ス官廳へ届出ヘシ其事實ノ輕重ニヨリ相當ノ賞或ハ舉手當金ヲ

給スヘシ

第十七條 總テ浦役人及船長合議ノ上處置シタル時ハ其事柄ヲ詳細ニ記シタル證書
ニ通テ作り之ニ連署押印シ其一通ヲ船長ヘ渡シ他ノ一通ヲ浦役人ニテ保テ置クヘ

第十八條 二名以上浦役人合議ノ時ハ其内一名ハ必ス他村ヨリ出スヘシ

第十九條 難船救助ニ屬スル諸費用ハ二名ノ浦役人及船長其他重立乗組ノ者二名以
上立會ノ上第十一條第十二條第十三條第十五條ニ照シテ夫々其費用ノ種類ヲ區別
シ成ヘク速カニ精算書ヲ作り之ニ難破明細書ヲ添テ管廳ニ差出シ其検査ヲ受ク可

但精算取調ノ節ハ成丈ケ船主又ハ荷主ノ立會ヲ要ス可シ

第二十條 前條ノ精算書ハ管廳ニ於テ速ニ調査ヲ遂ケ不審ノ廉無之トキハ早速下ケ
渡スヘシ然ル上浦役人ハ第十五條ニ記スル場合ヲ除クノ外船主荷主或ハ船長ヨリ
夫々出金致サスヘシ若シ其即時辨金相成難キ分ハ相當ノ日數ヲ猶豫スヘシ

但シ民費ノ分ハ其管廳ヨリ取立浦役人ヘ下渡スヘシ
第二十一條 洋中ニ於テ難破或ハ打荷等有之趣ヲ以テ浦證文ヲ願出ル時ハ二名以上
ノ浦役人立會ノ上船長及ヒ乗組ノ者二名以上ヲ別々ニ取調ヘ其實跡アルカ又ハ航

海日記アル者ハ之レニ照シ各々符合スル時ハ浦證文ヲ作り連署調印シテ之ヲ船長
ニ付與シ寫ヲ以テ管廳ニ届出ヘシ
但浦證文中左ノ簡條ヲ載スヘシ

第一 難破ニ逢タル場所其時日及ヒ風波ノ模様

第二 破損ノ箇所

第三 打荷ノ種類箇數並他ノ積荷ノ種類

第四 船號及ヒ免狀ノ番號並船主船長ノ本貫苗字名乗組人數

第五 打荷シタル荷物主ノ苗字名本貫

第六 仕出シ地及ヒ仕向ケ地ノ港名

第七 乗組ノ内死傷有之トキハ本貫苗字名年齢

第二十二條 軍艦其他ノ官有船困難候節ハ早速助船ヲ出シ精々盡力シテ救助ス可シ
且其難破ノ大小ニ拘ハラヌ其旨ヲ直チニ管廳ヘ報知スヘシ

第二十三條 前條ノ救助ニ屬スル諸費用ハ船將又ハ其筋ノ士官ヨリ直チニ受取ヘシ
ト雖モ總テ管廳ノ指揮ヲ受クヘシ

但第十一條ニ記載スル保安物ニ就テハ別段相當ノ手當ヲ與フ可シ

第二十四條 貢米及ヒ其地ノ官物ヲ積入候船難破ニ及ヒ候節現場救助ヲ除クノ外總

テノ處置ハ管廳へ申立ノ上其指揮ヲ受ク可シ

但郵便物ヲ積込候船ハ其最寄郵便役所又ハ取扱所へ郵便行囊ヲ至急引渡ス可シ

第二十五條 難船取扱ノ間浦役人ノ日給ハ一日五十錢ヨリ多カラス十錢ヨリ少ナカラサルモノトス

難破ノ節働人足賃及ヒ小舟賃ハ土地ノ異同ト勞役ノ難易ニ依リテ同シカラスト雖モ各管廳ニ於テ適宜見積リ豫カシメ其額ヲ定メ置ク可シ

第二十六條 船長及ヒ擔任ノ者怠慢ニヨリ難破沈没其他ノ損害ヲ生スル時ハ其損失ヲ其者ヨリ償却セシム可シ若シ其災厄人智ノ前知ス可カラス人力ノ豫防ス可カラサルニ出ルコトヲ瞭然明證スル時ハ此限ニアラス

(明治十三年布告第三十六號ヲ參看スヘシ)

第二十七條 浦役人船長其他救助ノ者ト申合セ其保安シタル難船物ヲ沈没ト偽リ竊ニ賣買スル者ハ律ニ照シテ處分ス可シ

第二十八條 凡テ難船ノ節救助ニ托シテ積荷船具其他ノ物品ヲ竊盜或ハ掠奪スル者又ハ其竊盜掠奪ニ與スル者或ハ其本犯ヲ陰匿スル者又ハ竊盜物ト知テ之ヲ賣買スル者ハ律ニ照ラシテ處分スヘシ

第二十九條 以下漂著ノ部
凡原因ノ知レサル難船漂著物及ヒ乗組人ナキ漂著船ヲ見付ル者ハ之ヲ浦役人ニ報

知ス可シ浦役人ハ其調書ヲ作り之ヲ其管廳へ届出ヘシ

第三十條 乗組人ナキ船ハ其漂著ノ月日船ノ大小破損ノ摸樣等ヲ精細ニ書記シ漂著物ハ其品名箇數等精細ニ書記ルシ其漂著近傍人民輻湊ノ地ノ揭示場及ヒ船改所へ六十日間張出スヘシ尤モ漂著物ノ代價貳拾圓以上ト思量シ或ハ貳拾圓以下タリトモ必要ノ品柄ト思量スルトキハ其管廳ヨリ三府五港ノ管廳及ヒ稅關へ報告シテ張出ヲナシ或ハ新聞紙ニ載セテ公告ス可シ

第三十一條 漂著物ノ持主知レタル時ハ左ノ區別ニ循ヒ處置ス可シ

第一 一箇年以内ハ其見積代價ノ三分一ヲ取揚主ニ與ヘ其現品ハ持主へ還納スル事

但持主ノ情願ニヨリ現品賣拂ヒ其代金ニテ受取ルコトヲ得ヘシ

第二 一箇年ヲ過クレハ之レヲ公賣シ其代價ヲ平分シ一半ハ其取揚主ニ與ヘ一半ハ官ニ收ル事

但三箇年以内ニ其持主知レタル時ハ官ニ收メシ部分ハ下戻ス可シ

第三十二條 乗組人無之漂著船ノ持主知レタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ處置ス可シ

第一 一箇年ハ其見積代價ノ十分ノ一ヲ見附主ニ與ヘ其船ハ持主ニ返還スル事但書ハ前條第一項ニ同シ

第二 一箇年ヲ過シレハ公賣シ其代價ノ三分一ヲ見附主ニ與ヘ其餘ノ二分ハ官ニ收ムル事
但書ハ前條第二項ニ同シ

第三十三條 前二條ニ記スル場合ニ於テハ律例得遺失物ノ條ト牴觸スルコトナカル

第三十四條 凡ソ漂着物ヲ保存シ及ヒ之ヲ公告スル等ノ事ニ付費用アルモノハ第十

一條ニ照ラシ浦役人ノ奥印シタル證書ヲ以テ代價ノ全部中ヨリ之ヲ償却スヘシ

第三十五條 洋中ニ於テ難破イダシ桅樁其他ノ船具ニ取附キ海岸ニ漂着致シ候者有

之節ハ浦役人ヨリ一通リ取調相當ノ保護ヲ加ヘ置直チニ管廳ニ届出其指揮ヲ受ク可シ尤本人歸郷ノ旅費其他ノ手當等貸遣ハシ候節ハ第十三條ノ通り追テ本人ヨリ償却セシム可シ

第三十六條 凡ソ漂着物ヲ見附ケタル者之ヲ浦役人ニ報知スルコトナク其物品ヲ私カニ使用シ又ハ之ヲ賣買スル者ハ第二十八條ニ照シテ處分ス可シ

第三十七條 暴風雨等ニテ流失ノ材木ヲ取揚クル時ハ此規則第二十九條以下ニ照準シ其代價十分ノ一ニ過キサル取揚料ヲ遣ス可シ

第三十八條 前條ノ場合ニ於テ取揚タル材木巨大ニシテ領置ニ不便ナル者ハ官之ヲ

●明治九年布告第五十五號ヲ以テ得遺失物律改正刪除セラレ同年布告第五十六號ヲ以テ遺失物取扱規則定メラル

●明治十年布告第二十九號ヲ以テ内國船難破及漂流物取扱規則第三十七條ハ改正セラレ●明治十一年布告第三十二號ヲ以テ

全上規則第三十八條ハ追加セララル

●明治十三年布告第十號ヲ以テ商船ヲ西洋形船ト改正セララル以下皆同シ

公賣シ其代價ヲ以テ現物ト看做シ持主ノ有無ニ從ヒ處分スヘシ

●船難報告船難證書

明治十年八月 布告第五十五號

外國人ニ關係アル貨物ヲ積載シタル西洋形船ニシテ船難報告又ハ船難證書ノ手數ヲ要スルトキハ其船長ヨリ我國内ニ於テハ最寄税關又外國ニ於テハ該地在留我領事館ヘ申出ヘシ即チ授受手續別紙ノ通被定候條此旨布告候事

(別紙)

船難報告 英語シツプス 船難證書 英語エキステンチット

船難報告ハ暴風雨其他ノ海難ニ由リ損害ヲ生セリト思考スルトキ豫メ其現實ヲ報告スル迄ノモノトス故ニ危難請合社ニ向テ請合金ヲ要求スル充分ノ憑據ト爲スニ足ラス唯後日船難證書ヲ記スルニ必要ノ引證ニ供スルモノトス

船難證書ハ現ニ損害ノ多少ヲ明確シ得タルトキ其損害ノ原因及之ヲ生シタル月日場所等ヲ詳細記載スヘキモノニシテ其記入ノ件々眞誠確實ナリト思惟スルトキハ危難請合社ニ向テ請合金ヲ要求スルニ充分ノ憑據ト爲スヘキモノトス
授受手續

第一條 各西洋形船ノ船長ヨリ遭難ノ實況ヲ申出ルトキハ其地ノ税關長或ハ領事其

船長ノ中立ニ從ヒ第一號書式ノ書面ヲ造リ税關長ニ其名ヲ手署セシメ然ル後自ラ官名姓名ヲ手書シテ之ヲ公證シ一通ハ其廳ニ收メ置他ノ一通ハ船長ニ下ケ渡スヘシ

第二條 船難報告ハ著船ノ後二十四時ノ内ニ手數ヲナシ若シ此期限ニ後ルハトキハ其公證ヲ與ヘサルヘシ然レトモ船長ヨリ其遲延ノ次第ヲ辯明シ十分満足スヘキ理由アルトキハ其次第ヲ報告書ニ記載シテ其公證ヲ與フヘシ

第三條 船難證書ハ大畧第二號書式ニ從テ記スヘク而シテ船長運轉手及ヒ他ノ一名ノ海員ヲシテ税關長又ハ領事ノ目前ニ於テ同號甲ノ明告狀ヲ記サシメ且税關長又ハ領事ハ同號乙ノ與書ヲ以テ之ヲ公證スヘシ

第四條 船難證書ハ一航海中ニ遭遇シタル變難及ヒ生シタル損害ノ實況ヲ報告スル者ニ付航海日誌其他公證ニ供スヘキ書類ニ因リ或ハ信任スヘキ海員ノ中立ニ從テ眞確ノ事實ヲ採蒐記載セシムヘシ

第五條 船難證書ハ必ス二通ニ記シ其一通ハ其廳ニ收メ置キ他ノ一通ハ船長ニ下ケ渡スヘシ

第六條 税關又ハ領事館ニ於テ收メ置キタル船難證書ヲ一覽セント欲スルカ又ハ其寫ヲ願受ント請フモノアルトキハ其廳ノ公務時間中ハ何時ニテモ之ヲ聽スヘシ但

シ寫ヲ附與スルトキハ本書ト相違セサル様緊密ニ讀ミ合セ且第二號丙ノ書式ニ從テ與書ヲナスヘシ

第七條 船長以下ノモノ船難證書ヲ了解シ能ハサル者或ハ全ク讀ミ得サル者アレハ其明告狀ニ連署ヲナサシムルノ以前ニ於テ丁寧ニ之レヲ讀ミ聞セ充分其意味ヲ了解セシムヘシ

第八條 船難報告及ヒ船難證書トモ國字ヲ原文英字ヲ譯文トナシ必ス原譯兩文ヲ以テ記スヘシ然レトモ場合ニヨリ原文ノミヲ記シ又ハ譯文ノミヲ記スルコトアルヘシ

第九條 船難報告船難證書及船難證書ノ寫ヲ付與スルトキハ左ノ手數料ヲ收入スヘシ

船難報告 一通 金壹圓

船難證書 一通 金五圓

但寫一通ヲ添フ

正本ニ添フタル者ヲ除クノ外ハ

船難證書寫 一通 金壹圓

第十條 第二號書式用紙ハ適宜タルヘシト雖モ第一號書式用紙ハ税關又ハ領事館ノ

費用ヲ以テ製造シ收入シタル手摺料ハ毎半年分取束テ大藏省へ上納スヘシ
(書式零ス)

●變死者檢視上解剖ノ件 明治十年二月 布告第二十二號

變死ニ係ル屍ヲ警察官吏検査スル時ニ於テ解剖ヲ行ハサレハ其致命ノ原由ヲ確知シ
難キ旨醫師申立ル時ハ檢事方ハ其地方長官ノ許可ヲ受ケ其部分ヲ解剖検査セシムルコ
トヲ得
右布告候事

●官廳官工場艦船内等變死死傷者檢視手續

明治十三年二月
(太政官)達第十四號
官省院使 府縣

明治十二年三月第十二號達左ノ通改正候條此旨相達候事
官廳内並ニ官有ノ工場及ヒ船艦等ニテ變死ニ係ル者及重傷死ニ至ル者ハ近傍ノ警察
所へ報知シ檢視ヲ受クヘシ
但軍人軍風ニシテ陸海軍官限り處分ヲ了シ警察官ノ檢視ヲ要セサル分及ヒ遠洋航

海中ニ係ルモノハ此限ニアラス

●行旅死亡人取扱規則 明治十五年九月 布告第四拾九號

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

行旅死亡人取扱規則

- 第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキ所在ノ長ハ之ヲ最寄墓地へ假埋葬スヘシ其倒死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ
- 第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルトキ長ハ死亡ノ狀況并ニ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍長へ通報スヘシ本籍長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルトキハ三十日限差出サシメ埋葬地長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルトキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ
- 第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルトキ長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場へ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルトキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ
- 第四條 死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品

ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルトキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ
但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルコト能ハサルトキハ直ニ其
物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルトキハ之ヲ本籍ヘ送付スヘシ其本
籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五箇年間戶長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサル
ニ於テハ地方稅雜收入ニ組入ルヘシ
右奉 勅旨布告候事

○保安

●保安條例

明治二十年十二月
勅令第六十七號

朕惟フニ今ノ時ニ當リ大政ノ進路ヲ開通シ臣民ノ幸福ヲ保護スル爲ニ妨害ヲ除去シ
安寧ヲ維持スルノ必要ヲ認メ茲ニ左ノ條例ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

保安條例

第一條 凡ソ秘密ノ結社又ハ集會ハ之ヲ禁ス犯ス者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ
處シ拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其首魁及教唆者ハ二等ヲ加フ
內務大臣ハ前項ノ秘密結社又ハ集會又ハ集會條例第八條ニ載スル結社集會ノ聯結

通信ヲ阻遏スル爲ニ必要ナル豫防處分ヲ施スコトヲ得其處分ニ對シ其命令ニ違犯
スル者罰前項ニ同シ

第二條 屋外ノ集會又ハ群集ハ豫メ許可ヲ經タルト否トヲ問ハス警察官ニ於テ必要
ト認ムルトキハ之ヲ禁スルコトヲ得其命令ニ違フ者首魁教唆者及情ヲ知リテ參會
シ勢ヲ助ケタル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ
附加ス其附和隨行シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三條 內亂ヲ陰謀シ又ハ教唆シ又ハ治安ヲ妨害スルノ目的ヲ以テ文書又ハ圖書ヲ
印刷又ハ板刻シタル者ハ刑法又ハ出版條例ニ依リ處分スルノ外仍其犯罪ノ用ニ供
シタル一切ノ器械ヲ沒收スヘシ

印刷者ハ其情ヲ知ラサルノ故ヲ以テ前項ノ處分ヲ免ルコトヲ得ス

第四條 皇居又ハ行在所ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居又ハ寄宿スル者ニシテ內亂ヲ陰
謀シ又ハ教唆シ又ハ治安ヲ妨害スルノ虞アリト認ムルトキハ警視總監又ハ地方長
官ハ內務大臣ノ認可ヲ經期日又ハ時間ヲ限リ退去ヲ命シ三年以内同一ノ距離内ニ
出入寄宿又ハ住居ヲ禁スルコトヲ得
退去ノ命ヲ受ケテ期日又ハ時間内ニ退去セサル者又ハ退去シタルノ後更ニ禁ヲ犯

ス者ハ一年以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ仍五年以下ノ監視ニ付ス
監視ハ本籍ノ地ニ於テ之ヲ執行ス

第五條 人心ノ動亂ニ由リ又ハ内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲ス者アルニ由リ治安ヲ妨害
スルノ虞アル地方ニ對シ内閣ハ臨時必要ナリト認ムル場合ニ於テ其一地方ニ限リ
期限ヲ定メ左ノ各項ノ全部又ハ一部ヲ命令スルコトヲ得

一凡ソ公衆ノ集會ハ屋內屋外ヲ問ハス及何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス豫メ警察
官ノ許可ヲ經サルモノハ總テ之ヲ禁スル事

二新聞紙及其他ノ印刷物ハ豫メ警察官ノ檢閲ヲ經スシテ發行スルヲ禁スル事

三特別ノ理由ニ因リ官廳ノ許可ヲ得タル者ヲ除ク外銃器短銃火藥刀劍仕込杖ノ類
總テ携帯運搬販賣ヲ禁スル事

四旅人出入ヲ檢査シ旅券ノ制ヲ設クル事

第六條 前條ノ命令ニ對スル違犯者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上貳百
圓以下ノ罰金ニ處ス其刑法又ハ其他特別ノ法律ヲ併シ犯シタルノ場合ニ於テハ各
本法ニ照シ重キニ從ヒ處斷ス

第七條 本條例ハ發布ノ日ヨリ施行ス

●集會及政社法

明治二十三年七月
法律第五十三號

朕集會及政社法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

集會及政社法

第一條 此ノ法律ニ於テ政談集會ト稱フルハ何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス政治ニ
關ル事項ヲ講談論議スル爲公衆ヲ會同スルモノヲ謂フ政社ト稱フルハ何等ノ名義
ヲ以テスルニ拘ラス政治ニ關ル事項ヲ目的トシテ團體ヲ組成スルモノヲ謂フ

第二條 政談集會ニハ發起人ヲ定ムヘシ
政談集會ヲ開クトキハ發起人ヨリ開會四十八時以前ニ會場所在地ノ管轄警察官署
ニ届出ヘシ

前項ノ届出アリタルトキハ警察官署ハ直ニ其ノ領收證ヲ交付スヘシ
届書ニハ集會ノ場所年月日時並ニ發起人及講談論議者ノ氏名住所年齢ヲ記載シ發
起人署名捺印スヘシ

届書ニ記載シタル時刻ヨリ三時間ヲ過キテ開會セサルトキハ届出ノ効ヲ失フモノ
トス

第三條 日本臣民ニシテ公權ヲ有スル成年ノ男子ニアラサレハ政談集會ノ發起人ヲ
ルコトヲ得ス

第四條 現役及召集中ニ係ル豫備後備ノ陸海軍軍人警察官官立公立私立學校ノ教員

學生生徒未成年者及女子ハ政談集會ニ會同スルコトヲ得ス
法律ヲ以テ組織シタル議會ノ議員選舉準備ノ爲ニ開ク所ノ集會ハ投票ノ日ヨリ前
三十日間ハ選舉權ヲ行フヘキ者及被選舉權ヲ有スル者ニ限り本條ノ制限ニ依ルヲ
要セス

第五條 政談集會ニ於テハ外國人ヲシテ講談論議者ヲラシムルコトヲ得ス

第六條 政談集會ハ屋外ニ於テ開クコトヲ得ス

第七條 凡ソ屋外ニ於テ公衆ヲ會同シ又ハ多衆運動セントスルトキハ發起人ヨリ四
十八時以前ニ會同スヘキ場所年月日時及其ノ通過スヘキ路線ヲ管轄警察官署ニ届
出テ認可ヲ受クヘシ但シ祭葬講社學生生徒ノ體育運動及其ノ他慣例ノ許ス所ニ係
ルモノハ此ノ限ニアラス

警察官署ハ前項ノ届出ニ於テ安寧秩序ニ妨害アリト認ムルトキハ認可ヲ拒ムコト
ヲ得

警察官署ハ安寧秩序ニ妨害アリト認ムルトキハ何等ノ場合ニ拘ラス屋外ノ集會又
ハ多衆運動ヲ禁止スルコトヲ得

第八條 帝國議會開會ヨリ閉會ニ至ルノ間ハ議院ヲ距ル三里以内ニ於テ屋外ノ集會
又ハ多衆運動ヲナスコトヲ得ス但シ第七條第一項但書ノ場合ハ本條ニ於テモ之ヲ

適用ス

第九條 警察官署ハ制服ヲ著シタル警察官ヲ派遣シ政談集會ニ臨監セシムルヲ得
發起人ハ臨監警察官ニ其ノ求ムル所ノ席ヲ供スヘシ集會ニ關スル事項ニ付尋問ア
ルトキ何事タリトモ之ニ回答スヘシ

政談集會ニアラサルモ安寧秩序ヲ妨害スルノ虞アリト認ムル集會ニハ第一項ノ臨
監ヲ爲スコトヲ得

第十條 凡ソ集會ニハ戎器又ハ兇器ヲ携帯シテ會同スルコトヲ得ス但シ制規ニ依リ
戎器ヲ携帯スル者ハ此ノ限ニアラス

第十一條 凡ソ集會ニ於テ罪犯ヲ曲庇シ又ハ刑律ニ觸レタル者若クハ刑事裁判中ノ
者ヲ救護シ又ハ賞恤シ又ハ犯罪ヲ教唆スルノ談論ヲナスコトヲ得ス

第十二條 會場ニ於テ故テニ喧擾ヲ爲シ又ハ狂暴ニ涉ル者アルトキハ警察官ハ之ヲ
制止シ其ノ命ニ從ハサルトキハ會場外ニ退出セシムルコトヲ得

第十三條 警察官ハ左ノ場合ニ於テ集會ノ解散ヲ命スルコトヲ得

一 集會ノ成立此條例ニ背キタルトキ

二 第十一條ヲ犯シタルトキ又ハ安寧秩序ニ妨害アリト認ムルトキ
此ノ場合ニ於テハ全會ヲ解散セスシテ單ニ其ノ一人ノ講談論議ヲ停止スルコ

トキ得

三 警察官ノ臨監ヲ拒ミ又ハ其ノ求ムル所ノ席ヲ供セス又ハ其ノ尋問ニ答ヘサルトキ

四 會衆騷擾ニ涉リ警察官之ヲ制止スルモ鎮靜セサルトキ

五 第四條第十條ノ違犯者多數ニシテ警察官ヨリ退場ヲ命スルモ其ノ命ニ從ハサルトキ

第十四條 第二條ノ届出ヲ爲サシテ政談集會ヲ開キタルトキハ發起人ヲ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ會場ヲ貸與シタル者亦同シ

第十五條 第二條ノ届出ヲ爲スモ實ヲ以テセサルトキハ發起人罰前條ニ同シ

第十六條 第三條ヲ犯シタル者及第四條ニ背キ會同シタル者及其ノ之ヲ制止セサル發起人ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條ヲ犯シタル發起人ハ罰前項ニ同シ

政談集會ニ會同スルコトヲ得サル者ヲ勸誘シテ會同セシメタル發起人ハ本條第一項ノ例ニ照シテ一等ヲ加フ

第十七條 第六條ヲ犯シタル發起人及講談論議者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 第七條ニ背キタルトキハ發起人及教唆人ヲ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第八條ニ背キタルトキハ發起人及教唆人ヲ十一日以上六月以下ノ輕禁錮又ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 第十條ヲ犯シタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス其ノ之ヲ制止セサル發起人亦同シ

第二十一條 第十一條ヲ犯シタル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 警察官ヨリ解散ヲ命セラレタル後仍解散セサル者又ハ退出ヲ命セラレタル後仍退出セサル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮又ハ貳圓以上貳十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 政社ニハ役員ヲ置クヘシ

政社ハ組成後三日以内ニ其ノ役員ヨリ社名社則事務所役員及社員名簿ヲ其ノ事務所所在地ノ管轄警察官署ニ届出ヘシ其ノ届出ノ事項ニ變更アリタルトキ亦同シ

前項ノ届出アリタルトキハ警察官署ハ直ニ其ノ領收證ヲ交付スヘシ

役員ハ其ノ政社ニ關ル事項ニ付警察官ヨリ尋問アルトキ何事タリトモ之ニ開答ス

第二十四條 政社ニシテ政談集會ヲ開クトキハ第二條ノ手續ヲ爲スヘシ但シ講談論議者及會場ヲ豫定シテ定期ニ集會スルモノハ之ヲ初會ノ開會四十八時以前ニ屆出ルトキハ爾後ノ例會ハ屆出ヲ要セス其ノ屆出ノ事項ニ變更アリタルトキハ仍第二條ノ手續ニ依ルヘシ

第二十五條 現役及召集中ニ係ル豫備後備ノ陸海軍軍人警察官官立公立私立學校ノ教員學生生徒未成年者女子及公權ヲ有セサル男子ハ政社ニ加入スルコトヲ得ス

第二十六條 政社ニ於テハ外國人ヲ加入セシムルコトヲ得ス

第二十七條 政社ハ標章及旗幟ヲ用ヰルコトヲ得ス

第二十八條 政社ハ委員若クハ文書ヲ發シテ公衆ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ政社ト連結通信スルコトヲ得ス

第二十九條 政社ニ於テハ法律ヲ以テ組織シタル議會ノ議員ニ對シテ其ノ發言及表決ニ付議會外ニ於テ責任ヲ負ハシムルノ制規ヲ設クルコトヲ得ス

第三十條 凡ソ結社ニシテ安寧秩序ニ妨害アリト認ムルトキハ内務大臣ハ之ヲ禁止スルコトヲ得若シ禁止ノ命ニ從ハスシテ仍結社スルノ實アル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 第二十三條ニ背キ政社ノ屆出ヲ爲サ、ルトキ又ハ警察官ノ尋問ニ答ヘサルトキハ其ノ役員ヲ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條ノ屆出ヲ爲スモ實ヲ以テセサルトキ又ハ尋問ヲ受ケテ詐僞ノ答ヲ爲ストキハ前項ノ例ニ照シテ一等ヲ加フ

第三十二條 第二十五條ニ背キ入社シタル者及入社セシメタル役員ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條ヲ犯シタル役員ハ罰前項ニ同シ

第三十三條 第二十七條ニ背キ標章旗幟ヲ用ヰタル者及其ノ政社ノ役員ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 第二十八條ヲ犯シタルトキハ其ノ役員及委員ヲ一月以上一年以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十五條 集會ノ發起人又ハ結社ノ役員タルノ實アル者ハ一人又ハ數人又ハ何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス總テ發起人又ハ役員ノ責ニ任ス

第三十六條 此ノ法律ヲ犯シタル者ハ數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第三十七條 此ノ法律ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ六月トス

第三十八條 法律命令ニ定ムル所ノ集會ハ此ノ法律ニ依ルノ限ニアラス

●集會條例 明治十三年四月 布告第十二號

集會條例別冊ノ通被定候條此旨布告候事

(別冊)

集會條例

●明治十五年布告第二十七號ヲ以テ集會條例第二條、第四條、第五條、第六條、第八條、第十一條、第十二條、第十六條、第十七條、第十八條、第十七條、第十九條中改正追加セラ

第一條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ公衆ヲ集ムル者ハ開會二日前ニ講談論議ノ事項講談論議スル人ノ姓名住所會同ノ場所年月日ヲ詳記シ其會主又ハ會長幹事等ヨリ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ

第二條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結社何等ノ名義ヲ以テスルモ其實政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結合スルモノヲ併スル者ハ結社前其社名社則會場及ヒ社員名簿ヲ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ其社則ヲ改正シ及ヒ社員ノ出入アリタルトキモ同様タルヘシ此届出ヲ爲スニ當リ警察署ヨリ尋問スルコトアレハ社中ノ事ハ何事タリトモ之ニ答辨スヘシ前項ノ結社及其他ノ結社ニ於テ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メニ集會ヲ爲サントスルトキハ仍ホ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條 講談論議ノ事項講談論議スル人員會場及會日ノ定規アル者ハ其定規ヲ初會ノ三日前ニ警察署ニ届出テ認可ヲ受クルトキハ爾後ノ例會ハ届出ニ及ハスト雖モ

之ヲ變更スルトキハ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第四條 管轄警察官ハ第一條第二條第三條ノ届出ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ認可セス又ハ認可スルノ後ト雖モ之ヲ取消スコトアルヘシ

第五條 警察署ヨリハ正服ヲ著シタル警察官ヲ會場ニ派遣シ其認可ノ證ヲ検査シ會場ヲ監視セシムルコトアルヘシ

警察官會場ニ入ルトキハ其求ムル所ノ席ヲ供シ且其尋問アルトキハ結社集會ニ關スル事ハ何事タリトモ之ニ答辨スヘシ

第六條 派出ノ警察官ハ認可ノ證ヲ開示セサルトキ講談論議ノ届書ニ掲ケサル事項ニ亘ルトキ又ハ人ヲ罪戾ニ教唆誘導スルノ意ヲ含ミ又ハ公衆ノ安寧ニ妨害アリト認ムルトキ及集會ニ臨ムヲ得サル者ニ退去ヲ命シテ之ニ從ハサルトキハ全會ヲ解散セシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ解散ヲ命シタルトキ地方長官東京ハ警視長官ハ其情狀ニ依リ演說者ニ對シ一箇年以内管轄内ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止シ其結社ニ係ルモノハ仍ホ之ヲ解社セシムルコトヲ得内務卿ハ其情狀ニ依リ更ニ其演說者ニ對シ一箇年以内全國内ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止スルコトヲ得

第七條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル集會ニ現役及召集中ニ係ル豫備後備ノ陸

●明治二十二年十一月法律第三十一號ヲ以テ集會條例第七條ヲ改正セラ

海軍軍人警察官官立公立私立學校ノ教員生徒農業工藝ノ見習生ハ之ニ臨會シ又ハ其社ニ加入スルコトヲ得ス

第八條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ其旨趣ヲ廣告シ又ハ委員若クハ文書ヲ發シテ公衆ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ社ト連結通信スルコトヲ得ス

第九條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ屋外ニ於テ公衆ノ集會ヲ催スコトヲ得ス

第十條 第一條ノ認可ヲ受ケスシテ集會ヲ催スモノ會主ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其會席ヲ貸シタル者並ニ會長幹事及ヒ其講談論議者ハ各貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ第三條ノ規程ヲ犯シタル者モ亦本條ニ依ル

第十一條 第二條第一項ノ規程ニ背キテ届出ヲ爲サス又ハ尋問スル所ノ事項ヲ開答セサルトキ社長ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ詐欺ノ届出ヲ爲シ或ハ尋問ヲ得テ僞答スルトキ社長ハ右罰金ノ外尙ホ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第十二條 第五條ノ規程ニ背キテ派出警察官ノ臨席ヲ背セス又ハ其求ムル所ノ席ヲ供セサルトキ會主會長及社長幹事ハ各五圓以上五拾圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ警察官ノ尋問ニ答ヘス又ハ僞答スル者ハ同罪ニ處ス再犯ニ

當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第十三條 派出ノ警察官ヨリ解散ヲ命シタル後尙退散セサル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上六月以下ノ禁獄ニ處ス

第十四條 第七條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及社長幹事ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其他情狀ノ重キモノアレハ其社ヲ解散セシム其制限ヲ犯シテ入社シ又ハ臨會スル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第八條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及社長幹事ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ禁獄ニ處シ其社ヲ解散セシム此事ニ關スル者モ同罪ニ處シ脅迫スル者及ヒ罪再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處シ其社長幹事ハ一年以上五年以下ノ結社又ハ入社ヲ禁ズ

第十六條 學術會其他何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ハラヌ多衆集會スル者警察官ニ於テ治安ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルトキハ之ニ監視スルコトヲ得若シ其監視ヲ肯セサルトキハ第十二條ニ依テ處分ス

學術會ニシテ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スルコトアルトキハ第十條ニ依テ處分ス

第十七條 前條ノ場合ニ於テ治安ヲ妨害スト認ムルトキハ第六條ニ依テ處分ス
 第十八條 凡ソ結社若クハ集會スル者内務卿ニ於テ治安ニ害妨アリト認ムルトキハ
 之ヲ禁止スルコトヲ得若シ禁止ノ命ニ從ハス又ハ仍ホ秘密ニ結社若クハ集會スル
 者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス
 第十九條 成法ニ制定スル所ノ集會ハ此限ニアラス

○禁止、取締

●禁裡御用ノ會符標札及菊御紋付ノ提灯器物等禁止

明治元年三月
布告第百九十五號

一禁裏御用或ハ 禁裏御料又ハ 禁裏御内帑ト會符勝示杭標札等ニ書記シ候儀ハ有
 之間敷事ニ候處往々見受候ニ付以來屹度相改 御用 御料ト而已書記イタシ候儀
 被 仰出候事
 但標札ハ姓名相記シ又ハ官名役名等記シ候儀不苦候事
 一提燈又ハ陶器其外賣物工御紋ヲ畫キ候事共如何ノ儀ニ候以來右之類御紋ヲ私ニ附
 ケ候事屹度可禁止旨被 仰出候事
 但御用ニ付是迄被免之分モ一應伺出可申事

右之通被 仰出候條未々迄不洩樣可申達事

●由緒ノ有無ニ不關皇族ノ外菊御紋ヲ禁ス

明治四年六月
布告第百八十五號

菊御紋禁止ノ儀ハ兼テ御布告有之候處猶又向後由緒ノ有無ニ不關皇族ノ外總テ被禁
 止候尤御紋ニ紛敷品相用候儀モ同様不相成候條相改可申事
 但從來諸社ノ社頭ニ於テ相用來候分ハ地方官ニ於テ取調可申出事

●阿片煙草輸入ノ制禁

明治元年閏四月
布告第三百十九號

阿片煙草ハ人ノ精氣ヲ耗シ命數ヲ縮メ候品ニ付兼テ御條約面ニ有之候通リ外國人持
 渡候事嚴禁之處近頃竊ニ舶載之聞ヘ有之萬一世上ニ流布致候テハ生民之大害ニ候間
 賣買之儀ハ勿論一已ニ吞用ヒ候儀決而不成候若御制禁相犯シ他ヨリ顯ハル、ニ於
 テハ可被處嚴科候間心得違無之樣未々ニ至ルマテ堅ク可相守者也
 右御達書府藩縣一同高札ニ揭示可致樣被仰出候事

●富興行ノ類禁止

明治元年十二月
布告第千二百二十四號

富興行ノ儀ハ兼テ御制禁ニ有之處近年諸國ニ於テ金錢融通ヲ名トシ或ハ社寺再建等ニ托シ興行致候向モ有之趣元來澆季之弊風僥倖ノ利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ自然農工商共其職業ヲ惰リ往々之カ爲ニ家産ヲ破候者モ不少哉ニ相聞ヘ以テノ外ノ事ニ候斯御一新ノ折柄右様ノ所業殊ニ御趣意ニ相戻候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事

●富籤賣買者處分

明治十五年五月
布告第二十五號

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤賣買ノ牙保幫助ヲ爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通制定ス

第一條 凡富籤賣買ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條 凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未ダ拂ハサルトテ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借リテ購買シタル者及他ヨリ譲リ受ケタル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ定メタル刑期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル刑期金額ニ下ルコトヲ得ス

第四條 富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所ノ罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未ダ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

再犯ニ係ル者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

第六條 富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項ニ依ル
右奉 勅旨布告候事

●響石類調合ノ鼠取蠅取藥ノ販賣禁止

明治五年五月
布告第四百十二號

鼠取或ハ蠅取藥ト唱ヘ響石ノ類ヲ調合致シ世間ニ賣買致來候處自今令禁止候事

●燐製鼠取藥ノ販賣禁止

明治十年三月
內務省達乙第三十六號

從來燐製之鼠取藥ヲ以テ賣藥トナシ候儀聞届鑑札下渡候向有之候處右ハ毒藥ニテ到底民間誤用ノ虞ナキヲ免レヌ殊ニ本年太政官第二十號毒劇藥取扱規則公布相成取締上ニモ關係候ニ付自今一切禁止候條右營業者有之府縣ハ其旨相達速ニ鑑札返納可取計此旨相達候事

府 縣

但請賣業ノモノモ同様賣業規則ニ照シ禁止之處分可相違事

●北海道臘虎並臘豚獸獵獲禁止

明治十七年五月
布告第十六號

自今北海道ニ於テ臘虎並臘豚獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三百七十三條ニ照シテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス
但農商務卿ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニアラス
右奉 勅旨布告候事

●菊御紋ヲ畫キタル賣品取締

明治十三年四月
宮内省達乙第二號

府 縣

菊御紋章ヲ賣物等ニ畫キ候儀並紛敷品相川候儀モ不相成旨明治元年三月二十八日明治四年六月十七日太政官布告ノ趣モ有之候處近來往々賣品ニ御紋章ヲ畫キ候向有之哉ニ付取締方一層注意可致候此段相違候事

●火藥取締規則

明治十七年十二月
布告第三十一號

火藥取締規則別冊ノ通制定ス

但從前ノ成規中此規則ニ矛盾スルモノハ總テ廢止ス
右奉 勅旨布告候事

(別冊)

火藥取締規則

第一章 總則

- 第一條 凡火藥劇發火藥棉火藥、ナイトロケリセリン、ダイナマイト、雷汞、其他劇發質ノ物品ハ人民ニ於テ製造スルコトヲ禁ス但烟火マツチノ類ハ此限ニアラス
- 第二條 火藥類火藥劇發火藥、火藥類ノ賣買營業ヲ爲サントスル者ハ管轄廳東京府ハニ願出免許鑑札ヲ受ク可シ但營業者ハ一管内ニ十五人以内トス
- 第三條 火藥類ハ營業者ニ限リ陸軍海軍兩省ヨリ其貯藏品ヲ拂下ケ可キモノトス
- 第四條 管轄廳東京府ハニ於テ火藥類ノ検査ヲ必要ト認ムル時ハ營業者タルト否トハ問ハス警察官ヲシテ之ヲ検査セシムルコトアル可シ
- 第五條 戰時若シハ事變ニ際シテハ陸軍卿海軍卿ハ火藥類ノ拂下ヲ停止シ内務卿ハ其賣買運搬ヲ停止スルコトアル可シ
- 第六條 火藥類ハ官許ヲ得ルニ非サレハ日出前日沒後ニ於テ賣買運搬其他荷造等ヲ爲ス可カラス

第二章 賣買

第七條 營業者ハ毎月買受ケタル火藥類ノ種類數量ヲ記シ證書アレハ之ヲ添ヘ翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第八條 營業者ニ非スシテ所有ノ火藥類ヲ賣ラントスル者ハ營業者ニ之ヲ賣渡ス可シ
シ營業者ハ其賣渡證書ヲ取り置ク可シ

第九條 營業者銃砲用又ハ抗業土工烟火其他職業用ニ限リ火藥類ヲ賣渡ス可キモノトス但十六歳未満若クハ白痴風癪ノ者ニハ之ヲ賣渡スコトヲ許サス

第十條 火藥類ヲ買受ントスル時銃獵若クハ烟花製造ノ免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ銃砲用ノ爲ニスル者ハ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ

陸海軍々人ノ射的用ニ供スル者ハ其省ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ抗業土工其他職業用ニ供スル者ハ其旨趣及種類數量并使用ノ場所ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ但一回ニ左ノ數量ヲ超ルコトヲ許サス

小銃用 火藥 三百目 雷管 五百箇
船舶設備銃砲用 大砲一門ニ付 火藥五十發分 導火管類七十箇
小銃一挺ニ付 火藥百發分 雷管百五十箇

烟火製造用 火藥 五貫目
抗業土工其他職業用 火藥 二百貫目
劇發火藥三十貫目

●明治十九年十月
勅令第六十七號ヲ
以テ火藥取締規則
第十條、第二十條
及ヒ第二十八條中
改正セララル

抗業土工用ノ爲メ特ニ多量ノ火藥類ヲ要スル者ハ其旨趣數量并使用ノ場所等ヲ詳細シタル書面ヲ以テ内務大臣ノ特許ヲ受クヘシ此場合ニ於テハ直ニ陸海軍兩省ヨリ火藥類ノ拂下ヲ受クルコトヲ得

第十一條 營業者ハ買受人ノ免狀ヲ檢シ若クハ許可證ヲ受取り火藥類ヲ賣渡ス可シ但第十條ノ數量ヲ超ユルコトヲ許サス

第十二條 營業者ハ毎月火藥類買受人ノ住所氏名及其賣渡シタル種類數量年月日ヲ記シ證書アレハ之ヲ添ヘ翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第三章 貯藏

第十三條 火藥類ハ火藥三百目雷管導火管類五百個迄ハ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得

營業者ハ前項制限ノ外火藥十貫目劇發火藥一貫目雷管導火管類壹萬箇迄烟火製造人ハ火藥五貫目劇發火藥五百目迄ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ許可ヲ受ケ倉庫ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得其數量ヲ超ル時ハ火藥庫ノ外ニ之ヲ貯藏スルコトヲ許サス火藥五百貫目以上劇發火藥五十貫目以上ハ火藥庫ト雖モ之ヲ貯藏スルコトヲ許サス

第十四條 火藥類ヲ一庫内ニ貯藏スル時ハ其種類毎ニ不燃質物ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第十五條 火藥庫ヲ建設セントスル者ハ其位置並ニ建設ノ方法書及近傍ノ地圖ヲ添
〜管轄廳東京府ハニ願出許可ヲ受クヘシ

第十六條 火藥庫ハ皇居離宮ノ區域ヲ去ル十町以内ノ地ニ建設スルコトヲ許サス

第十七條 火藥庫ハ皇陵社寺公園家屋火ヲ取扱フ場所宅地國道縣道鐵道電信柱汽船
ノ通スヘキ河湖及他ノ火藥庫境界トノ中間ニ五十間以上ノ距離ヲ有ツ可シ

第十八條 火藥庫ハ土藏又ハ煉瓦造ニシテ家根ハ輕量ノ不燃質物ヲ用ヒ内部ニハ鐵
釘石瓦ヲ露ハサス窓ニハ透明ノ硝子ヲ用フヘカラス又避雷針ヲ設ケ庫外ノ周圍ニ
二間以上ヲ隔テ、高サ六尺以上ノ土堤ヲ築キ其入口ニ火藥庫ト書シタル標木六尺
以上ニシテ五寸
角以上ノモノヲ建ツヘシ

第十九條 火藥庫ヨリ十四間以内ノ地ニ材木草秣其他燃質物ヲ蓄積ス可カラス又五
十間以内ニ於テ火ヲ取扱フ建造物ヲ設ケ若クハ瓦斯ノ傳送管ヲ施シ若クハ發火質
ノ物品ヲ蓄積ス可カラス

第二十條 坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ノ爲メ其事業中假貯藏所ヲ設ケント
スルモノハ第十七條ニ掲ケタル距離ヲ二倍シ第十五條ニ據リ管轄廳東京府ハニ願出
許可ヲ受クヘシ但第十條制限以上ノ火藥類ヲ貯藏セントスル者ニ對シテハ管轄廳
ニ於テ特ニ其距離ヲ指定スルコトアル可シ

第二十一條 烟火製造所ハ家屋若クハ火ヲ取扱フ場所ヨリ十間以上ノ距離ヲ有ツ可
シ又五貫目以上ノ火藥類ヲ置クヘカラス

第四章 運搬

第二十二條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬セントスル時ハ其種類數量運搬ノ日時場所
及水陸通路ノ名稱ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ攜帶シ運搬畢ラハ直ニ之
ヲ返納ス可シ若シ其警察署管轄外ノ地ニ運搬スル時ハ其地ノ警察署ニ之ヲ納ム可
シ

第二十三條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬スル時ハ鐵釘鐵輪ヲ用ヒサル木製銅製若ク
ハ亞鉛製ノ器ニ入レ其外部ハ筵包若クハ繩卷ト爲シ毛布類ヲ以テ之レヲ覆ヒ赤地
ニ火藥ノ二字ヲ白書シタル小旗陸路ニハ曲尺縱二尺横二尺五寸水路
ニハ曲尺縱三尺五寸横五尺ヲ建テ護送人ヲ附ス可
シ但船積スル時ハ明治六年八月第貳百九十二號布告危害品船積法ニ從フヘシ

第五章 罰則

第二十五條 私ニ火藥類ヲ製造シ若クハ販賣シタル者ハ軍用品ニアラスト雖モ刑法
第百五十七條ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第百六十條ヲ適用ス

第二十六條 刑法第五百十八條第五百十九條第六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス

第二十七條 私ニ火藥庫又ハ假貯藏所ヲ建設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第四條ノ検査ヲ拒ミ又ハ第五條ノ停止ヲ犯シテ賣買運搬シ第九條第十條第十一條第十三條第十九條ニ違犯シ又ハ第二十一條ニ違犯シタル者又ハ營業者賣買ヲ除ク外火藥類ヲ讓受若クハ讓渡シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第六條第七條第八條第十二條第十四條第十八條第二十二條第二十三條第二十四條ニ違犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 營業者此規則ニ違犯シタル時ハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

附則

一從前免許ヲ得タル火藥製造人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄其營業ヲ差許シ又同日迄ニ火藥製造諸器械及火藥類ノ現貯藏數量ヲ記シ管轄廳東京府ハニ願出ルニ於テハ相當ノ代價ヲ以テ之ヲ買上ク可シ警視廳

一從前免許ヲ得タル彈藥免許商人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄火藥類賣買營業ヲ差許シ從前免許ヲ得タル烟火製造所ハ右同日迄其製造ヲ差許ス又從前火藥類ヲ貯藏シタル者ハ來ル明治十八年一月三十一日迄其貯藏ヲ差許ス其日限ヲ過クルトキハ總テ此規則ニ從フヘシ

●火藥取締規則被定ニ付届出方

明治十八年一月 (太政官)達第一號

警視廳 府縣東京府ヲ除ク

明治十七年 月 日 第三拾壹號布告ヲ以テ火藥取締規則被定候ニ付テハ管轄廳ニ於テ届出方左ノ通可相心得此旨相達候事

一火藥類ノ賣買營業ヲ免許シ又ハ火藥庫設置ヲ許可シタル時ハ營業者ノ住所族籍氏名及火藥庫設置ノ地名番號ヲ記シ内務陸軍海軍ノ三省へ届出ヘシ

一營業者ノ賣買シタル火藥類ノ種類數量ヲ統計シ毎年一月内務陸軍海軍ノ三省へ届出ヘシ

●摺附木ニ黃燐ヲ用フルヲ禁ス

明治十八年一月 内務省達甲第一號

警視廳 府縣

摺附木製造ニ黃燐ヲ用ヒ候儀ハ自今禁止候様可致此旨相達候事

●銃砲取締規則

明治五年正月
布告第二十八號

銃砲取締規則別紙之通被定候條來ル四月ヨリ規則之通可相守事
(別紙)

銃砲取締規則

第一則 大小銃並彈藥類商賣ノ儀ハ府縣共定員商賣ノ外取扱致問敷右定員ノ商賣ハ其地方管廳ニ於テ精選ノ上免許狀可差遣事

但東京大阪ノ儀ハ武庫司ニ於テ管轄スヘキ事

免許商賣ノ定員

一府下 各五員

一縣下 各三員

一鐘臺本分管下 各一員

但府縣應下開港場等ニアルハ別ニ設ケス

一開港場 各五員

右免許差遣候商賣ノ姓名住所等東京武庫司ヘ届クヘキ事

(明治五年布告第
二百八十二號參看
スヘシ)
●明治八年(太政
官)達第百一十一號
ヲ以テ管理テ内務
省ニ屬シ同十七年
布告第三十一號ニ
依リ彈藥ニ關スル
件消滅ス以下同シ
●明治八年布告第
十二號ヲ以テ武庫
司廢ス以下同シ

●明治十三年布告
第八號ヲ以テ第二
項ヲ追加セ
ラル

第二則 免許商人タリトモ軍用ノ銃砲彈藥類ヲ竊ニ賣買不相成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取其員數ヲ照ラシ賣渡可申又買入ノ節ハ其官廳ヘ願出免手形ヲ受其員數ヲ以テ買取可申事

但東京大阪ノ儀ハ武庫司ヘ願出可申事

免許商人ハ陸海軍准士官以上ノ武官ヨリ其所有ノ軍用銃並ニ其彈藥類ヲ買入ントスルトキハ買入願書ニ其賣主ノ連署ヲ爲サシムヘキ事

第三則 免許ノ商人其賣買ノ銃砲彈藥類ハ多少ヲ論セス買取賣渡共其主人ノ姓名其物品ノ員數等明細附記シ軍用ノ者ハ免手形相添毎月其管廳ヘ可差出其應ヨリ毎月十日ヲ限リ管轄鎮台ヘ差送可申事

但諸鎮台ヨリ毎歲正月七月兩度半ク年明細帳ヲ以テ東京武庫司ヘ差送リ可申尤

モ東京大阪ノ儀ハ武庫司ニ於テ取締可致事

第四則 彈藥ノ儀ハ假令些少ノ品タリトモ唯便利ノミナ計リ勝手ノ場所ヘ差置閉敷兼テ其地方管廳ヘ願出差圖ヲ受相圍可申事

但東京大阪ノ儀ハ武庫司ヘ願出ヘキ事

第五則 華族ヨリ平民ニ至ル迄免許銃類ヲ除クノ外軍用ノ銃砲並彈藥類ヒストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出

東京大阪ハ武庫司へ持出 別紙銃砲改刻印式ノ通り番號官印ヲ受可申他人へ讓與へ候節ハ第二則ノ手續ニ從フヘシ

但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通りタルヘシ

銃砲改刻印ノ式

干支何番武庫司或ハ何府縣

右所持ノ人名番號等逐一書記シ置管轄鎮台へ届出鎮台ヨリ東京武庫司へ差送可申事

免許ノ銃類

一和銃四文目八分玉以下

一各國諸獵銃

但西洋獵銃ノ儀ハ其玉目稍大ナレトモ霰彈ヲ用ユル者ハ之ヲ許ス

右獵用銃所持ノ者ハ其銃名員數等巨細附記シ其管轄へ届出其應ヨリ東京武庫司へ

差出可申 東京大阪ハ所持ノ者ヨリ 萬一軍用獵用銃ノ差別難相辨者官へ尋出候得ハ検査ノ

上免許ノ證印ヲ据へ可相渡事

第六則

第七則 銃砲彈藥下々ニ於テ猥リニ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便利ヲ發明シ爲試製

●明治六年布告第二十五號鳥獸獵免許規則ニ依リ第六則消滅

作致度者ハ其管轄へ相願管轄鎮台へ届出免許ヲ可受事

但製作其宜キニ適ヒ最モ便利ナル者ハ鎮台ヨリ武庫司へ差送り検査ヲ遂ケ採用

可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰可有之事

是迄銃砲並彈藥類賣買致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺漏書記シ管轄應へ爲指出其應ヨリ東京武庫司へ可差出事

但東京大阪ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ武庫司へ可届出事

右之通ニ候事

●獵銃製造人製造銃直賣取締

明治十六年六月 內務省達番外

警視廳 府縣 東京府三重縣ヲ除ク

獵銃製造人製造銃賣捌方ノ儀ニ付從來伺出ノ向へ需用者ノ注文ニ限リ賣渡シ不苦旨指令及ヒタル義モ有之候處自今免許商人ノ外直賣不相成此旨爲心得相達候事

●銃砲取締規則違反者處分ノ件

明治五年九月 布告第二百八十二號

諸省府縣

銃砲取締ノ儀ニ付別紙ノ通被相定候條此旨相達候事

(明治十四年布告第七十二號同八年內務省達乙第百二十號同十一年司法省達丁第四號參看)

●明治七年布告第百三十二號ヲ以テ第二項ヲ追加セラ

(別紙)

銃砲取締規則ニ違ヒ銃砲彈藥ヲ竊ニ所持シ且致取扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五拾錢ノ過料可申付候事

但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半金ヲ可被下候事

免許ヲ得スシテ銃砲彈藥ヲ製造スル者ハ其品取上ケ更ニ三圓以内ノ過料可申付事

但書同前

右取上候品東京大坂ハ武庫司其他ハ所管ノ鎮台ヘ可差出事

●銃砲取締管理方

明治八年六月 (太政官)達第百十一號

使 府縣

今般銃砲彈藥取締ノ儀內務省ヘ管理被仰付候ニ付テハ追テ相達候儀モ可有之候得共差向キ從前規則ノ通相心得取締可致尤右規則中是迄陸軍省及各鎮台等ヘ申出候分ハ總テ內務省ヘ可申出其他管理替ニ付抵觸ノ簡條ハ廢シ候儀ト可心得此旨相達候事

●武官所有ノ軍用銃賣買取規則

明治十三年三月 (太政官)達第二十二號

使 府縣東京府ヲ除ク

(明治十一年布告第十一號同年(太政官)達第十七號參看)

陸海軍武官所有ノ軍用銃ハ明治五年正月第二十八號布告ニ依リ管轄廳ノ検査番號ヲ受來候處自今准士官以上ノ武官ハ左ノ規則ニ據ルヘシ此旨相達候事

武官所有ノ軍用銃賣買取規則

第一條 陸海軍省ニ於テハ武官所有ノ軍用銃並其彈藥類買入ノ節交付スヘキ買入免狀ヲ定メ置キ豫メ其印影等照會ノヲメ使府縣廳東京ハ警視本署ヘ通知スヘシ

第二條 武官軍用銃並其彈藥類ヲ買入ル、時ハ前款ノ免狀ヲ受取リ之ヲ該地ノ免許商人ニ交付シテ其買入ヲ爲スヘシ

第三條 武官轉任又ハ免官スル時ハ其奉職中所有セシ銃器ハ其銃名檢印アラフハ其番號ヲ記載シ使府縣廳東京ハ警視本署ヘ届出常則ニ從ヒ其取締ヲ受クヘシ

第四條 武官奉職中所有ノ軍用銃及其彈藥類ヲ人民ヘ賣渡サントスル時ハ買受人ヨリ其使府縣廳東京ハ警視本署ヘ差出スヘキ願書ヘ連署スヘシ

●銃砲彈藥外國人ヨリ買入手續

明治五年六月 布告第百八拾五號

銃砲取締規則中第二則開港開市場ニ限リ自今左ノ通可取扱事
一 開港開市場ニ於テ免許商人ノ輩銃砲并彈藥類外國人ヨリ買入度儀願出候節ハ其管轄廳ニ於テ嚴重取調ヘ一旦官廳ヘ買上然ル後願出ノ商人ヘ可相渡賣拂ノ節モ同様

(明治七年(太政官)達第九十九號參看)

管應ニ於テ致取引可遣事
但免許商人ヨリハ買入賣渡共其都度々々員數書ヲ以テ開港開市場管應へ願出處
置テ可受事

●銃砲彈藥外國人ト賣買出願取計方

明治七年七月
(太政官)達第九十九號

開港開市場有之使府縣

(明治八年(太政官)達第百一十一號及同十一年同達第十七號ヲ參看)

銃砲并彈藥類外國人ヨリ買入ノ儀ニ付明治五年六月第百八十五號布告ノ趣モ候處自今
銃砲并彈藥類外國人ト賣買ノ儀免許商人ヨリ願出候節ハ其管應ヨリ陸軍省へ申請ノ
上可取計此旨相達候事

●免許商人外國人ト銃砲彈藥賣買出願方

明治十一年五月
(太政官)達第十七號

開港開市場有之使府縣

(明治十七年布告)第三十一號參看)

銃砲彈藥賣買免許商人外國人ト銃砲彈藥類賣買願出候節取扱方ノ儀ハ明治七年七月第
九十九號八月第六百一十一號達ノ趣有之候處今般第十一號布告ノ趣モ有之ニ付自今銃
獵免狀付與有之外國人へ獵用ノ銃器彈藥類賣渡候儀ハ其應限リ開屆候儀ト可心得此

旨相達候事

但免許商人ヨリハ其姓名數量等ヲ記載シ其時々爲届出候様可取計事

●銃砲類外國人ト賣買統計報告方

明治二十年四月
内務省訓令第二十六號

開港場開應 府縣
市場アル應

銃砲類外國人ト賣買ノ儀免許商人ヨリ願出ノ節ハ其應ニ於テ許可シ賣買員數種目及
ヒ双方國人名共一周年間統計シ翌年一月三十一日限リ當省へ報告スヘシ

●屠牛取締方

明治四年八月
大藏省達第三十八號

一 近來肉食相開候ニ付テハ屠牛渡世ノ者屠場ノ儀ハ人家懸隔ノ地ニ取設ケ病牛死牛
トモ不賣醫様嚴重取締可申就テハ左ノ二條相守各地方官ニ於テ雛形ノ鑑札製造致
シ屠場取開ノ場所巨細取調ノ上相渡シ當省へ追テ可届出事
一 牝牛ハ蕃息ノ基本ニ付總テ屠殺不致様取締可致事
但十二三歳以上孕牛ニ難相成分不苦候事
一 諸開港場ニ於テ輸出ノ節取締ノ儀ハ其地方官ニ於テ見込相立取締可致事
但見込ノ趣追テ可申出事

右ノ通候事

(鑑札離形略ス)

●石油取締規則

明治十六年二月 布告第六號

明治十四年八月第四十號及ヒ同年九月第五十號布告石油取締規則左ノ通改定ス

但施行日限ノ儀ハ明治十五年八月第四十四號布告ノ通タルヘシ

第一條 石油ヲ分チテ二種トシ閉塞發焔試驗法ヲ用ヒ攝氏驗温器三十度(華氏八十六度)以上

ノ温度ニ達セサレハ發焔セサルモノヲ第一種トシ三十度ニ達セスシテ發焔スルモノ

ノヲ第二種トス

第二條 點燈用ニ供スルハ第一種ノ石油ニ限リ第二種ノ石油ハ醫療製藥調劑及ヒ物

理學化學工藝上ニ於テ業用ニ供スルノ外之ヲ用フルヲ許サス

第三條 石油營業者ヲ分テ擴張者精製者問屋及ヒ小賣商ノ四類トス其營業者ハ都テ

管轄廳東京府下ノ許可ヲ受クヘシ但二類以上兼業スルトキハ別ニ其許可ヲ受クヘシ

第四條 石油ノ種類ハ内務卿ノ必要トスル地方ニ於テ検査員ヲシテ之ヲ検査セシム

ヘシ 石油ハ検査済ノ證アルモノニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ許サス但擴張者ヨリ精製

●明治十六年三月 布告第十號ヲ以テ 施行日限ハ追テテ 告アルマテ延期仍 ホ但書削除セラレ

者ニ販賣スルハ此限ニアラス

第五條 検査済ノ石油ヲ家屋内ニ貯藏スルヲ得ルハ第一種ノ石油五石以内第二種ノ

石油五斗以内トシ容器ハ漏出ノ虞ナキ不燃質物ニ限ルヘシ

第六條 石油營業者前條制限外ノ石油並ニ検査未済ノ石油ヲ貯藏スル場所建物及精

製所ノ構造方ハ都テ管轄廳東京府下ノ認可ヲ受クヘシ

第七條 第二種ノ石油ハ精製者問屋ヨリ直ニ需要者ニ販賣シ小賣商ハ第一種ノ石油

ニ限リ販賣スルヲ得ルモノトス

第八條 第二種ノ石油ヲ販賣スル者ハ購買者ヨリ其數量及ヒ需用ノ趣意年月日住所

氏名ヲ詳記シタル書付ヲ取り置キ一年間保存スヘシ但販賣時限ハ日出ヨリ日没マ

テトス

第九條 石油ヲ運搬スルトキハ其石油タルコトヲ表記スヘシ但其積卸ニ必用ナル時

間ノ外物揚場又ハ路傍ニ置クヘカラス

第十條 此規則ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

右奉 勅旨布告候事

●鳥獸獵規則

明治十年一月 布告第十一號

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

(別紙)

鳥獸獵規則

- 第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノ爲メニスルヲ遊獵トス
- 第二條 銃獵免狀ナキモノハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除クカタメニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時免許ヲ與フヘシ
- 第三條 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ
- 第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若クハ授受スルコトヲ禁ス
- 第五條 免狀ヲ願受クル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ
 - 一 職獵稅 金壹圓
 - 一 遊獵稅 金拾圓
- 第六條 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受クル者ハ更ニ税金ヲ納ムルニ及ハ

●明治十四年布告第四十三號ヲ以テテ内務省ヲ農商務省ニ改メ同十四年布告第六十一號ヲ以テ農商務省ヲ警視廳ト改正セラル

●明治十年布告第八十五號ヲ以テ鳥獸獵規則第九條ニ追及第十八條ヲ追加セラル

- スト雖モ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ
- 第七條 左ニ列記シタル者ニハ免狀ヲ付與セサルヘシ
 - 一 十六歳未滿ノ者
 - 一 白痴風癡等ノ者
 - 一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシモノ
- 第八條 左ニ列記シタル場所ニ於テハ銃獵ヲナスヲ禁ス
 - 一 都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所
 - 一 銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所
 - 一 禁獵制札ノ場所
- 但制札ハ獵銃ニ挺ヲ交叉シタル圖ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記シ掲ケ置クヘシ
- 一 作物植付アル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内
- 但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タルモノハ此限ニアラス
- 第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下并ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃ヲ用フルヲ禁ス但開拓使管内ニ限リ和銃玉目拾匁以下ヲ用フルヲ得ヘシ
- 第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス此期限ノ外ハ銃獵

ヲ禁ス

但地方ノ景況ニヨリ己ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スル時ハ其理由ヲ警視廳へ届出ヘシ

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帯スヘシ出獵中警察官吏區戶長村役人等免狀ヲ看ント請フモノアル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスルトキハ第八條所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張又ハ假圍ヲナスヘシ

第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ

第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五十圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ケ其期内銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノモノヲ他ヨリ證據ヲ取リ訴出ル時ハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラス二十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

第十八條 開拓使管内ニ入り鹿獵ヲナスモノハ該使施行ノ規則ニ遵フヘシ

●鳥獸獵免狀渡方條例

明治十四年九月 農商務省達乙第八號

警視廳 府縣東京府神總

鳥獸獵免狀渡方條例追テ何分ノ儀相達候迄明治十年二月内務省乙第十一號達之通可相心得此旨相達候事

(明治十年二月内務省達乙第十一號)

太政官第十一號布告鳥銃獵規則改正相成候ニ付明治八年當省乙第三十六號達銃獵鑑札渡方條例別冊ノ通改正候條右ニ照準可取計此旨相達候事

(別冊)

銃獵免狀渡方條例

第一條 鳥獸獵免狀ハ別紙雛形ノ通相製シ當省ヨリ相渡スヘシ

第二條 免狀ハ兼テ凡積ヲ以テ東京府下ハ當省其他ハ地方管廳へ可相渡置ニ付管内限リ總計取調毎年六月三十日迄請取方申立ヘシ

第三條 免狀下ケ渡ノ節ハ毎年其管廳於テ帳簿ヲ製シ番號并ニ住所姓名身分年齡共詳細登記スヘシ

第四條 管廳於テ免狀ニ記スヘキ期限國郡姓名年齡住所共雛形ノ通記入押印ノ上下

ケ渡スヘシ

第五條 定期ヲ伸縮スル場合ニ於テ免許スル免狀ハ其年七月ヨリ翌年六月迄ナ一期トシ新舊引替相渡スヘシ

第六條 銃獵滿期ノ分ハ免狀收却ノ上總テ該管廳於テ斷裁スヘシ

第七條 凡積ヲ以テ相渡置候免狀殘餘有之節モ前條ニ同シ

第八條 鳥獸獵免狀渡濟ノ上ハ別紙雛形ノ通總計表ヲ製シ翌年七月限當省ヘ差出スヘシ

第九條 定期ヲ伸縮スル場所ハ實際取調其時々届出ヘシ

第十條 銃獵犯則ノ者罰金上納方ハ明治八年司法省第四十號達ノ通相心得ヘシ

第十一條 禁獵制札ノ儀ハ別紙雛形ニ照シ製作可致最其大小ハ適宜ニ任スヘシ但官設ハ府縣費民設ハ民費又ハ自費タルヘシ

第十二條 銃獵免狀ヲ毀失セシ者再應請取方申立候節ハ事實取糺ノ上更ニ下渡方取計規則ノ通手數料收入スヘシ

(免狀其他雛形零ス)

●銃獵伸期ノ節免狀書改方

明治十三年十月 內務省達丙第六十五號

●明治十年內務省達乙第五十六號ヲ以テ第九條改正セラル
●明治十五年司法省達丁第三十八號ニ依リ第十條中點ノ廉消減セリ

東京警視本署 府縣東京府沖繩縣ヲ除ク

鳥獸獵期伸縮許可ノ場所ニ於テ定期免許ノ者更ニ伸期願出免許候節ハ免狀書換手數料不及取立本人所持ノ免狀月日ノミ書改メ候儀ト可相心得此旨相達候事
但從前ノ同指令等抵觸ノ分ハ總テ取消候儀ト可相心得此旨相達候事

●銃獵伸期届出ノ節有害ノ鳥獸名具申方

明治十七年三月 農商務省達第八號

府 縣

鳥獸獵規則第十條但書ニ據リ鳥獸ノ害ヲ爲ス山間等ノ村落銃獵伸期ノ儀届出ノ節該鳥獸名記載無之調査上差支候條以後右届出之節ハ必該鳥獸名ヲ明記シ被害ノ景狀ヲ具シ可差出此旨相達候事

●臨時免許ヲ與ヘ有害ノ鳥獸ヲ除害シ其鳥獸名及ヒ景況届出方

明治十七年六月 農商務省達第十四號

警視廳 府縣東京府沖繩縣ヲ除ク

鳥獸獵規則第二條但書ニ據リ臨時免許ヲ與ヘ除害セシメタルトキハ該鳥獸名ヲ明記

シ被害ノ景狀ヲ具シ其都度可届出此旨相達候事

●外國人銃獵免狀取扱條例

明治十一年十月
內務省達丙第五十三號

東京警視本署 開港場 府縣

當明治十一年度外國人銃獵免許ノ儀別紙ノ通免狀並條約及渡方條例共改正候條此旨相達候事

(別紙)

外國人銃獵免狀取扱條例

- 第一條 銃獵免狀ハ別紙雛形ノ通り相製シ凡積ヲ以テ當省勸農局ヨリ相渡スヘシ
- 第二條 免狀下渡ノ節ハ外國人ナシテ別紙雛形ノ通條約書ニ記名調印セシメ各地方長官東京ニテハ警視本署長官モ同シシ記名調印シテ之ヲ該廳ニ留メ署キ免狀渡方取計フヘシ
- 第三條 出獵スルトキハ必此免狀ヲ携帶スヘシ若シ銃獵シ得ヘキ場所或ハ其近傍ニ於テ其筋ノ日本官吏ノ求アルトキハ速ニ免狀ヲ示シテ點檢ヲ受クヘシ
- 第四條 免狀渡濟ノ上ハ總計表ヲ製シ翌年七月限り當省勸農局ヘ差出スヘシ
- 第五條 免狀不申受銃獵セシ者有之節ハ該獵者ヲ取押ヘ成丈ケ證據取置其始末詳細

●明治十三年十月
內務省達丙第六十七號ヲ以テ第三條改正セララル

領事へ訴出へシ

第六條 銃獵免狀ヲ領受セシ者ハ條約規程内ハ自他管内ヲ問ハス總テ免許ノ效アルモノトス

第七條 免狀付與スル節ハ免狀料トシテ金拾圓ヲ收入スヘシ

但遺失毀傷等ニ因リ免狀再渡ヲ乞フ時ハ手数料トシテ金貳拾五錢ヲ收入スヘシ
(免狀及條約書雛形畧ス)

●外國人渡銃獵免狀遺失届出ノ件

明治十年十二月
內務省達丙第六十號

開港場 府 縣

外國人渡銃獵免狀遺失届出候節ハ該免狀番記號並本人國姓名及住地等詳細取調其都度可届出候此旨相達候事

但遺失免狀拾取届出候節ハ該廳ニ於テ斷裁シ此旨可届出事

●朝鮮國人鳥獸獵免狀取扱方

明治十六年十月
農商務省達第十二號

本邦在留朝鮮人鳥獸獵免狀ヲ請求スルトキハ遊獵免狀ヲ下付シ總テ内國人同様處分候儀ト可相心得此旨相達候事

●明治十二年內務省達丙第十四號ヲ以テ第七條ノ但書改正セララル

●鳥獸獵免狀亡失者届出ニ及ハス

明治十八年十二月
農商務省達第四十七號
警視廳 府縣東京府神繩
縣ヲ除ク

鳥獸獵免狀ヲ亡失セシ者有之節ハ自今農務局へ届出ニ不及候條其公告ヲ要スヘキモ
ノハ其應ニ於テ官報掲載方取計亡失員數ハ該年總計表中一欄ヲ設ケ記載致スヘシ此
旨相達候事

●鳥獸獵免狀へ農務局ノ割印ヲ押捺セス

明治二十二年六月
農商務省訓令第三十四號
廳 府縣東京府神繩
縣ヲ除ク

自今鳥獸獵免狀(職獵、遊獵)ニハ農務局ノ割印ヲ押捺セス

●鳥獸獵免狀所有者獵期中族籍姓名ニ異動アルトキ届

出及返納方ヲ定ム

明治二十三年一月
農商務省訓令第三號
廳 府縣東京府神繩
縣ヲ除ク

鳥獸獵免狀ヲ受ケ其獵期中族籍姓名ヲ變換シ又ハ住居ヲ移轉シタルトキハ所轄警察
署郡役所ニテ取扱
フ所ハ郡役所ニ届出シメ或ハ他管ヨリ寄留セル者ニシテ本管ニ復歸シ又管内外ヲ
問ハス轉籍若クハ寄留シテ引續キ銃獵スル者ハ甲乙兩地ノ警察署郡役所ニテ取扱
フ所ハ郡役所ニ届
出シメ該免狀ハ獵期後二十日以内ニ當初受取タル管廳ニ返納セシムヘシ
但明治十七年六月第二十號本省達ハ廢止シ及ヒ本文ニ抵觸スル從前ノ指令ハ取消
ス

●御料地ニ編入セシ六縣下ノ官林等ニテ掛官吏ニ有害

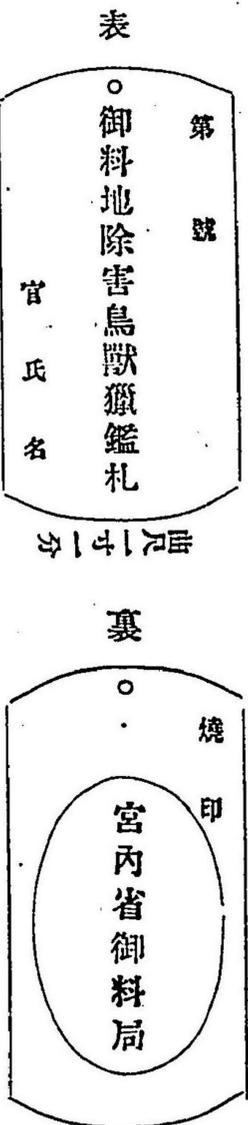
ノ鳥獸銃獵許可並ニ巡視鑑札雛形

明治二十三年三月
農商務省訓令第十九號
神奈川縣 愛知縣 静岡縣

山梨縣 岐阜縣 長野縣

神奈川、愛知、静岡、山梨、岐阜吉城郡、大野
郡ヲ除ク、長野西筑摩郡、上下
伊奈郡、諏訪郡六縣下ノ官林及官有山林原野
等御料地へ編入相成タルニ付宮内省ニ於テハ右掛官吏ニ左記雛形ノ如キ鑑札ヲ渡置
キ巡視ノ際猛獸ノ害ヲ防キ又ハ有害ノ鳥獸ヲ除ク爲メ其御料地内ニ限リ銃獵ヲ差許
シ來ル四月一日ヨリ實施スル等ニ付此旨心得ヘシ

曲尺二寸



●北海道廳三重縣宮崎縣御料地内ニテ有害ノ鳥獸ヲ除

クダメ掛官吏ニ銃獵許可

明治二十三年八月
農商務省訓令第四十三號

北海道廳 三重縣 宮崎縣

北海道廳管下御料局札幌支廳三重縣下同度會事務所宮崎縣下同諸縣事務所々轄御料地内ニ限リ宮内省掛官吏ニ鑑札ヲ渡置キ巡視ノ際猛獸ノ害ヲ防キ又ハ有害ノ鳥獸ヲ除ク爲メ九月一日ヨリ右銃獵ヲ差許セリ
但鑑札離形ハ本年三月本省訓令第十九號ノ通り

●澁入紙製造取締規則

明治二十年七月
勅令第三十六號

朕澁入紙製造取締規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

澁入紙製造取締規則

- 第一條 文字畫紋ヲ澁入レタル紙ヲ製造スル者ハ現品ノ見本ヲ添ヘ管轄廳東京府ハニ届出ヘシ違フ者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第二條 紙幣兌換銀行券公債證書大藏省證券其他政府發行ノ證券ニ類似ノ文字畫紋又ハ凸ニ文字畫紋ヲ澁入レタル紙ヲ人民ニ於テ製造スルコトヲ禁ス違フ者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第三條 此規則ハ本年九月一日ヨリ施行ス

●澁入紙製造届書差出方

明治二十年八月
大藏省令第十二號

文字畫紋ヲ澁入レタル紙ヲ製造スル者ハ一種毎ニ現品二葉ヲ添ヘ左ノ雛形ニ據リ届書ニ通テ管轄廳東京府ハニ差出スヘシ管轄廳又ハ警視廳ハ一通ヲ留メ置キ一通ヲ當省ニ遞達スルモノトス

雛形

(用紙半紙)

澁入紙製造届

一何々渡入紙
右製造仕候間現品相添此段御届仕候也

貫籍

年月日

何 某 印

廳府縣長官宛

●墓地及埋葬取締規則

明治十七年十月
(太政官)布達第二十五號

墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム

墓地及埋葬取締規則

- 第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス
- 第二條 墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス
- 第三條 死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

- 第四條 區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ

- 第五條 墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得タル者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシムヘカラス又警察署ノ許可證ヲ得タル者ニ非サレハ改葬ヲナサシムヘカラス

- 第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ

- 第七條 凡ソ碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ其許可ヲ得スシテ建設シタルモノハ之ヲ取除カシムヘシ

但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス

- 第八條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

右布達候事

●墓地及埋葬取締規則施行方法細目標準

明治十七年十一月
内務省達乙第四十號

警視廳 府縣

本年第二十五號布達第八條ニ記載セル方法細目ハ左ノ條件ヲ標準トスヘシ此旨相達候事

- 第一條 墓地ハ從前許可セラレタル者ニ限ル
但止ム事ヲ得サル事情アリテ之レヲ取廣メ又ハ新設スル場合ニ於テハ地方廳ニ願出ヘシ
- 第二條 墓地ヲ新設スルハ國道縣道鐵道大川ニ沿ハス人家ヲ隔ルコト凡ソ六十間以上ニシテ土地高燥飲用水ニ障ナキ地ヲ撰ムヘシ
- 第三條 墓地ハ種族宗旨ヲ別クス其町村ニ本籍ヲ有シ若クハ其町村ニ於テ死シタルモノハ何人ニテモ之ニ葬ルコトヲ得其從前別段ノ習慣アルモノハ此限ニアラス
但死刑ニ處セラレタル者ハ墓地ノ一隅ヲ區劃シテ其内ニ埋葬スルモノトス
- 第四條 墓地ノ周圍墓地ト墓地ニ非ル地トノ境界ヲ云フニハ樹木ヲ栽ユヘシ墓地ノ内ニハ一丈以上ノ樹木塀牆ヲ存スヘカラサルモノトス
但從前ヨリ現存スル者ハ此限ニアラス
- 第五條 墓地ハ清潔ヲ旨トシ掃除及修繕ヲ怠ルヘカラス
- 第六條 火葬場ハ人家及人民輻湊ノ地ヲ隔ル凡ソ百二十間以上ニシテ風上ニ位セサル地ヲ選ヒ火爐烟筒ヲ備ヘ臭煙ヲ防クノ裝置ヲナシ且周圍ニ塀牆ヲ設クヘシ
但山林原野等ニシテ人家ヲ隔タル場所ナルトキハ格別ナリトス
- 第七條 火葬ハ成ルヘク日没後之ヲ行フヘシ

- 第八條 擴穴ノ深サハ六尺以上タルヘシ若シ土地ニヨリ六尺ニ至リ難キモノ及ヒ火葬ノ遺骨ヲ埋藏スルモノハ格別ナリトス
- 第九條 墓地火葬場ニハ必ス管理者ヲ置キ其姓名ハ區役所又ハ戶長役場ニ届ケ置クヘシ
- 第十條 死者ノ姓名族籍官位勳爵法號及生死ノ年月日建立者ノ姓名ヲ記スルニ止リ誌銘傳贊等ノ碑文ヲ刻セサル墓標ハ所轄警察署ノ許可ヲ受ルノ限ニアラス
- 第十一條 死屍ヲ埋葬又ハ火葬セント欲スル者ハ主治醫ノ死亡届書ヲ添ヘテ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ
醫師ノ治療ヲ受クルノ猶豫ナクシテ死亡シタルモノヲ埋葬又ハ火葬セント欲スルトキハ醫師ノ檢案ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ妊娠四箇月以上ノ死胎ニ係ルトキハ醫師若クハ產婆ノ死産證ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ
- 變死ニ係ルトキハ立會醫師ノ檢案書ニ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ
- 囚徒ノ死屍ヲ引取埋葬又ハ火葬セント欲スルモノハ獄醫ノ死亡證書寫ニ司獄官ノ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ
- 第十二條 區戶長ハ前條ノ届書證書ヲ領收スルニアラサレハ埋火葬ノ認許證ヲ與フ

●明治十七年
乙第四十號達
第十五條刪除
明治十九年
二月
內務省達甲
第五號
北海道廳府縣
明治十七年(十一月)
當省乙第四十
號達中第十五條ヲ
刪除ス

ヘカラス

第十三條 管理者ハ葬主ヨリ領收シタル區戶長ノ認許證ヲ編纂シ毎三箇月所轄警察署ノ檢閲ヲ受ケテ之ヲ區役所又ハ戶長役場ヘ差出スヘシ

第十四條 管理者ハ墓地ノ繪圖及墓籍ヲ調製シ置クヘシ

第十五條

●墓地及埋葬取締規則ニ違背スル者處分方

明治十七年十月
(太政官)達第八十二號

警視廳 府縣

今般第二十五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ違背スルモノハ違背罪ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相達候事

●山野火入取締規則標準

明治二十一年三月
農商務省訓令第五號

警視廳 府縣
沖繩縣ヲ除ク

各地方ニ於テ火入ト稱ヘ山野ノ枯草ヲ燒キ其火延燒シテ隣接官私林ニ災害ヲ及スコト少シトセス因テ地方廳ハ左ノ標準ニ據リ從來ノ習慣ヲ酌量シ山野火入取締規則ヲ

設クヘシ

山野火入取締規則標準

第一條 山野ニ火入ヲナサント欲スル者アルトキハ地方廳ハ左ノ各項ヲ具シタル願書ニ認可ヲ受ケシムヘシ

一 火入期日

一 簡所限地目段別及字番號

一 四至境界ヲ見ルヘキ實地略圖

第二條 前條ノ認可ヲ受ケタル者ハ其火入ヲ爲サント欲スル山野ノ森林原野ニ接シタル境界ニ防火線ヲ設ケ且其森林原野所有者(官林ナルトキハ大小林區界若クハ大林區署派出所若クハ官林巡邏)及警察署ヘ少ナクトモ火入期日五日以前ニ其旨ヲ報告セシムヘシ

第三條 防火線ハ幅三間以上トス都テ柴草ヲ刈採リ落葉並塵芥ヲ除去リ或ハ土堤又ハ堀溝等ノ設ケヲナサシムヘシ

但道路谿谷等ニテ本條ノ防火線ヲ設ケサルモ延燒ノ虞ナキ地ハ此限ニアラス

第四條 日出前日没後及風勢穩ナラサルトキハ火入ニ着手セシムヘカラス

第五條 火入ノ期日間ハ番人ヲ出シ火氣全ク消滅スルニ至ルマテ其場ヲ退カシムヘカラス

第六條 火入認可ヲ受ケタル者ト雖モ郡區長、警察官、大小林區署員、大林區署派出所員、戶長、官林巡邏ニ於テ防火ノ準備不充分ト認メタルトキ又ハ風勢ノ變動等ニヨリ他ニ延燒ノ虞アリト思量スルトキハ直ニ之ヲ中止セシムルコトアルヘシ

●古物商取締條例

明治十六年十二月
布告第五十號

古物商取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年二月一日ヨリ施行ス
右奉 勅旨布告候事

(別冊)

古物商取締條例

第一條 古物商トハ古道具、古本、古書畫、古着、古銅鐵、漬金銀ヲ賣買スル營業者ヲ云フ

袋物屋小間物屋籠甲屋時計屋飾屋箱打屋煙管屋ニシテ其營業ニ屬スル古物ヲ賣買交換スル者及ヒ刀劍商ハ此條例ニ準據スヘシ

第二條 古物商ハ管轄廳東京府ハノ免許ヲ受クヘシ

第三條 古物商物品ヲ賣買シ又ハ交換シタルトキハ警察官ニ於テ其物品及ヒ賣主讓主ヲ調査スルニ差支ナキ様簿冊ニ記載シ且買主讓受主ヲ詳ニスルコトヲ得タルト

キハ之ヲ記載スヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス但身元詳ナル者其證人タルトキ又ハ警察官若クハ巡查ノ認可ヲ受ケタルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴風癲者及ヒ雇人雇主ノ家ニアル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者其證人タルトキハ此限ニアラス

官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章、記號アル物品ハ其賣却シ得ヘキコトヲ證明スル證人二名以上アルニ非サレハ之ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察署ノ命ニヨリ無代價ニテ物品ヲ取戻サル、コトアルヘシ

第六條 古物商ハ營業者タルト否トヲ問ハス盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換シ及寄藏スルトキハ警察官ノ許可ヲ受リ可シ違フ者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮又ハ三十拾圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 古物商ハ自宅又ハ許可ヲ受ケタル市場及賣主讓主ノ居室ノ外ニ於テ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス

第八條 刀劍又ハ之ヲ仕込ミタル器具ハ身元詳ナラサル者及ヒ盜罪賭博ノ處斷ヲ受

ケタル者ニ賣渡シ讓渡シ又ハ露店及ヒ路傍ニ於テ賣渡シ讓渡スコトヲ得ス
 第九條 古物商物品ヲ他府縣ニ運送セントスルトキ又ハ他府縣ヨリ受取リタルトキ
 ハ其物品ノ目錄ヲ所轄警察署ニ届出ツヘシ
 警察官ハ時宜ニ依リ荷作ヲ解キ物品ヲ検査シ之ヲ差押フルコトアルヘシ但費用ハ
 届人之ヲ擔當スヘシ

第十條 贓物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年内ニ類似ノ物品ヲ買取り又ハ交換シ及ヒ寄藏シタルト
 キ若シハ其以前ニ之ヲ得タルマ、所持シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ
 若シ届出テスシテ其理由ヲ辨解スルコト能ハサル者ハ第六條ノ刑ニ同シ

第十二條 物品ノ賣買交換ヲ記載シタル簿冊及品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡
 失シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ古物商ノ店舗ニ臨ミ物品及ヒ簿冊ノ検査ヲ爲シ時
 宜ニ依リ其物品ヲ差押ヘ又ハ時々簿冊ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ古
 物商ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 第二條第三條第四條第五條第七條第八條第九條第十條第十二條第十三條
 ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第六條第十一條第十四條及ヒ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受
 ケタル古物商ハ管轄廳東京府ハ警視廳ニ於テ三月以上三年以下ノ特別取締ニ付スルコトヲ
 得

第十六條 特別取締ニ付セラレタルモノハ尙左ノ項目ニ從フヘシ

- 一 物品ヲ買取り又ハ交換シタルトキハ其賣主讓主ノ住所氏名年齢及物品ノ形状
徽章番號縮柄模様
損所ノ類ヲ云フ 價格年月日時ヲ簿冊ニ記載スヘシ
- 二 日出前日没後ハ物品ヲ買取り又ハ交換シ及ヒ寄藏スルコトヲ得ス
- 三 營業者ニアラサル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換シタルトキハ其物品ヲ原狀ノ
 儘五日間保存スヘシ
- 四 物品ヲ賣渡シ又ハ交換シタルトキハ其物品ノ形状價格年月日時ヲ簿冊ニ記載
 シ且買主讓受主ノ住所氏名年齢ヲ知り得タルトキハ之ヲ記載スヘシ
- 五 毎月一度物品賣買交換ノ簿冊ヲ所轄警察署ニ差出シ其検査ヲ受クヘシ
- 六 住所ヲ移轉シ又ハ旅行シ又ハ他人ヲ宿泊同居セシメントスルトキハ所轄警察
 署ノ認可ヲ受クヘシ

第十七條 前條ニ違背シタル者ハ三圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 特別取締ニ付セラレタルモノ第六條第十一條第十四條第十七條ニ依リ罰

金ニ處セラレタルトキハ直ニ之ヲ納完セシム若シ納完セサルモノハ留置セラレ、コトアルヘシ

第十九條 古物商一年内ニ此條例ヲ再犯シタルトキハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第二十條 此條例ヲ犯シタルモノニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十一條 此條例ヲ犯シテ買取り又ハ交換シタル物品贓物ニ係ルモノハ營業者ニ依ルト否トチ問ハス警察署ニ於テ之ヲ追徴シテ被害者ニ還付スヘシ若シ被害者知レサルトキハ之ヲ領置シ一年ノ後官沒ス

第二十二條 商業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖トモ營業者其責ニ任スヘシ

第二十三條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府、縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

●質屋取締條例

明治十七年三月 布告第九號

質屋取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年五月十五日ヨリ施行ス

右奉 勅旨布告候事

(別冊)

質屋取締條例

第一條 質屋營業ヲ爲ス者ハ管轄廳東京府ハ、ノ免許ヲ受クヘシ

第二條 質屋ハ質物臺帳ヲ備ヘ其紙數ヲ記シ所轄警察署ノ檢印ヲ受クヘシ

第三條 質物臺帳ニハ警察官ニ於テ質物、貸金、質入主及質入、受戻、入換ノ年月日ヲ調査スルニ差支ナキ様記載スヘシ但證人ヲ要スルトキハ質入主及證人ノ實印ヲ捺セシメ置ヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴瘋癲者及雇人雇主ノ家ニアル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス

官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章記號アル物品ハ其質入シ得ヘキコトヲ證明スル證人二名以上アルニ非サレハ之ヲ質物ニ取ルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニ依リ元利金ヲ償フコト無ク質物ヲ取戻サルハコトアルヘシ

第六條 盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第七條 贓物ノ疑アル物品又ハ身柄不相應ト認メタル物品ヲ持來ル者アルトキハ直ニ所轄警察署又ハ巡行ノ警察官巡查ニ密告スヘシ

第八條 流質物ヲ賣拂ハントスルトキハ五日以前ニ其物品目錄ヲ所轄警察署ニ差出スヘシ

第九條 流質物ヲ賣拂ヒタルトキハ警察官ニ於テ其物品、代價及買主ヲ調査スルニ差支ナキ様流質物賣拂帳ニ記載スヘシ

第十條 贓物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年内ニ類似ノ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルトキ若クハ其以前ノ質物及寄藏品中ニ類似ノ物品ヲ發見シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十二條 質物臺帳流質物賣拂帳及品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ質屋ノ店舗ニ臨ミ質物及帳簿ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其質物ヲ差押ヘ又ハ時々帳簿ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ質屋ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 此條例ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰

金ニ處ス

第十五條 此條例ヲ一年内ニ再犯シタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第十七條 營業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ

第十八條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府、除ケ縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

○司法警察

●司法警察規則附錄

明治七年九月 大政官達第百二十八號

使 府縣

本年一月第十四號ヲ以テ相達候司法警察規則附錄別紙ノ通相定候條此旨相達候事

(別紙)

司法警察規則附錄

外國公使及公使館屬員ノ事

●明治九年司法省
達第四十八號司法
警察規則ハ同法
三布告第三十七
號ニ依リ消
滅ニ屬ス依テ現行
ニ係ル附錄ノミ掲
出ス

第一條 外國公使ハ我國憲ヲ以テ竊廢スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家族並ニ公使館屬員書記官隨員公使ノ僕隸書記官ノ家族及ヒ書記官ノ僕隸等官ノ僕隸等モテ公使館ノ名籍ニアル者ヲ云フ及ヒ其家屋車馬迄モ同様ナリト思量ス可シ

第二條 內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ備ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隸ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糾問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ歴テ公使館ヘ報知シ其確諾ヲ待テ後引出ス可シ尤モ其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス

第三條 內國人各公使館及書記官ニ備ハレ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ届出外務省ハ其届書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置クヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル處ヲ聞糺ス時公使館ニ備ハレ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後其處分ヲ施スヘシ若シ其簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置スヘシ但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館内ヘハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ル可カラ

ス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門内ヘ匿入セシ等毫髪ノ間モ猶豫スヘカラサル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受ケテ後館内又ハ邸内ヲ探索スヘシ

第五條 右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論車馬家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合せ而シテ其處分ヲナスヘシ

外國公使屬員罪ヲ犯シ並犯罪ノ內國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條 外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火強姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行フヲ見及フカ或ハ現ニ見スト雖トモ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカタキトキハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申ヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可カラス或ハ屬員ノ內國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼レヨリ引渡ヲ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘシ

第七條 犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル內國人現ニ公使館内ニ備ハレテ公使館ニ住居スル時ハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞館主ニ引渡シテ要求シ其人ヲ受取リテ後之レヲ捕縛ス可

シ若シ館主之ヲ拒ムトキハ其旨ヲ猶外務省へ報知シテ其處分ヲ定ム可シ

●司法警察ニ關スル細則ヲ設ントスルトキ檢事ニ協議

セシム
明治十九年四月
司法省訓令第一號

警視廳 北海道廳 府縣東京府ヲ除ク

爾後各地方ノ便宜ニ基キ司法警察ニ關スル細則ヲ設ケントスルトキハ其地始審裁判所檢事ト協議ノ上告達スヘシ

●司法警察上巡查警部代理ノ件

明治十四年十月
司法省布達甲第五號

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡查ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布達候事

●司法警察事務上警部代理巡查姓名通牒等ノ件

明治十四年十月
司法省達丙第十三號

警視廳 府縣東京府ヲ除ク

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡查ヲシテ警部ノ代

理ヲ爲サシメ不苦候條此旨相達候事

但代理ヲ命スヘキ巡查ノ姓名ハ豫シメ其地方輕罪並違警罪裁判所へ通牒致置候儀ト心得ヘシ

●巡查警部ノ資格ヲ以テ取扱ヒノ件

明治十六年二月
司法省達丁第九號

大審院裁判所

明治十四年十月 當省甲第五號布達ニ據リ巡查ニ於テ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱事件ニ付テハ裁判上渾テ警部同様ノ取扱ヲ爲スヘシ此旨相達候事
但從前ノ指令内訓本文ニ牴觸スル條件ハ取消候事

○第四十四類 監獄

○地方監獄

●監獄則改正

明治二十二年七月
勅令第九十三號

朕監獄則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

監獄則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

- 一 集治監 徒刑流刑及舊法懲役終身ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
 - 二 假留監 徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治監ニ發遣スル迄拘禁スル所トス
 - 三 地方監獄 拘留禁錮禁獄懲役ニ處セラレタル者及婦女ニシテ徒刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
 - 四 拘置監 刑事被告人ヲ拘禁スル所トス
 - 五 留置場 刑事被告人ヲ一時留置スル所トス但警察署内ノ留置場ニ於テハ罰金ヲ禁錮ニ換フル者及拘留ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルコトヲ得
 - 六 懲治場 不論罪ニ係ル幼者及瘖啞者ヲ懲治スル所トス
- 第二條 監獄ハ内務大臣ノ監督ニ屬ス

第三條 集治監北海道ニ在ルモノヲ除ク及假留監ハ内務大臣之ヲ管理シ其他ノ監獄ハ警視總監北

海道廳長官府縣知事東京府ヲ除ク之ヲ管理ス

第四條 内務大臣ハ隨時監獄巡閱官ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ

警視總監北海道廳長官府縣知事東京府ヲ除クハ每年少クトモ一回所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ

裁判官ハ時々其裁判所管轄内ニ在ル拘留監ヲ巡視スヘシ

檢察官ハ時々其裁判所管轄内ニ在ル監獄ヲ巡視スヘシ

第五條 府縣會議員ハ臨時其府縣所轄ノ監獄ヲ巡見スルコトヲ得

第六條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ令狀又ハ宣告書ヲ查閱シテ之ヲ領シ其

領收證ヲ引致シ來リタル者ニ交付シタル後入監セシムヘシ其文書ナクシテ引致セ

ラレタル者ヲ入監セシムルコトヲ得ス

第七條 在監ノ婦女其子ヲ乳養セント請フトキハ其齡滿三歲ニ至ル迄之ヲ許ス

第八條 新ニ入監スル者ノ携有スル財貨物件ハ典獄悉ク點檢シテ之ヲ領置スヘシ

第九條 水火風震等非常ノ變災ニ際シ監獄園内ニ於テ避災ノ手段ナシト考定スルト

キハ典獄ハ其狀況ニ依リ在監ノ囚人懲治人及刑事被告人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避

ケシムヘシ若シ押送スルノ違ナキトキハ一時之ヲ解放スルコトヲ得

解放ニ遭ヒタル者ハ其時ヨリ二十四時以内ニ監署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

第十條 滿期ノ者ヲ釋放スルハ其滿期ノ翌日午前十時ヲ過クヘカラス

第十一條 囚人ハ各罪質ニ從テ嚴ニ其監房ヲ別異シ其中ニ就キ年齡ニ從ヒ左ノ如ク

別異ス

一 滿十二歲以上十六歲未滿ノ者

二 滿十六歲以上二十歲未滿ノ者

三 滿二十歲以上ノ者

四 滿十六歲以上二十歲未滿再犯ノ者

五 滿二十歲以上再犯ノ者

第十二條 懲治人ハ左ノ年齡ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

一 滿八歲以上十六歲未滿ノ者

二 滿十六歲以上二十歲未滿ノ者

三 滿二十歲以上ノ者

第十三條 刑事被告人ハ各罪質ニ從テ其監房ヲ別異シ其中ニ就キ年齡ニ從ヒ左ノ如

ク別異ス

一 滿十二歲以上十六歲未滿ノ者

二 滿十六歲以上二十歲未滿ノ者

三 滿二十歲以上ノ者

第十四條 地方監獄拘留監懲地場ノ一區畫内ニ在ルモノハ増壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第十五條 凡ソ監獄ハ男監女監ノ別ヲ嚴隔スヘシ

第十六條 囚人及刑事被告人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ男ト女トヲ分テ時宜ニ依リ戒具ヲ用フルコトヲ得但懲治人ニハ戒具ヲ用ヒス

第十七條 定役ニ服スヘキ囚人ノ作業ハ毎囚ノ體力ニ應シテ之ヲ課シ一日ノ課程ヲ定メテ服役セシムヘシ但科程ノ標準ハ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十八條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス

一月一日 元始祭

孝明天皇祭 紀元節

春季皇靈祭 神武天皇祭

秋季皇靈祭 神嘗祭

天長節 新嘗祭

十二月三十一日

父母ノ喪ニ遭フ者ハ三日免役ス

第十九條 無定役囚ニシテ監獄内ニ於テ自ラ作業ヲ爲サント請フトキハ之ヲ許シ

作業ノ種類ハ典獄之ヲ指定ス刑事被告人モ亦之ニ準スルコトヲ得

第二十條 懲治人ニハ毎日五時以内農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

第二十一條 役場ハ男女ノ別ヲ嚴隔シ仍ホ定役囚無定役囚懲治人ノ役場ハ各別ニ之ヲ設ケ其中ニ就キ丁年以上ノ者ト未丁年者トヲ區別スヘシ

第二十二條 定役ニ服スヘキ囚人現役一百日ヲ經レハ始メテ各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分シテ重罪囚ニハ其二分輕罪囚ニハ其四分ヲ與ヘ餘分ハ監獄ノ費用ニ供ス

無定役囚懲治人及刑事被告人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ之ヲ十分シテ其六ヲ與ヘ

其餘分ハ監獄ノ費用ニ供ス定役ニ服スル囚人ニシテ科程外ノ作業ヲ爲ス時ノ工錢

モ亦之ニ準ス

第二十三條 前條ニ依リ作業者ニ與フヘキ工錢ハ典獄之ヲ領置スヘシ

第二十四條 囚人懲治人及刑事被告人逃走シ監署ニ領置ノ貨物アルトキハ逃走ノ日

ヨリ滿一箇年ヲ經テ之ヲ受クヘキ者ナキトキハ監獄慈惠ノ用ニ充ツ刑死者死亡者

ノ領置貨物ニシテ受クヘキ者ナキトキモ亦同シ

第二十五條 囚人及懲治人監署ニ領置ノ貨物ヲ以テ其父母妻子ノ扶助及正當ノ費用

ニ充ント請フトキハ典獄其事情ヲ取糺シテ之ヲ許可スヘシ

刑事被告人ニ係ルトキハ當該裁判官ノ允許ヲ經ヘシ

第二十六條 囚人及懲治人ノ衣服臥具ハ之ヲ貸與ス但拘留囚ハ自衣ヲ著スルコトヲ得

第二十七條 刑事被告人ノ衣服ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セシト請フ者アルトキハ之ヲ許ス亦貧ニシテ衣類ヲ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第二十八條 囚人及懲治人一人一日ノ食糧

一 下白米十分ノ四 七合乃至八合 最モ強キ作業ニ服スル者

一 麥 十分ノ六

一 同 五合乃至六合 作業ニ服スル者

一 同 四合 作業ニ服セサル者

一 同 三合 十歳未満ノ幼者

一 菜 金壹錢以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗黍薯ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルコトヲ得又麥粟稗黍等ニ乏シキ地方ニ於テハ内務大臣ノ認可ヲ得テ下白米ノミヲ給スルコトヲ得

刑事被告人モ亦前項ニ準ス但自費ヲ以テ食物ヲ購求セント請フトキハ之ヲ許ス

第二十九條 定役ニ服スル男囚ノ髮ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚ハ常ニ剃除セシム

定役ニ服スル女囚ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルコトヲ許サス

第三十條 囚人及懲治人ニハ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第三十一條 囚人十六歳未満ノ者及懲治人ニハ毎日四時以內讀書習字算術ヲ教フヘシ

第三十二條 囚人懲治人及刑事被告人現行ノ法律命令書ヲ看ント請フトキハ之ヲ許ス

囚人及懲治人書籍ヲ看ント請フトキハ總テ之ヲ許ス但領置外ノ書籍ハ當該裁判官ノ之ヲ許ス

刑事被告人書籍ヲ看ント請フトキハ總テ之ヲ許ス但領置外ノ書籍ハ當該裁判官ノ承認ヲ經ヘキモノトス

新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノハ前二項ノ例ニアラス

第三十三條 囚人其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ一箇月ニ一次懲治人ハ一箇月ニ二次トシ共ニ一通ニ過クルコトヲ得ス但官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ典獄ニ於テ之ヲ必要ト認メタルトキハ此限ニ在ラス

第三十四條 囚人及懲治人ノ發スル信書又ハ外人ヨリ送リ來ル信書ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中不正不良ニ涉リ又ハ其改悛ヲ妨クルモノト認ムルトキハ之ヲ發贈

付與スルコトヲ許サス但刑事被告人ニ係ル信書ハ總テ當該裁判官ノ檢閲ヲ經ヘキモノトス

第三十五條 囚人懲治人及刑事被告人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄ノ立會ヲ以テ之ヲ許スヘシ但典獄ニ於テ形跡ノ疑フヘキコトアリト認ムルトキハ之ヲ許サハルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタル者ハ裁判言渡アル迄辯護人ヲ除クノ外其現在地ノ裁判所長ノ允許ヲ受クヘク密室監禁者ハ當該裁判官ノ允許ヲ受クヘシ

第三十六條 囚人懲治人及刑事被告人疾病ニ罹ルトキハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第三十七條 囚人懲治人及刑事被告人死亡シタルトキハ典獄看守長醫師ノ立會ヲ以テ之ヲ檢視シ監署ニ於テ速ニ其本籍ニ通知スヘシ其遺骸ハ親屬若クハ故舊ノ之ヲ請フ者ニ下付ス但死亡後二十四時以內ニ在テ其下付ヲ請フ者無キトキハ監署ニ於テ之ヲ假葬シ其姓名ヲ記シタル木牌ヲ立ツヘシ

刑死者ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ五分時ヲ過サレハ其遺骸ヲ絞架ヨリ解下シ之ヲ埋

葬シ若クハ下付スルコトヲ許サス

第三十八條 刑事被告人ニ其親屬故舊ヨリ書類書籍用紙衣服臥具其他必要ノ物品又ハ飲食物ヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許ス但書類書籍ハ當該裁判官ノ檢閲ヲ受クヘシ其密室監禁者ニ係ルトキハ他物ニ於テモ亦同シ

新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノハ前項ノ例ニアラス

第三十九條 囚人及懲治人ニハ現行ノ法律命令書並ニ書籍用紙印紙郵便切手貨幣及內務大臣ニ於テ許可シタルモノヲ除クノ外差入ヲ許サス但書籍ハ第三十二條ニ記載シタル制限ニ從フ

第四十條 囚人獄則ヲ謹守シ作業ニ勉勵シ且改悛ノ行爲アル者ト典獄ニ於テ確認ナルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

賞譽セシ者ニハ之ヲ表スル爲メ賞表ヲ與ヘ獄衣ニ縫著セシムヘシ

賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ憑據ト爲スコトヲ得

第四十一條 賞表ヲ有スル囚人ハ其監房ヲ區別シテ尋常囚人ト別異シ賞表ノ多寡ニ應シテ優遇ヲ爲スヘシ

第四十二條 囚人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ役場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時間坐作ノ

役ヲ課ス

- 二 減食 一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス
- 三 闇室 闇室ニ入レ一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス
仍ホ臥具ヲ禁ス

屏禁ハ二月以内減食ハ一週日以内闇室ハ五晝夜以内トス

第四十三條 囚人十六歳未満ノ者及懲治人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

- 一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム
- 二 減食 一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減ス

獨愼ハ七晝夜以内減食ハ三日以内トス

第四十四條 減食若クハ闇室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ其處罰中ハ醫師ヲシテ毎日之ヲ視察セシメ醫師ニ於テ身體ニ妨アルヲ證スルトキハ處罰ヲ中止スヘシ

第四十五條 無期徒刑ノ囚人重罪ヲ犯シ若クハ逃走シ又ハ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シタルトキハ一年以上五年以下其他ノ輕罪ヲ犯シタルトキハ一月以上一年以下兩脚又ハ一脚ニ鈇ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鈇ニ貫キ腰間ニ綴

帶セシメ縲帶ノ所ニ下鈇ス其監房ニ在ルモ晝間ハ仍ホ之ヲ施スモノトス
若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス若シ外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第四十六條 施鈇中ノ者病ニ罹リ醫師ノ診斷ニ依リ鈇ノ解除ヲ必要トスルトキハ一時之ヲ解除スルコトヲ得但解除中經過セシ日數ハ施鈇期限ニ算入セス

第四十七條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受ケタルトキハ其情狀ニ因リ賞表一箇又ハ數箇ヲ褫奪スルコトアルヘシ

第四十八條 獄則ヲ犯シ罰ニ處セラレタル者改悛ノ狀著シキトキハ處罰中ト雖モ之ヲ免スルコトヲ得

第四十九條 免幽閉ヲ受ケタル流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以内之ヲ拘留スルコトヲ得

第五十條 囚人懲治人及刑事被告人司獄官吏ノ處置ニ對シ情苦ヲ訴ヘントスルトキハ第四條ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第五十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ內務大臣之ヲ定ム

第五十二條 此規則ハ陸海軍ニ屬スル監獄ニ適用セサルモノトス

●監獄則施行細則 明治二十二年七月 內務省令第八號

監獄則施行細則左ノ通相定ム

監獄則施行細則

第一章 規程

第一條 此細則ニ於テ在監人ト稱スルハ囚人懲治人及刑事被告人ヲ云フ

第二條 新ニ入監スル者アルトキハ先ツ之ニ番號ヲ付シ一小房内ニ於テ通身ヲ検査シ了リテ名籍ニ其要項ヲ詳録シ仍ホ房内揭示ノ事項ヲ説示スヘシ

第三條 各監房内ニハ在監人ノ遵守スヘキ事項ヲ揭示シ傍訓ヲ施シ解シ易カラシムヘシ其事項左ノ如シ

- 一 在監人ハ互ニ和順ヲ主トシ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一 教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容止ヲ正フスヘシ 刑事被告人ヲ拘禁スル監房ニハ此項ヲ除ク
- 一 毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及席壁圓圖等ヲ掃除スヘシ
- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ヘ唾ハキ及貯水ヲ濫用スヘカラス

一 房外ニ出タル時ハ他人ト手ヲ交ヘ又ハ濫リニ交談スヘカラス

一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話發聲又ハ濫リニ起步スヘカラス但晝間ト雖放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀シ及隣房ヘ通聲交談スヘカラス

一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ争ヒ若クハ賭博類似ノ遊戯ヲナシ或ハ他人ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アルヘカラス

一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ談話シ及服役セサル時間タリトモ部外ノ役場ニ至ルヘカラス

一 許可ヲ得スシテ物件ヲ受授貸借スヘカラス

一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一 病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保シ看病人タル者ハ切實ニ之ヲ看護スヘシ

第四條 領置ノ貨物ハ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄之ニ證印スヘシ

第五條 領置物品中保存ニ堪ヘ難キモノハ本人ヘ告知ノ上之ヲ賣却シテ其代金ヲ領置スルコトヲ得

第六條 入監中外人ヨリ差入タル貨物ニシテ領置スルモノモ亦第四條第五條ノ例ニ依ル

第七條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄之ヲ點檢シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第八條 入監後出房セシメタル者ニ對シテハ還房ノ際通身ノ検査ヲ爲スヘシ

第九條 通身ノ検査ハ一人宛之ヲ爲シ他人ヲシテ見セシムヘカラス但役場教誨堂運動場及浴室等ヨリ一時多人數ヲ還房セシムル場合ハ此限ニ在ラス

第十條 男子ノ檢身ハ看守長臨監シ看守之ヲ行ヒ女子ニ係ルトキハ看守長臨監シ女監取締之ヲ行フヘシ

第十一條 典獄看守長ハ日夜不時ニ監獄ノ内外ヲ巡視スヘシ但看守長ノ巡視ハ一晝夜三回以上タルヘシ

第十二條 典獄ハ看守及女監取締ノ警守受持場ヲ定メ晝夜絶ヘス之ヲ巡警セシムヘシ

第十三條 典獄ハ看守長及看守女監取締ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録サシムヘシ但押送途中ニ在テハ押送官吏之ヲ録シテ典獄ニ差出スヘシ

第十四條 看守長ハ毎日二回以上各監房ニ就キ在監人ノ員數ヲ點檢シ毎日一回以上監房ヲ検査スヘシ

第十五條 囚人及懲治人ノ放免期日ハ入監後典獄直ニ之ヲ調査シテ名籍簿ニ記入シ

仍ホ本人ニ告知スヘシ

第十六條 囚人及懲治人ニシテ釋放スヘキ者アルトキハ典獄名籍簿ニ照シテ其氏名等ヲ問糺シ釋放スル旨ヲ言渡スヘシ刑事被告人ニシテ放免保釋及責付スヘキ者アルトキモ亦同シ

第十七條 領置ノ貨物ヲ下付スルトキハ典獄其名數ヲ領置簿ニ照シテ其旨ヲ記シ受取人ヲシテ證明セシムヘシ

第十八條 刑事被告人ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲スルコトヲ得サラシメ裁判所又ハ他監ニ引致ノトキモ同行セシムルコトヲ得ス

第十九條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ宣告書其他必要ノ文書及領置ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ

第二十條 在監人押送ノ際送致スル貨物ハ典獄ニ於テ目錄ヲ作り其貨物並ニ目錄ハ押送官吏ヲシテ保管セシムヘシ但金錢ハ破綻ノ憂ナキ様嚴緘シ之ニ封印ヲ捺スヘシ

第二十一條 特赦アリタルトキハ典獄ハ速ニ其旨ヲ所屬長官ニ申報シ所屬長官ハ内務大臣ニ申報スヘシ

第二十二條 特赦免幽閉假出獄ノ申渡ハ其裁可又ハ許可ノ監署ニ達シタル時ヨリニ

十四時間以内ニ之ヲ爲スヘシ

假出獄ノ申渡ヲ受ケタル者ニハ典獄其證票ヲ與ヘテ最近ノ警察署ヘ護送スヘシ

第二十三條 特赦免幽閉假出獄ヲ申渡シ又ハ賞表ヲ授與スルハ別ニ定ムル方式ニ依ル但賞表ハ免役日若クハ日曜日ニ於テ之ヲ與フヘシ

第二十四條 免幽閉ノ申渡ヲ受ケタル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限り居住セシメ典獄之ヲ監督スヘシ但土地家屋ナキ者ニハ之ヲ貸與スヘシ

已ムテ得サル事故アリテ一時限外ニ出ノコトヲ請フトキハ典獄其事由ヲ取糺シテ許可スルコトアルヘシ

第二十五條 免幽閉中重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ上免幽閉ヲ爲シタル所ノ監獄ニ於テ直ニ其刑ヲ執行スヘシ

第二十六條 免幽閉ノ申渡ヲ受ケタル者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キテ同居シ又ハ結婚セント請フトキハ典獄其生計ノ方法ヲ取糺シテ許可スヘシ

第二十七條 假出獄中重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ上現ニ之ヲ管束スル所ノ典獄ニ於テ假出獄ノ停止ヲ言渡シ證票ヲ取上ケ其旨ヲ所屬長官ニ申報シ所屬長官ハ内務司法兩大臣ニ申報スヘシ

甲地ニ於テ假出獄ヲ許サレタル者ヲ乙地ニ於テ停止シタルトキハ乙地典獄ヨリ其

取上タル證票ヲ甲地典獄ニ送致シテ其旨ヲ通知スヘシ

前項ニ依リ乙地ニ於テ假出獄ヲ停止シタルトキハ集治監ニ入ルヘキ者ヲ除クノ外其地監獄ニ拘禁シ前刑後刑トモ乙地ニ於テ之ヲ執行スヘシ

第二十八條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者アルトキハ他ノ者ト別異シ一房ニ一名ヲ拘禁シテ特ニ戒護ヲ嚴ニスヘシ

第二十九條 死刑ノ執行ハ午前十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

第三十條 死刑ヲ執行スヘキ者同時ニ二人以上アルトキハ之ニ前後ヲ付シ一人宛執行シ其間他ノ受刑者ヲシテ刑場ニ入ラシムヘカラス

第三十一條 死刑ハ受刑者自衣著用ノ儘之ヲ執行スルコトヲ得

第三十二條 監房ハ看守長ノ立會アルニアラサレハ開扉スルコトヲ得ス但在監人ノ在ラサルトキハ此限ニ在ラス

第三十三條 囚人ノ監房ニハ疊ヲ敷クコトヲ得ス但病室及拘留囚ノ監房ハ此限ニ在ラス

第三十四條 密室ハ拘置監ニ設クヘシ

闇室ハ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セサラシムルヲ要ス

密室及閤室ハ一室一人ヲ限トス

第三十五條 接見室ハ監舎ノ首部ニ設クヘシ

第三十六條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第三十七條 各監房ノ鑰匙ハ彼此適用スヘキ爲メ其製式ヲ同クスヘシ

第三十八條 監房ノ鑰匙ハ常ニ一定ノ場所ニ置キ看守長之ヲ監守スヘシ

第三十九條 看守所ニハ閤室ヨリ鐵線ノ類ヲ通架シ置キ發病等ヲ報スルノ用ニ供スヘシ

第四十條 監獄ニハ防火具ヲ備ヘ置クヘシ

第四十一條 燈火ハ監房外ニ置キ在監人之ニ觸ル、ノ虞ナカラシムヘシ

第二章 役法及時限

第四十二條 定役ニ服スヘキ入監人アルトキハ典獄醫師ヲシテ其身體ヲ診視セシメテ強弱ヲ分チ就業簿ニ記入シ其就役スヘキ業名ヲ指定スヘシ

第四十三條 男囚ノ監獄内ノ作業ハ春米瓦工煉化石工石工碎石鍛冶工油絞工耕耘木挽工抄紙工木工桶工藁工炊事掃除ノ内ヲ選ムヘシ

女囚ノ作業ハ紡績裁縫機織洗濯ノ内ヲ選ムヘシ

右ノ外各地方ノ便宜ニ依リ他ノ作業ニ服役セシメントスルトキハ内務大臣ノ認可

ヲ得ヘシ

第四十四條 男囚ハ碎石開墾採礦土方石工耕耘運搬若シハ監獄ノ用ニ限リ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得其外役ニ服セシムルトキハ鍊鐵ノ鎖ヲ以テ二囚毎ニ聯絆シ晴雨ヲ問ハズ笠ヲ以テ其面ヲ掩ハシムヘシ

外役ノ囚徒ハ一組十人以上二十人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監視セシム但島地ニシテ逃走ノ虞ナシト認ムル場合ニ於テハ此割合ヲ變更スルコトヲ得

第四十五條 定役ニ服スヘキ者刑期五分ノ三ヲ經過シタルトキハ典獄ニ於テ現ニ其

監獄ニ在ル所ノ作業ノ中ニ就キ出獄後自活ノ道ヲ得ヘキト認ムルモノヲ指定スヘシ但刑期一年未滿ノ者ハ此限ニ在ラス

第四十六條 定役ニ服スヘキ者ハ風雨積雪等ノ爲メ既定ノ作業ニ就クシメ難キトキト雖他ノ作業ニ就ケ休役セシムヘカラス

第四十七條 科程ノ了否ハ正午ト罷役前トニ於テ毎日二回之ヲ検査スヘシ

第四十八條 毎日囚人ヲシテ作業ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整刑セシメ看守長及看守女監取締點檢ヲナスヘシ還房セシムルトキモ亦同シ

第四十九條 在監人ノ起床ヨリ就寢ニ至ル迄ノ動作時限ハ別表ニ之ヲ定ム但作業ニ

依リ己ムヲ得サル場合ニ於テハ内務大臣ノ認可ヲ得テ其期限ヲ伸縮スルコトヲ得
第五十條 起床還房就役罷役就寢其他ノ動止ヲ命スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監
一齊ニ動止セシム

第三章 工錢

第五十一條 各種ノ工錢ハ其他普通ノ傭工錢ニ照シ各自ノ技能ト就役時間トニ應シ
一日若干ト定ムヘシ

第五十二條 免役日ニ於テ囚人ヲ炊事掃除病者ノ看護其他監獄ノ用ニ使役スルトキ
ハ科程外ノ工錢ヲ與フヘシ

第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ示
スヘシ

第四章 給與

第五十四條 囚人ノ衣類ハ赭色懲治人ノ衣類並ニ刑事被告人ニ貸與スル衣類ハ淺葱
色ニシテ總テ筒袖トシ長短二種ニ分ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ
總テ長衣トス

第五十五條 囚人ノ蒲團ハ赭色懲治人及刑事被告人ノ蒲團ハ淺葱色トシ各自ニ貸與
シ二人以上合著セシムルコトヲ得ス

第五十六條 刑事被告人ノ著用スル衣類ニシテ時季ニ適セス又ハ汚穢シテ衛生上ニ
害アリト認ムルトキハ之ヲ貸與ス

第五十七條 在監人ノ衣服ノ外襟及蒲團ニハ白布ヲ縫著シ之ニ其者ノ番號ヲ墨書ス
ヘシ

第五十八條 在監人ニ貸與スル衣類雜具左ノ如シ

通常服

一單衣

一裕

一綿入

一襦袢

就役服

一單衣

一裕

一綿入

一襦袢

一股引

婦女ニハ股引ニ代テ前垂ヲ貸與スルコトヲ得

雜具

一蒲團

一蚊櫥

一莞筵

一木枕

一帶長三
尺

一揮長三
尺

一手巾

一簑

一笠

一履物

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澁澁補綴シテ其用ニ充ルコト
ヲ得此他草鞋用紙ハ之ヲ付與ス

極寒ノ地方ニ於テハ内務大臣ノ認可ヲ得テ足袋ヲ貸與スルコトヲ得

第五十九條 病者ニ貸與スル衣類雜具ハ醫師ノ意見ヲ問ヒタル上典獄ニ於テ變更又

ハ増減スルコトヲ得

第六十條 病者ノ食量ハ醫師ノ診斷ニ依テ之ヲ増減スヘシ

第六十一條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ユルコトヲ要スル
トキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許可スルコトアルヘシ

第六十二條 囚人及懲治人作業ニ勉勵シテ食費ヲ償フニ足ルヘキ工錢ヲ得ル者ニハ

其請ニ由リ置領シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但其種類分量ハ

典獄豫メ制限ヲ設クヘシ

第六十三條 工錢ヲ以テ食物ヲ購給スルハ一月十回以下ニシテ一回金三錢ヲ過ルコ

トヲ得ス但其購給費ハ領置工錢ノ半額ヲ過クヘカラス

第六十四條 食用器具左ノ如シ

一木椀

一箸

一飯器

第六十五條 監房常置ノ器具左ノ如シ

一貯水器並ニ飲器 木製

一唾壺 木製又ハ竹製